人造美人
ショート・ミステリイ
星新一
BAR

人造美人

ショート・ミステリイ

星新一

人造美人

ショート・ミステリイ

星新一

新潮社

¥ 300

装幀　六浦光雄

目次

人造美人

—ショート・ミステリイ—

人造美人

——ボッコちゃん——

そのロボットはうまくできていた。女のロボットだった。人工的なものだから、いくらでも美人につくれた。あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができ上がった。もっとも、少しツンとしていた。だが、ツンとしていることは、美人の条件なのだった。

ほかにはロボットを作ろうなんて誰も考えなかった。人間と同じに働くロボットを作るのは馬鹿な話だ。そんなものを作る費用があれば、もっと能率の良い機械ができたし、雇われたがっている人間はいくらもいたのだから。

それは道楽で作られた。作ったのは、バーのマスターだった。バーのマスターなどというものは家に帰れば酒などは飲まない。彼にとっては、酒なんかは商売道具で、自分で飲むものとは思えなかった。金は酔っぱらい達がもうけさしてくれるし、時間もあるし、それでロボットを作ったのだった。全くの趣味だった。

趣味だったからこそ、精巧な美人ができたのだ。本物そっくりの肌ざわりで、見わけがつかなかった。むしろ、見たところでは、そのへんの本物以上にちがいない。

だが、頭はからっぽに近かった。彼もそれまでは手が回らない。簡単なうけ答えができるだけだし、動作の方も酒を飲むことだけだった。

彼は、それが出来上がると、バーに置いた。そのバーにはテーブルの席もあったけれど、ロボットはカウンターのなかに置かれた。ボロを出しては困るからだった。

お客は新しい女の子が入ったので、一応声をかけた。名前と年を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あとはだめだった。それでもロボットと気がつくものはいなかった。

「名前は」
「ボッコちゃん」
「としは」
「まだ若いのよ」
「いくつなんだい」
「まだ若いのよ」
「だからさ」
「まだ若いのよ」

この店のお客は上品なのが多いので、誰もこれ以上は聞かなかった。

「きれいな服だね」
「きれいな服でしょ」
「何が好きなんだい」
「何が好きかしら」
「ジンフィーズ飲むかい」
「ジンフィーズ飲むわ」

酒はいくらでも飲んだ。その上、酔わなかった。

美人で若くて、ツンとしていて、答がそっけない。お客は聞き伝えてこの店に集まった。ボッコちゃんを相手に話をし、酒を飲み、ボッコちゃんにも飲ませた。

「お客のなかで誰が好きだい」
「誰が好きかしら」
「僕を好きかい」
「あなたが好きだわ」
「こんど映画へでも行こう」
「映画へでも行きましょうか」

「いつにしよう」
答えられないときには信号が伝わって、マスターがとんでくる。
「お客さん。あんまりからかっちゃあいけませんよ」
といえば、たいていつじつまがあって、お客はにが笑いして話をやめる。
マスターは時々しゃがんで、足の方のプラスチック管から酒を回収し、お客に飲ました。
だが、お客は気がつかなかった。――若いのにしっかりした子だ。ベタベタおせじを言わないし、飲んでも乱れない――とますます人気が出て、立ち寄る者がふえていった。
そのなかに、青年がいた。ボッコちゃんに熱をあげ、通いつめていたが、のれんに腕押しのようで、恋心はかえって高まっていった。それで、勘定がたまって、支払いに困り、とうとう家の金を持ち出そうとして、父親にこっぴどく怒られてしまったのだ。
「もう二度と行くな。この金で払ってこい。だが、これで終りだぞ」
彼はその支払いにバーに来た。今晩で終りと思って、自分でも飲んだし、お別れのしるしといって、ボッコちゃんにもたくさん飲ませた。
「もう来られないんだ」
「もう来られないの」
「悲しいかい」

「悲しいわ」
「本当はそうじゃないんだろう」
「本当はそうじゃないの」
「君ぐらい冷たい人はいないね」
「私ぐらい冷たい人はいないの」
「殺してやろうか」
「殺してちょうだい」
彼はポケットから薬の包を出して、グラスに入れ、ボッコちゃんの前に押しやった。
「飲むかい」
「飲むわ」
彼のみつめている前で、ボッコちゃんは飲んだ。
彼は「勝手に死んだらいいさ」といい、
「勝手に死ぬわ」の声を背に、マスターに金を渡して、外に出た。夜は更けていた。
マスターは青年がドアから出ると、残ったお客に声をかけた。
「これから私がおごりますから、皆さん大いに飲んで下さい」
おごりますといっても、プラスチックの管から出した酒を飲ませるお客が、もう来そうも

ないからだった。
「わーい」
「いいぞ、いいぞ」
　お客も店の子も乾杯しあった。マスターもカウンターのなかでグラスをちょっと上げてほした。
　その夜、バーはおそくまで灯がついていた。ラジオは音楽を流しつづけていた。だが、だれも帰りもしないのに人声だけは絶えていた。
　そのうちラジオも「おやすみなさい」といって、音を出すのをやめた。ボッコちゃんは「おやすみなさい」とつぶやいて、次は誰が話しかけてくるかしらと、ツンとした顔で待っていた。

おーい　でてこーい

　台風が去って、すばらしい青空になった。
　都会からあまりはなれていないある村でも被害があった。村はずれの山に近い所にある小さな社が、がけくずれで流されたのだ。
　朝になってそれを知った村人たちは
「あの社はいつからあったのだろう」
「なにしろずいぶん昔からあったらしいね」
「さっそく建て直さなくてはならないな」
　と言いかわしながら、何人かがやってきた。
「ひどくやられたものだ」
「このへんだったかな」
「いや、もう少しあっちだったようだ」

その時、一人が声を高めた。
「おい、この穴は、いったいなんだい」
みんなが集まってきたところには、径一メートルぐらいの穴があった。のぞき込んでみたが、なかは暗くて何も見えない。だが、地球の中心までつき抜けているように深い感じがした。
「狐の穴かな」
そんなことを言った者もあった。
「おーい、でてこーい」
若者は穴に向って叫んでみたが、底からは何の反響もなかった。彼は次に、そばの石ころを拾って投げ込もうとした。
「ばちがあたるかもしれないから、やめとけよ」
と老人がとめたが、彼は勢いよく石を投げこんだ。だが、底からはやはり反響がなかった。村人たちは、木を切って縄でむすんで柵をつくり、穴のまわりを囲った。そして、ひとまず村にひきあげた。
「どうしたもんだろう」
「穴の上にもとのように社をたてとこうじゃないか」

相談がきまらないまま一日たった。早くも聞きつたえて、新聞社の自動車がかけつけた。まもなく、学者がやってきた。そして、おれにわからないことはない、といった顔つきで穴の方に向った。つづいて、物好きな弥次馬たちが現われ、目のキョロキョロした利権屋みたいなものもチラホラみうけられた。駐在所の巡査は、穴に落ちる者があるといけないので、つきっきりで番をした。
新聞記者の一人は、長い紐の先におもりをつけて穴にたらした。紐はいくらでも下っていった。しかし、紐がつきたのでもどそうとしたが、上らなかった。二、三人が手伝って無理にひっぱったら、紐は穴のふちでちぎれた。写真機を片手にそれを見ていた記者の一人は、腰にまきつけていた丈夫な綱を黙ってほどいた。
学者は研究所に連絡して、高性能の拡声機をもってこさせた。底からの反響を調べようとしたのだ。音をいろいろ変えてみたが反響はなかった。学者は首をかしげたが、みんなが見つめているのでやめるわけに行かない。拡声機を穴にぴったりつけ、音量を最大にして、長い間ならしつづけた。地上なら何十キロと遠くまで達する音だ。だが、穴は平然と音をのみ込んだ。
学者は内心は弱ったが、落着いたそぶりで音を止め、もっともらしい口調で
「埋めてしまいなさい」

と言った。わからないことは、なくしてしまうのが無難だった。
見物人たちは、なんだこれでおしまいか、といった顔つきで引き上げようとした。その時、人垣をかきわけて前に出た利権者の一人が申し出た。
「その穴を私に下さい。埋めてあげます」
村長はそれに答えた。
「埋めていただくのは有難いが、穴をあげるわけには行かない。そこに社をたてなくてはならないんだから」
「社ならあとで私がもっと立派なのをたててあげます。集会場つきにしましょうか」
村長が答えるさきに、村の者たちは
「本当かい。それならもっと村の近くがいい」
「穴のひとつぐらいあげますよ」
と口々に叫んだので、決ってしまった。もっとも村長だって異議はなかった。
その利権屋は、インチキではなかった。小さいけれど集会場つきの社を、もっと村の近くに建ててくれた。
新しい社で秋祭りの行われた頃、利権屋の設立した穴埋め会社も、穴のそばの小屋で小さな看板をかかげた。

利権屋は、仲間を都会で猛運動させた。すばらしく深い穴がありますよ。学者も少なくとも五千メートルはあると言っています。原子炉のカスなんか捨てるのに絶好でしょう。
官庁は、許可を与えた。発電会社は、争って契約した。村人たちはちょっと心配したが、数千年は絶対地上に害は出ない、と説明され、また利益の配分をもらうことで納得した。しかも、まもなく都会から村まで立派な道路が作られたのだ。
トラックは道路を走り、鉛の箱を運んできた。穴の上で蓋はあけられ、原子炉のカスは穴のなかに落ちていった。
外務省や防衛庁から、不要になった機密書類を捨てにきた。監督についてきた役人たちは、ゴルフのことを話しあっていた。下っぱの役人達は、書類を投げ込みながら、パチンコの話をしていた。
穴はいっぱいになる気配を示さなかった。よっぽど深いのか、それとも、底の方でひろがっているのかも知れないと思われた。穴埋め会社は、少しずつ事業を拡張した。
大学で伝染病の実験に使われた動物の死骸も運ばれてきたし、引き取り手のない浮浪者の死体も加わった。海に捨てるより良いと、都会の汚物を長いパイプで穴まで導く計画も立った。
穴は都会の住民たちに安心感を与えた。次々と生産することばかりに熱心で、後始末に頭

を使うのはだれもがいやがっていたのだ。また、ひとびとは生産会社や販売会社でばかり働きたがり、クズ屋にはなりたがらなかった。だが、この問題も、穴によって、すこしずつ解決して行くだろうと思われた。

婚約のきまった女の子は、古い日記を穴にすてた。かつての恋人ととった写真を穴にすてて新しい恋愛を始める者もいた。警察では押収した巧妙なニセ札を穴で始末し安心した。犯罪者たちは証拠物件を穴に投げ込んでホッとした。

穴は、捨てたいものは、何でも引き受けてくれた。穴は、都会の汚れを洗い流してくれ、海や空が以前にくらべていくらか澄んできたように見えた。

その空をめざして、新しいビルが、次々と作られていった。

ある日、建築中のビルの高い鉄骨の上で鋲打ち作業を終えた工員が、ひと休みしていた。彼は頭の上で

「おーい、でてこーい」

と叫ぶ声を聞いた。しかし、見上げた空には何もなかった。青空がひろがっているだけだった。

彼は、気のせいかな、と思った。そして、もとの姿勢にもどった時、声のした方角から小

さな石ころが彼をかすめて落ちていった。

だが彼は、ますます美しくなって行く都会のスカイラインをぼんやり眺めていたのでそれには気がつかなかった。

生活維持省

「課長、おはようございます。このところよい天気がつづいて気持がいいですね。もっとも、午後になると少しは暑くなるかもしれませんが」
　あけはなたれた窓から流れこんでくる若葉の匂いを含んだ風を受けながら、私は、上役の机の前に立った。
「ああ、おはよう。きょうの仕事はこれだけだ」
　と、課長は無表情な目で、遠くの青空で育ちはじめている入道雲をみつめたまま言った。そして、机の上にある何枚かのカードを片手で私の方に押しやった。だが、課長のこういうぶっきらぼうな態度は、今にはじまったことではない。私は気にすることもなく、そのカードを重ねてポケットにおさめて席にもどり、となりの同僚に声をかけた。
「さあ、仕事にでかけよう。午前中は君が運転してくれないか。午後からは交代して僕がやるから」

　私たちが車に乗った時、同僚はハンドルの上に手をのせたまま聞いた。
「ところで、きょうの道順は、どういうことになるんだい」
　私はポケットから、さっきのカードの束を取り出そうとしたが、考え直して、こう提案した。
「そうだな。だが、どうだろう。こんなに、天気もいいんだし、道順なんて能率的なことを言わないで、ドライブを兼ねてゆっくり回ろうじゃないか。カードを引き出して、出た順番にさ」
「それもいいだろう。われわれは、きめられた仕事をその日のうちに終えればいい役所づとめなんだから」
　と、彼がうなずいたので、私は片手をポケットに入れて、カードを一枚だけ引っぱりだした。
「うん。まず国道をまっすぐに行くんだ」
　同僚は車のエンジンを入れ、私たちは、木にかこまれた赤レンガの建物、つまりわれわれの勤め先の生活維持省をあとにした。
「早く内勤にうつりたいものだな」
「ああ、だけどあと二、三年はこの外まわりの仕事をしないことには、内勤にはうつれない

だろうな」
車は人影のまばらな街の大通りをゆっくりと進んだ。両側の街路樹は、舗道の上に、静かな朝の緑の陰を並べていた。その舗道の上のところどころには、うば車を押す母親、孫の手をひいた老人、小走りにかけまわる犬をつれて散歩している美しい婦人などが見られた。
赤と白の縞の日よけを出した商店街はまもなく終り、車は住宅地を進んだ。
「内勤になったら、結婚して、あんな家に住むつもりなんだ」
私は同僚に指さしてみせた。バラをからませた垣根のなかの、大きなニレの木の下にある古風なつくりの住宅を。窓からは、静かな昔のメロディーを織るピアノの音が流れ出していた。ひいているのは、まつげの長い美しい女性だろうか、それともほっそりした指を持った色白の少年だろうか。
あのような家に住めば、梢に集まって朝霧のなかで鳴きかわす小鳥たちの声を、めざめた時に、寝床のなかで聞くことができるだろう。また、ものうい午後のひとときには、幹のほらあなのなかで何匹かのリスたちが木の実をかじる音がひびいてもくるだろう。
「僕は、あんな家にするつもりだ」
同僚はハンドルをにぎったまま、あごの先で私に示した。それは、大きな池のほとりにある家だった。開いた窓からは、その家の主人らしい中年の男が、カンバスに絵筆を走らせて

いるのが見えた。夜になれば鯉たちが軽い水音をたてて跳ね、月影がキラキラと散らばるのを、あの窓から眺めることができるだろう。
「平和だなあ」
「平和だ」
私たちは、しばらく黙り、車の進むのにまかせた。住宅もしだいにまばらになり、自動車はこんもりした森を持つなだらかな丘をいくつか越えた。
恋人どうしなのだろうか、楽しげに語らいながら自転車を踏む若い二人が、われわれの車を追い抜いていった。同僚はそれを見送りながら
「こんなに社会が平穏に保たれているのは、やはり政府の方針のおかげなんだろうな。国民一人あたりに十分な広さの土地を確保しなければならないという」
とつぶやいた。しかし、それには疑問のひびきがないでもなかった。
「当り前の話だよ。君も本で読んで知っているだろうが、あの昔の状態と、長い年月をかけてやっと方針が軌道に乗った今とをくらべてみれば、はっきりわかることじゃないか。今ではすべての悪がなくなっている。強盗だとか、詐欺だとか、あらゆる犯罪が。それに、交通事故や病気だってなくなった。むかしは自殺なんかをする奴がいたんだってな。考えられないことだ」

「それはそうだ。たったひとつのことを除いたらね」
「だが、そのたったひとつまでなくそうと考えたって、無理だよ。必要悪はもはや悪じゃない。それをなくそうとしたら、すべてがたちまち混乱の昔にもどってしまうじゃないか」
彼はそれに答えず、ゆっくりとブレーキをかけた。見ると、道ばたの草むらから一匹のウサギが道路の上にとび出してきたのだった。そして、それにつづいて息をはずませた少年があらわれた。
「坊や、もう一息じゃないか。元気を出してうまくつかまえろよ」
私の声に、少年はちょっと足をとめ、ふりむいて笑顔を見せたが、またウサギのあとを追って草むらのなかにかけこんでいった。きっとあの少年はまもなくウサギをつかまえるだろう。そして、彼の家の夜の食卓は、頬をほてらせて話す少年の高い声でにぎわうことだろう。
自動車を再び進めはじめた時、同僚が言った。
「どこかにガソリンを入れる所はなかったかな」
「ああ、この次の村に、たしかガソリンを売っている店があったはずだ。そこでいれよう」
車は、澄んだ水に青空を映しながら流れる小川にそってしばらく走り、村に近づいた。
「きょうはこちらのほうでお仕事ですか」
小さなレストラン兼ガソリン・スタンドの店をやっている老人は、私たちを見て、目を伏

せながら聞いた。
「ああ、もう少し先だ。ガソリンを入れてくれないか」
私たちを生活維持省の役人と知っているらしいその老人は、もう、それ以上何も話しかけてこなかった。
「ごくろうさまです」
ガソリンを入れ終えた老人は、まばたきをしながら、私たちの車を見送った。
「さて、このへんじゃなかったかな」
と同僚が聞いたので、私は、さっき出してシートの上に置いておいたカードを取りあげて読んだ。
「もう少し先に行って、左にはいるんだ」
私たちは、車を少しせまい道にのりいれた。
「このへんでとめよう。あの花壇のある家らしい」
私たちは、車をおり、明るい花がむれをなしている花壇を通って、その家の玄関に向った。チャイムが涼しげな音をひびかせた。
「どなた」
この家の主婦らしい、健康そうに陽やけした女性がドアをあけて、われわれを玄関に入れ

た。
「おたくにアリサさんというお嬢さんがおいでですね」
「ええ、おりますが、どなた様でいらっしゃいますか」
　それに答えるかわりに、私は左手で上衣の襟をちょっとずらし、胸につけている生活維持省のバッジを示した。
「ああ、死神」
　一瞬、青ざめた顔色となって倒れかかった彼女を、同僚は馴れた手つきで支え、すばやく気つけ薬の錠剤を口にふくませた。しばらく玄関の柱にすがりついていた彼女は、ふるえ声で、小さく叫んだ。
「なにも、アリサを。あれまで育ってきた可愛いアリサを」
　私はそれに答えた。
「お気の毒とは思いますが、仕方のないことです」
「せめて私をかわりに。お願いです」
「ときどきそうおっしゃる方がありますが、それを聞きいれていたらきりがありません。社会の秩序が根本からひっくりかえってしまいます。ところで、アリサさんは」
「今そばの森に木イチゴをつみに行っていますが、せめて家族と別れるひまぐらい、いただ

けませんか。今すぐでなくてもいいではありませんか」
「それも困ります。本人も苦しむし、みなさんもかえって悲しみをますばかりでしょう」
　彼女は指で涙を押えながら、つぶやくように言った。
「なんでこんな方針に従わなければならないのでしょう。たまらないわ……」
「奥さん、今さら、そんなことをおっしゃられても困りますね。よくごぞんじのはずではありませんか。人びとがこのように静かな広々としたなかに、のんびりと住むことができる社会。ほとんど働かないでも欲しい物を手に入れることができ、読書や園芸や音楽など好きなことをしてすごせる社会。奥さんはそんな社会の生活になれきってしまって、有難味を忘れかけているのかもしれませんね。それに、犯罪でいやな思いをすることも、病気で苦しむこともありません。このすばらしい社会を維持するためには、みなできめた方針に従うよりほかに方法がないではありませんか」
「だけど、なにもアリサが」
「みんながわがままを主張して、この方針をやめたら、どうなります。たちまち昔のように、人口がふえ、このへんにだってアッという間にアパートがゴタゴタと立ちならんでしまいましょう。そして、窓々からうるさい赤ん坊のわめき声がもれ、広場には教育の行きとどかぬ悪童のむれがあふれるでしょう。道の上ではたえまない交通事故。今がそんな時代だった

ら、アリサさんだって今の年齢まで生きられたかどうかわからないではありませんか。それに、ひと時も気を抜けない生存競争でひきおこされるノイローゼ、発狂、自殺。すべてを覆う汚れきった空気。こうなれば、あとはもう一本道です。規格化された人間の大群、騒音を伴う刺激的な娯楽、それで行きつくところはいつも同じ、戦争です」

　私は今までに何百回となくくりかえしてきたことなので、一気に喋った。

「だけど……」

「地上の大部分を文明とともに廃墟にしてしまう戦争のほうがお好きなら別ですが、多くの人は、戦争を好きではありません。私だってきらいです。それには、公平に、みながその負担を受けなくてはなりません。生活維持省の計算機が毎日選び出しているカードは、絶対に公平です。情実が入っているという噂などが立ったことはないはずです。そう、老人だからといって、子供だからといって、差別をすることは許されません。生きる権利と死ぬ義務は誰にでも平等に与えられなければなりません」

「でも、でも……」

　だが、彼女には、もはや言うべき理屈があるはずがなかった。この方針にはすべての人びとが従っているのだし、従わなければならないのだ。

　玄関の外へ明るい歌声が近づいてきた。

「アリサさんですね」

　主婦は力なくうなずいた。

「声をおたてにならないように。気がつかないところを、そっとやりましょう。そのほうが本人のためにも楽ですから」

　私は玄関の物かげに身をひそめ、内ポケットから、小型の光線銃を出して安全装置をはずした。そして、歌声と木イチゴのはいった籠の持主に狙いをつけた。どこからか飛んできた柔かいアブの羽音が、ひき金をひくまでの少しの時間を埋めていた。

　とぎれた歌声のあたりに立ちこめていた煙が、そよ風によって花壇の上を流れ、どこともなく飛び去っていったのをあとに、私たちは、自動車に戻った。ふたたび広い道にもどった時、同僚が聞いた。

「さて、こんどはどこなんだい」

　私は、ポケットから、次のカードを一枚ひっぱり出した。

「ああ、さっき通った小川のほとりあたりがいいな」

「何だい、いいな、っていうのは。休むつもりかい」

　そこで、私は、手に持ったカードに記されている私の名前を彼に見せた。そして、ポケットの残りのカードと光線銃を出して、彼に渡した。

「午後も君に運転させることになってしまったな」
「なにも急がなくたっていいじゃないか。いちばんあとにしたっていいだろう」
だが、私は、平和にみちた明るい景色を目にやきつけながら答えた。
「いいよ、自分できめた順なんだから。ああ、生存競争と戦争の恐怖のない時代に、これだけ生きられて楽しかったな」

廃　墟

「さあ、みんな。もうすぐだよ」
子供たちを引率してきた先生は言った。
なだらかな丘は春の陽を限りなく吸い込み、やわらかく波を打って遠く海まで続いていた。丘は小さな花々を浮かべた緑の海。かげろうの向うの海は、白い波で飾られた息づいている青い丘。空には、雲の兎が何匹もいた。その兎たちはひばりの声を出していた。
丘を越えたところに廃墟があった。なにもここばかりが昔の都市のあとではなかったが、古代の都市で発掘されているのは、このあたりだけだったのだ。
「ほら、これが三千万年前の町の姿ですよ」
先生は丘の上から指さした。
「ずいぶん大きな建物だったのですね」
級長らしい子供が、勉強の好きそうな声で言った。

「砕けた破片をつなぎ合わせて昔の町らしく作って見たのです。さあ、行って見ましょう」
勉強のあまり好きそうでない子供たちがあとから続き、丘を下りながら、廃墟に近づいた。いくつも並んだ四角な建物は、黙ったまま彼等を迎えた。コンクリートで固められた道も、かつて立てたような音は立てなかった。今その上を歩く彼等の足には、靴がなかったのだから。

道ばたには、短い柱が立っていた。それには「POST」と書かれてあったが、だれも読める者はいなかった。

「先生、これは何ですか」

級長らしい子供は質問することを見つけて、うれしそうに聞いた。

「それは何か宗教的な飾りだったとされています。きっと昔の人々は望みや願いごとをこれに向ってうったえたのでしょう」

先生はこんな説明をしていたが、列のうしろの子供たちは

「あんな物が願いをかなえてくれる筈はないじゃないか。昔の連中は馬鹿だね」

などと話し合っていた。子供たちはもう飽きていた。ところどころに四角い大きな穴のあいている、石づくりの建物が並んだだけの廃墟など、子供たちの興味をひきつけることはできなかった。

「先生、おべんとうを食べましょう」

一人が言い出すにつれ

「おなかがすいちゃった」

と、みながさわいだ。

「では、あそこに旗が見えるでしょう。あそこまで行っておひるにしましょう」

廃墟のはずれの、赤い旗をかかげた小さな茶店は、白いひげをのばした老人がひとりでやっていた。

「おや、きょうは遠足ですか。子供さんたちは元気でいいですね。さあ、お茶をいれましょう」

そう言いながら、竹で編んだ腰掛けを並べようとしたが、子供たちにはそんなものはいらなかった。びっしりと敷きつめてある緑の草の上に寝ころんで食べる方が、おべんとうの味がいいのだった。腰をかけたのは、先生だけだった。

「なにしろ、子供たちを連れて歩くのは、大変ですよ。子供はこんな物には興味はないしね」

「そうでしょうとも」

老人はお茶をつぎながら、先生に話しかけた。

「私ぐらいの年にならなければ、こんな物が好きになれませんよ。私も若い頃は昔の物なんかに興味はなかった。だが、今では、この廃墟が好きですね。月の良い夜にこの通りをひとりで歩くのが特に好きです。どんな人々がこの町に住んでいたのだろうと考えながらね。古代の楽器の乾燥した音がさわがしくこのあたりに満ちていた頃。街はピカピカと輝き、建物の四角い穴には透明な物質がはめ込まれ、そのなかには私たちには想像もつかないようなすばらしい物、だが、何の意味もないような物が並んでいたのでしょうね。その人たちはどんな一生を過していたのでしょうか。知ることはできっこありませんが、私はそれを知りたい気がするのです。そして、今の私たちの一生とくらべて見たいのです。私はとしよりですから、死ぬ前に確かめておきたいのですよ。この私の一生が、その頃の一生とくらべてまさっていることをね」

先生はちょっと食事をやめ、お茶をすすって、それに答えた。

「それはおじいさんの一生の方がずっといいでしょう。なにしろ、この町、いや、この町の栄えた頃の世界のほとんどが、文明もろとも、一瞬のうちにけし飛んだのですから。その原因はわからないが、何か非常に大きな爆発力のある物が使われたらしい。そんな物を持って暮らす生活を考えてごらんなさいよ。生きている気はしないでしょうに」

「そう言えばそうですね。だけど、なぜ折角築いた文明を消してしまったのでしょう。心の

底はきっと淋しかったのでしょうね。その淋しさを埋めようとして、物質をいろいろ組合せて紛らしていたのでしょうか。そして、こんな淋しい生活なんか、もう子孫にはやらせたくない、と考えて、文明を終らせたのかも知れませんね」

「さあ、どうかな。大昔の連中は、そんなことを考えるほど高級じゃあなかったと思うけど」

「そこで、私はこうも考えて見るのです。その強い爆発物に馴れて案外平気だったかも知れないとね。その想像もつかないような強い神経。ちょっと羨ましい気もします」

食事を終え、おなかのはった先生は、この老人の話相手をこれ以上つづけるのを少しうるさく思いはじめた。

「おじいさんは考えるのが好きですねえ。そんなことどうだっていいじゃないですか。ビクビクしながら生きていたのか、ケロリとして平気だったか、そんなに気にすることはないでしょうに。ずっとむかし、三千万年も前に死んでしまった人々のことなんか、どうだっていいじゃありませんか。私たちには何の関係もありはしない。かりにあったとしたところで、今さらどうしようもないことですよ。廃墟を歩いて昔を考えてみるのもいいかも知れないけれど、時にはあの丘のむこうを散歩してごらんなさいよ。海をひかえた緑の丘、美しい空気、そして暖かい日を受けて毎日を過せるのだから、私たちはそれで十分ではありませんか」

「そうですかねえ。だけど、あなたも年をとると、いつかこんなことを考えるようになるかもしれませんよ」

老人は何かもっと言いたそうだったが、どう言っていいのかは、わからないらしかった。

子供たちはずっと前におひるを食べ終えていた。

「そろそろ出かけなくては」

「これからどちらへ」

「海岸へ出て、貝ひろいでもさせてやりましょう」

先生は丘をかけまわっている子供たちに呼びかけた。

「おーい、集まれ。でかけるんだよ」

発墟のなかで、かくれんぼをして遊んでいる子もいた。その一人は、泣き声をあげていた。

「やれやれ、けがでもしたんだな」

泣きながら駆けよってくる子供を、先生はなだめた。

「さあ泣かないで。ちょっとすりむいただけじゃないか」

先生はやさしく、その子のけがをした六本の指をなでてやった。もちろん、なでる先生の四本の手の、それぞれ六本の指にも、暖かい春の風は、三千万年前と少しも変らず、おだやかに当っていた。

たのしみ

どの都会からもはなれたところに、山と山との間にはさまれて、小さな村があった。そのまんなかを小さな川が流れていた。川の水は澄んで冷たく、ところどころに岩魚がひそんでいた。子供たちはそれを追って水しぶきをあげていた。あちらこちらの畑では、その子供たちの父母や兄や姉たちが、黙々と夏草をとっていた。空には入道雲、奥深い林は蟬の和音でかすかにふるえ、どこからともなく牛のなき声がひろがり、消えていった。

夏のこの村は、豊かではなかったが、平和に満ちているように見えた。畑ととり組んで一生を過す人々の住む村だった。郵便局には山ひとつ越えたむこうの村まで五里ぐらい歩かなければ行けなかったし、駐在所はそのまた次の村まで行かなければなかった。都会の遊び疲れた人などが、時々ふと頭に描く風景に似ていたが、このような村に住む人たちにとっては、たのしみなど全くなさそうだった。

川に沿った細い道をたどって、麓から、一人の男が疲れた足どりで歩いてきた。登山服姿

で、手には小さなボストンバッグを持っていた。目つきはなんとなく鋭かったが、それはあたりの風景があまりにものんびりとしているからで、都会に住む人たちの普通の目つきかも知れなかった。

「あ、だれかくる」

子供たちは魚を追うのをやめてそっちを見た。ここの子供たちは見知らぬ人が苦手だった。自分たちの世界の調和を乱されるのがきらいなのかも知れなかった。子供たちは、蝉の声と百合の花の匂いにあふれた林のなかに駆けこんだ。間もなく気まぐれな子供たちは、岩魚のことも、男のことも忘れ、誰かが見つけ出した尺取虫を眺めることに夢中になっていった。

都会から来た男は、さっきまで子供たちが遊んでいたあたりに来て、崩れるように腰を下した。長い道を歩き通してきたらしく、赤く陽にやけ、服は汗でまみれていた。彼は川の水に手をひたし、深い息をついた。そして、バッグを開け、そのなかからタオルを出し、それをぬらして顔を拭った。バッグのなかには札束のようなものがちらりと見えた。

しばらく休んだ男は、のろのろと立ち上り、足をひきずるように歩き出した。だが、もう殆ど歩けそうになく、とうもろこしの畑のかげの一軒の家に向って倒れるように近づいていった。

「ごめん下さい」

しかし、その傾きかけた藁葺の家からは、何の返事もおこらなかった。鶏の匂いと夏草の揺れる音だけがかすかに漂っていた。男は縁側に横になり、いつのまにか眠った。だが、手は、鍵をかけたバッグをしっかりと握りしめていた。

日がかげり、ひぐらしの声がひときわ高くなった。

「あれ、あの人は誰なのだろうか」

畑からひきあげてきたこの家の妻は、縁側に寝ている男をみつけた。

「どれどれ」

その夫の、首筋の赤黒く陽やけしている農夫も、近よってのぞき込んでみたが、全く覚えのない顔だった。郵便配達のくるのは週に一回、駐在所の巡査のまわってくるのは二月に一回、役場の者も二、三ヵ月に一回。よそから村にくるのはこのほかにはなかったが、この男は、そのどれでもなさそうだった。農夫は、男を無器用に揺り起した。男はバッグを抱えながら、びくっと起きた。

「どこから来なさった」

「町さ」

これが挨拶の代りになった。その町がどこの町で、この男がどんな名前か、それを聞いて

みたところでなんの意味もないので、農夫は聞かなかった。男もまた言わなかった。
「どこに行きなさる」
「旅行さ」
話のうまそうでない農夫は、最後の質問をした。
「どうなさった」
「朝から歩きつづけで疲れた。一晩とめてくれないか」
もう聞くことはなくなった。
「では、あがんなさい」
夫婦は粗末な食事を作って出した。夫婦とも話下手で、ほとんど口を利かなかったし、男もあまり話をしたがらなかった。静かな時間を虫の声が続いていた。少しおくれて帰ってきたこの家の男の子は、見知らぬ男と、蛍を入れた紙の袋とを、交互に気にしながら、欠けた茶碗から食事を口に押し込んでいた。
「お客さんはそこで寝なさい」
農夫は食事を終えてポツリと言った。
「わしらは今夜、寄合いをしなければ」
「何の寄合いだい」

と、男は気になるような口調で聞いた。
「お祭りのことさね」
「ああ、新聞でもあったら見せてくれないか」
「新聞は一週間まとめてくるから、あと三日しないとこない」
「ラジオはないのか」
「そんなものこの辺では、誰も持っているものかね」
男は、ホッとしたような、また疲れが一時にでたような様子で、横になった。農家の夫婦は
「ゆっくり休みなされ」
と言って出て行った。長い夏の日は全く暮れ、天の川が空を横切ってきらめいた。子供は片隅で寝入っていた。そのそばで蛍を入れた紙袋が青白く光っていた。
少しずつ集まってきた村の者たちを前に、ランプの薄暗い光で皺を浮き出させた年寄りの巫女は言った。
「その男は人殺しだ。二人殺している。悪い男だ」
巫女の言うことだから、それを疑う者はなかった。

「金は持っているだろうか」
誰かがランプの明るさのとどかない暗闇で言った。
「それは判らぬ」
もう、ほかには聞くことはなかった。
「では」
巫女はかすれた声で言った。

再び、夏の日がはじまった。蟬の声は湧きあがりはじめ、陽はしだいに強さを増した。
男は目をさまして、荒縄で縛られていることに気がついた。彼は反射的にバッグに目をやった。だが、それはそのままそばにあった。
「おい、どうしたんだ」
彼の叫びによって、三人の農夫が庭からのぞき込んだ。その一人はこの家の農夫だった。
「いったい、なぜこんなことをしたんだ」
と男は呼びかけてみたが、どの農夫も声を出しかけてやめた。どう説明したらよいのか、考えてみたら意外にむずかしいのでやめた、といった風に見えた。その代りに、縄に力をこめて引っぱった。

「どこにつれて行くんだ。おれは何もしない。ふざけるな」
男は引っぱられながら、都会でならすごみの利くにちがいない声で言った。農夫はかまわずに畑のなかの道をひきたて、しばらくたって、一人が言った。
「あんたは、二人殺したんだろ」
男は一瞬口ごもったが、たちまち早口に何か喋った。しかし、そんなに早く喋っては、農夫たちに通じるはずはなかった。
「いったい、どこにつれて行くんだ」
何回目かに叫んだ時、男は気がついた。高い杉の木、それにたてかけてある梯子、枝から下っている縄。男は何か言おうとしたが、なかなか声は出なかった。そして、やっと言った。
「金なら、やる。放してくれ」
農夫たちはちょっと目を光らせたが、やはり何も言わなかった。返事のないのにたまりかねて、男は叫んだ。
「そうさ。お前たちの言うように、二人殺したんだ。さあ、警察につき出してくれ」
だが、その返事も、縄をひっぱられることだった。もう、男がいかに怒鳴ろうが、身をもがこうが、そのなりゆきを変えることはできなかった。

啞の若者が手まねで命令され、裸にされた死体を、林の奥深くかついでいった。鍵のかかったままのバッグと服は、巫女の家に運ばれ、油紙で幾重にも包まれた。裏の竹藪に穴が掘られて、そのなかに包みは埋められ、土をかけ終った上には、数字を刻んだ小さな石が置かれた。

「さあ、十年たったらこれを掘り出して、お祭りをすべえ」

と巫女は言った。

「そう言えば、たしか来年は、いつかの奴の十年目じゃなかったかな」

いくつか並んでいる同じような石の数字を調べながら誰かが言い出すにつれ

「そうだ、そうだ」

「たのしみだな」

ほんのしばらく、楽しげなざわめきが起ったが、まもなくそれも静まった。

「さあ、野良に行くか」

それぞれ、その日の畑仕事のために散っていった。

子供たちは夏の陽を浴び、小川に笹舟を浮かべて遊んでいた。

「来年はお祭りだとよ」

子供の一人は、聞いてきた大人の話を伝えた。だが、子供たちの興味は、来年のことにはなく、いつも現在のなかにあった。

「蜂の巣を探そう」

こう思いついた子のあとについて、みな駆け出していった。

子供たちがいなくなり、笹舟の流れ去った川には、夏の空がうつっていた。その空の入道雲はふくれはじめていた。今日は夕立ちがきて、爽かさがこの村を満たすかも知れない。

年賀の客

「あけましておめでとうございます」
まっ白な障子を通して、新春の陽は、部屋いっぱいにあふれていた。
「やあ、おめでとう」
床の間の前にすわった実業家ふうの老人に向って、三十ぐらいの若い男が新年の挨拶をのべ、老人はそれにこたえた。
「旧年ちゅうは特にお世話になりまして、お礼の申しあげようもありません。おかげ様で私の店も、なんとか立ち直ることができました」
「そうあらたまることはないよ。今年は商売を大いに伸ばしたまえ。まあ、一杯飲んでくれ」
「はあ、頂きます」
盃につがれた酒は、暖かい部屋のなかに、いい香りをたちこめた。遠くで獅子舞の太鼓の

音が流れていた。
「ほんとうに結構なお正月でございますねえ」
「静かで、大みそかまでのあわただしさがうそのようだ」
と、老人は目を閉じ、ゆっくりとつぶやいた。去年を、そして若い頃をじっと懐かしむように見えた。
「こんなことをお聞きしてもいいかどうかわかりませんが」
若い男は口ごもりながら話しかけた。
「ああ、いいとも。なんでもいってみたまえ」
「本当に失礼なことかもしれませんが、私はこんなに面倒をみて頂けるとは思いもよりませんでした」
「君が若くて熱心だったからだよ」
「だけど、実を申しますと、こちらにお伺いする前にいろいろな人に相談してみたのですが、あまりひとの世話をなさらない方だから、お伺いしても無駄だろうとお噂する人が多うございました」
老人は目を閉じたままいった。
「ああ、事実そうだったようだ」

「それが、どうして私がお伺いした時にあんなに簡単に承知して下さったのか、ちょっと不思議に思えて仕方ありません。よろしかったら、お話し願えませんでしょうか」
「それは君、としのせいだよ。としをとると、ひとの世話をしたくなるものだよ」
「そうですか。私にはわかりませんが、そういうものですかねえ」
男は不審そうな声でいって、自分で盃に酒を満たした。しばらく沈黙がただよい、彼は話題をうつそうとして、床の間の富士の画に目をやり、落款を読もうとした。だが、その時、老人は目を開いて、男の方に顔をむけた。
「話してしまおうかね」
「お願いできれば」
男は坐りなおして、ちょっと頭を下げた。
「話してしまえば少しは気が晴れるかもしれない。君は生まれかわりを信じるかね」
突然の質問に、男はちょっととまどった。
「さあ、考えたこともありませんが。だが、まだお元気なのですから、そんな事をお考えにならなくても」
「まあ聞いてくれたまえ。私は君も知っての通り、若い時から、金と事業にとりつかれていた。世の中で信じられるのは金と力だけだと思って、そのためには他のすべてを犠牲にして

きた」
「ごもっともです。その努力によって、今日の地位が築かれたのでございますね。羨ましいことです」
「だが、ある時、こんなことがあった。さあ、もう三十年も昔になるだろうか。ある日、みすぼらしい男が会社に私をたずねてきた」
「見たこともない人だったのですね」
「いや、ちょっと気がつかなかったが、学生時代の私の友人だったのだ。そして、勤め先をくびになったから金を貸してくれ、といい出した」
「それで、どうなさいました」
「だが、話を聞いてみると、とても返せそうにない。私は、その頃は、もうからないことに金を出すのを罪悪のように考えていたし」
老人は、男をみつめて、弱々しく笑った。
「しかし、金を貸さなくても責任はありませんでしょうに」
「その男は、四、五回もやってきただろうか。いつも、ちょっと肩をすくめ、金をくれよ、とねだったが、毎回断わっていると、そのうち、来なくなった」
「よかったではありませんか。だが、どうしたのでしょう」

「死んでしまったのさ。そういえば、どこかからだでも悪かったのか、なんとなく影が薄かったな」
「あんまりいい気持ではございませんね」
「さいごに来た時、あいつはこんなことをいっておった。あなたは金しか信じないようだが、私は生まれかわりを信じる、とね。こんど生まれてくる時は金に不自由しないように生まれてくるつもりだ、とね。変なことをいう奴だとは思ったが、あの頃は私の仕事はどんどん大きくなっている時だったし、私の信念は変わりもしなかった」
「それが、去年になって変わった、とおっしゃるわけですね」
「ああ、君がはじめて私のところに来た日からだよ」
　老人は、こういい終えて、再び目を閉じた。その顔の皺は思いなしか、少し深くなったように見えたが、それは陽が傾いたせいかもしれなかった。
　男は、口に近づけていった盃を歯にぶつけて、ひざに酒をこぼしたが、拭おうともせずに、あわてていった。
「そ、その男は、どんな顔つきだったのです。私に似ていたとでも……」
　老人の答えない静かさを、廊下の足音が破り、不意に襖があけられ、華やかな色彩がとびこんできた。男は我にかえって

「お孫さんでしたね。すっかりかわいらしくなって」
と話しかけたが、その晴着をつけた少女は、老人のそばに坐り、我儘そうにひざをゆすりながら
「ねえ、おじいちゃん。お金くれない」
とねだり、そして、ちょっと肩をすくめた。
　老人はひざをゆすられながら、男にいった。
「君が私のところにはじめて来た日の朝、どうして覚えたのか、これがこんなねだり方をはじめてねえ」

包囲

ある夕ぐれ時、私は駅のホームのはじに立っていた。さっき、満員になった電車をやりすごしたので、次の車には必ず腰かけられるはずだ。それで腰かけさえすれば、明日の朝まで自由と休息にみちた時間がつづくのだ。私は早くも点滅しはじめた遠くのビルのネオンをぼんやりと眺めながら、ホームに入ってくる電車の音を聞いていた。

その時、何者かが、私の背中を勢いよく押した。

あぶない、と思うより早く、私の手はとなりに立っていた男の服の袖につかまっていた。そのため、間一髪というところでホームの端で止まることができた。その前を、電車が勢いよく頬をかすりながら通りすぎた。

「あぶない所でしたね」

ひとりで足をすべらせたのかと思ってか、となりの男は、こんなことを言ったが、私はそれには耳もかさず、今うしろから押した者をみつけようとした。

電車が止り、列が乱れはじめたので、探すのは容易ではない。あいつだろうか。それともあいつだろうか。

そうだ、あいつだ。直感的にひきつけられた。今の電車から下りた乗客のように装って向うに歩いて行く黒っぽい服の男。あの男にちがいない。今の電車から下りたのなら、まだあそこまでは行けないはずだ。そういえば、背中を押された場所から察すると、あれくらいの身長だったにちがいない。私はとっさに判断を下し、あとを追った。

私はその男を、改札口のさきでつかまえた。そして、あまり強そうでないその男を駅のそばの薄暗くて人影のない公園につれ込み、くり返して問いつめた。

「やい、なぜ俺をつき落そうとしたのだ」

この小柄で貧相な男には全く見覚えがなかったが、それだけにかえって薄気味がわるく、なぜこの男が私に殺意を持ったのかを知りたかった。

「そんなこと知りませんよ」

その男は同じことをくり返し答えたが、そのたびに、私も同じことをくり返して聞いた。

「なぜ、俺を殺したいんだ」

「私はあの時の電車で下りたんです。そんな言いがかりは知りませんよ」

何度目かに彼がこう言った時、私は思い出して、声を高めた。

「それなら、入場券で改札口を出たのはどういうわけだ」
この言葉で、相手は黙った。
「どうしても言わないつもりなのか」
私はむちゅうになり、万年筆を出して相手の指の間にはさみ、にぎりしめていた。理由を知りたい気持はこの行為の残酷さを気にかけるどころではなかった。
小さな悲鳴をあげ、その男は言った。
「言いますよ」
「さあ言え、俺に何の恨みがある」
私は万年筆をポケットに収め、こんどは両手で相手の服のえりをつかんだ。
「あなたに恨みなんかありません。第一、あなたと会ったこともないじゃありませんか」
「それなら、なぜ背中を押した」
まだ男が答えたがらないので、力を加えて彼をゆすった。
「たのまれたのですよ」
そうか、たのまれたのか。それなら私がこの男を知らなくても不思議はなかった。
「だれからたのまれたのだ」
私はまた相手をゆすり、彼はしぶしぶ一つの住所と名前とを口にした。だが、その名前の

男は、これもまた私の記憶にないものだった。
「その男がなぜ私を殺したがっているのか知っているか」
「知りませんよ、そこまでは」
この男が知らないのは確からしかった。私はたのまれただけで簡単に人を殺そうとしたこの男をしげしげと眺めた。
「しかし、たのまれただけで簡単に人を殺す気になれるものかね」
この問いに、相手は言葉をついだ。
「それはそうですよ。いくらたのまれたからといって、そう簡単に人を殺す気になるものではありません」
疑問をかきたてるような言葉だった。
「それなら、どうして殺す気になった」
「しかし、偶然に、ふたりの人から、ちょうど同じことをたのまれたのです。そうなると心が動きますね」
「そのもう一人の奴は何という奴だ」
男は自分の責任をのがれることができそうな成り行きを察してか、その名前をも言った。
だが、その名前にも、私は心当りがなかった。

「この男と、さっきの奴とが、いっしょにたのんだのか」
「いや、別々でした。二人は知り合いでもなさそうでしたね」
「ふん、そうか。だが、これ以上お前を痛めつけても意味はなさそうだな」
私は聞き出した二つの住所と名前を手帳に書き、男を放した。
次の日。私はその住所のひとつを探し、その名前の主を近くの空地の隅につれ出すことに成功した。
「あいつに俺を殺すようにたのんだわけを聞こうじゃないか。お前に会った覚えはないが、いったい俺に何の恨みがあるんだ」
「何のことだか少しもわかりませんが」
しかし私は、昨日の男に対したように執拗に問いつめ、最後に相手はナイフそのものより私の目つきの方におびえたのか、観念した。
「私はべつにあなたに恨みはありません。だが、たまたま、ふたりの人から、同じようにたのまれたのです。しかし、私には人を殺すことなどできません。そこであの男にたのんだのです」
相手の答は昨日の男と同じだった。私は相手の言った二人の住所と名前とを手帳に書き込んだ。

「この二人は知り合いか」
「そうではないようです」
次に、私は昨日の男が言ったもう一人の男の名前を言って聞いた。
「この男を知っているか」
私は再び夢中になって問いつめたが、相手は全く知らないようだった。
「どうもお前は本当に知らないようだな。よし、こいつに会って聞き出してやろう」
私は手帳を一冊書きつぶしたが、私を殺そうと思っている者を未だに探し出していない。
だが、世の中の人すべてが私を殺したがっていることだけは、おぼろげながら想像がついてきた。

患者

「さあ、あなたは、だんだん大きくなります。二十五歳になりましたね」

薄暗い部屋の長椅子の上に横たわっている患者は、ちょっと、ハンサムな青年だった。だがやはり最近とくにふえた女性への劣等感の持主だった。彼はその性格をなおしてもらいにこの医者を訪れた。医者は患者に催眠術をかけ、意識の下にかくされていた十歳のころの精神的衝撃をさぐり出し、女性なんかはビクビク恐がるに価しない物であることをよく暗示し、治療を終え、もとにもどそうとしていた。

「さあ……」

目をさましなさい、と続けようとして、医者はちょっとためらった。だが、それはこの青年をなおしてしまうことへの嫉妬ではなかった。医者は美しい妻を持ち、金も、多くの患者たちから巻きあげていた。嫉妬を覚える対象は、新しい研究を発表している同僚たちへであった。なにか気の利いた研究テーマはないだろうか。いつも思いつづけていたこのことが、

突然、今になって、実を結んだのだった。

「さあ、あなたは、二十六歳になりました」

現実の年齢より一歳上の将来に連れていった。医者は、新しい試みで胸をおどらせた。

「何が見えますか」

「さあ……」

患者は口ごもった。

「はっきり言って下さい」

「女の人がいます」

「あなたは自信を持っていいんです。自分が欲しいと思った女性には遠慮なく手を出せるんですよ」

医者は患者をはげました。

「だが、そばに男がいるのですが」

「そんなことを気にすることはありません。追っ払ってしまいなさい」

しばらく沈黙がつづいた。患者は両手をしばらく動かしていたが、それをやめてから、言った。

「あまり強く殴ったせいか、頭を床にぶつけて気絶してしまいました」

「女の人はどうです。喜んでいるでしょう」
「ええ、すごくうれしそうです。私の胸にとびつき、たのもしそうに見上げています。あ……」
言葉の終りは喜びに消えた。
「ほら、あなたには、それだけの魅力があるのです。ひとつキスでもしてあげなさい」
患者はそれには答えず、唇を動かしていた。
「女の人は何か言いましたか」
「主人と別れて私といっしょになる、と言っています」
「そうそう、その調子です。では、そろそろ終りにしましょう」
医者は患者を二十五歳にもどそうとしたが、その前に何気なく言った。
「その女の人の、名前を聞いてごらんなさい」
患者は暫く黙っていた。名前を聞いているらしかった。そして、ある名前を口にした。
こんどは医者が黙った。その名前が妻の名前と同じだったのだ。
「どうしましょう」
患者は聞いたが、医者は黙ったままだった。その、殴られて床の上にのびている男の名前を確かめたかったが、それを聞く気はしなかった。患者は目をつむったまま、あお向けに寝て、うれしそうに、手で空気を撫でていた。だが、それは空気ではなく、亭主と別れる決心

をしたある女性の体なのだ。医者は、やっとのことで言った。
「もう、それぐらいでやめなさい。あなたは二十五歳にもどるのです」
「だが」
「早くもどりなさい」
患者はなごり惜しそうに手を下した。
「それから、十歳にもどるのです」

「さあ、目を開けて」
患者は目をさました。
「何か覚えていますか」
「何も。私の性格はなおったのでしょうか」
患者は医者の顔をみつめながら聞いた。だが、医者は、悲しそうな、また苦しそうな表情をたたえていた。
「いろいろやってみたが、どうも私ではなおせそうもない。治療代は払わなくても結構です」
「残念です」
患者は来た時と同じく、オドオドした様子で帰っていった。

雨

「まったく面白くもない時代に生まれあわせたものだな」
彼は本から目を離し、こうつぶやきながら、熱を伝えないプラスチック製の窓ごしに外を見た。紀元四千年の地上は、たれこめた雲の下で見渡す限り青白い氷河におおわれ、ところどころに、彼等の家と同じ家々がちらばっていた。三千年ごろからはじまった氷河期は、陸と海との区別なく、地球を北と南から徐々に氷でぬりつぶしてしまったのだ。
「まだ凍っていない地方はあるのかしら」
と、彼の妻が言った。
「赤道直下のアウレ火山島だけはまだ凍っていないそうだ」
「つれてってよ」
「とんでもない。あそこは世界中の金持ちが集まるところで、我々になんか行けるものか」
「あなたは甲斐性がないのよ」

夫は又かとうんざりして、再び原子暖房つきのベッドにもぐり込んだが、妻のぐちは容赦なくつづいた。
「このところおなか一杯の食事なんかしたことがないじゃないの」
「そんなことは俺の責任なものか。むかしの連中がいけないんだ。奴等は自分たちだけ腹いっぱい食ったあげく、何の準備も残さずに、未来人はクロレラを食えなんてぬかしやがったそうだ。ひでえ奴等だ。そのクロレラだって、日光のあたらぬこの寒さでは人工太陽燈でほそぼそと作らねばならん。なんてこった。俺はむかしの奴等に小便でもかけてやりたい」
夫は巧みに妻の鉾先をかわそうとした。
「だけど、あなたに働きがあれば、宇宙ステーションの温室で作った果物が買えるのに」
「うるさい。それより、晩めしは何だ」
「配給のホッケよ」
「何だ、またあの魚か」
「そんなこと言うけど、まだ凍ってない深海に生き残るホッケも間もなく取りつくされてしまうそうよ」
「情ない話だ。そうなると、なるべく腹をへらさないためには、ベッドで本を読んでるのが一番だな」

「そんなに知識ばかりつめこんでどうするのよ。あなたはよくても私はいやだわ。理屈ばかり言って何もできない青白きインテリね。少しは氷河でも掘ってみたら」
「氷河を掘って何になる」
「氷河の下から昔の牧場を発見し、冷凍牛を八百頭も手に入れた人がいるじゃないの」
「ばか、俺にそんな山師と人足をいっしょにしたような仕事ができるものか」
「それなら、どんな仕事ならできるっていうのよ。このままならいずれ飢え死によ」
とげとげしくなった妻の声に、夫はベッドの上に起きあがって、どなった。
「よし、それほど言うなら、俺の腕前を見せてやる。いやというほど肉を食わしてやるぞ」
「あら、ほんと。どこから手に入れるのよ」
と、妻の目には半信半疑ながら尊敬の色が浮かんだ。
「タイム・マシンを作って過去に取りに行くんだ。今まで本を読んでいたのも、だてに読んだのではないぞ」
「そうだったの。もっとも結婚してから毎日ねころんで本ばかり読んでたんだから、もうそれぐらい作ってもいい頃ね」
「では材料を集めに行ってくる。まったく食べ物以外なら何でも只みたいに買える時節だから。すぐ帰るぜ」

二人は力を合わせ、大きなタイム・マシンを作りあげた。
「これでどれくらい昔に行けるの」
「ざっと一億五千万年前にだ」
「もう少し気の利いた時代には行けないの。食料の豊富な二、三千年前ぐらいに」
「ロケットで隣の家に行こうとするようなもので、そいつは無理だ。だが、その代りに肉はたっぷり手にはいる」
「牛、それとも豚」
「一億五千万年前にはそんなものはいやしない。恐竜だ」
「まあ、それでこんな大きなタイム・マシンを作ったのね」
「さあ、そろそろ出発しよう。檻をつみ込んでくれ」
二人は車のついた檻をつみ込み、タイム・マシンを出発させた。タイム・マシンはまず空中に飛びあがり、一旦停止し、それから時間旅行にうつった。
「なんでまず空中に浮かんだの」
「もし、途中に高い山のある時代があったら、それにぶつかって事故をおこす」
「ふうん、そういうものなのね」
「さあ、そろそろ到着だ。着陸するぞ」

開かれたドアから流れ込む暖かい空気にむかって、妻はかけ出した。
「あら、すてきよ。暖かさ、緑、強烈な日光。それに青空、白い雲」
「そう感激してないで早く檻を出そう。エネルギーがつきると、タイム・マシンは我々をおいてきぼりにして未来にもどってしまう」
檻はひっぱり出され、夫はその前に立って、赤い布をふりまわした。すると、角のある恐竜がそれに向って突進してきたが、彼は身をかわして、うまく檻のなかに捕えた。
「どうだ、つかまえたぞ」
二人は檻をつみ込み、タイム・マシンを出発させた。タイム・マシンは再び空中に浮かび、飢えと寒さの待つ紀元四千年へと戻りはじめた。
「うまくいったわね。食べでがあるわ。あなたをすっかり見直したわよ」
「我々はインテリだ。ケチなことは言わずに、もどったらみんなにわけてやろう。なくなればまた取りに行けばいい」
「そうね。そして、私たちは人類を滅亡から助ける救世主になれるわね」
収穫にみちた時間旅行が終りに近づいた頃、妻が叫んだ。
「あら、たいへんよ」

「なんだ。すごい水だな。さては恐竜の奴め、小便をしたたな」
「どうしましょう」
「心配するな。こんなこともあろうかと、床に排水装置をつけておいた。すぐ機外に捨ててしまおう」

「雨かしら」
一九六〇年ごろのレストランから出てきたアベックの女のほうが言った。
男は空を見上げた。
「へんだな、雲もないのに」
「狐の嫁入り雨よ、ロマンチックねえ」
「うん。ほら虹も出ている」
二人は寄りそいながら歩きはじめた。

螢

「その子等にとらえられんと母が魂螢となりて夜を来たるらし。むかし窪田空穂という歌人にこのようによまれました螢の名所は間もなくでございます。この世に思いの残る人びとの魂は流れ星に乗って昇天することが出来ないので、螢となって水のほとりをさまようものと思われていたのでございます……」

夕暮れちかいハイウェイを大型バスが走っていた。都会からのお客が大ぜい乗っていた。みな週末の旅行なのだった。バスのなかのスピーカーからは、録音された案内が、音楽と共に流れつづけていた。聞いている者もあったし、聞いていない者もいた。

「その螢も一時は大分減りましたけれど、天然記念物の指定以来、保護を受け、この夏などは、見事なむれが見られるようになったのでございます。あ、到着致しました。お降りの方はどうぞ。では、ごゆっくり、ひと夜をおくつろぎ下さいますように」

何人かのお客を下すと、バスは走り去った。下りた連中は、ぞろぞろと旅館にはいってい

った。

しかし、実際には、天然記念物といっても、いいかげんなものだった。螢は殆ど絶滅に近かった。進んだ社会保障のおかげで、子供のことを気にしながら死ぬ親たちが少なくなったせいではない。空中にまかれた殺虫剤のせいだった。

ハエ、蚊、ノミ等を一掃する運動が行われたのだ。もっとも、反対者もあった。

「そんなことをしたら蝶々もいなくなる」

と言うのだった。だが圧倒的な意見にはさからえない。

「蝶なんか、何の役にも立たないじゃないか。そのためにハエや蚊を残せと言うのかい」

この説は数が多いばかりではなく、議論としても正しかった。飛行機から殺虫剤がバラまかれ、大衆の生活はより清潔に更に健康的になったのだ。

多くの者は喜んだ。しかし、思わぬところに、被害者がいた。このへんの旅館の主人たちだった。

「螢の減るのには全く弱ったな」

「うん、お客を呼ぶ看板がなくなるんだからな」

「どうしたものだろう」

「だれか都会の専門家を回って対策を立ててくれよ」

相談のあげく、代表者は奔走し、いい結果をもたらした。
間もなく螢はふえた。しかし、それは冷たい色の豆ランプをつけた小さなヘリコプターだった。しげみにかくされた操縦機からの電波で、川向うをスイスイと飛び交い、朝の露がおりるまで、毎晩つづけられた。都会からのお客たちは、人工螢とは気がつかない。だいたい生まれてから本物を見たことがないのだから、真偽を見分けることはできやしない。
川の向うは、天然記念物地帯と称し、立入禁止にされていた。だから、絶滅をまぬがれた本物の螢も、ごく少しだけはいた。しかし、元気よくとびまわる人工螢にくらべて、見劣りがした。光もずっと弱かった。そこで、本物は少しはなれて集まり、おとなしく飛んでいた。
すっかり夜のふけた旅館の窓からは、バスで運ばれて来たお客が、それぞれの部屋に落着いて眺めていた。ある者はビールを飲みながら、ある者は携帯ラジオを聞きながら。そして、中には、螢見物そっちのけでゲームをやっている者もいた。夜の風は、川の水にうつった光をかき乱し、ひるまの草いきれの名残りとまざったカクテルとなってどの部屋にもくばられていた。
旅館の端の方の窓。いちばん安い部屋らしかった。そこでも、若い男女が、螢を眺めながら、小声でささやき合っていた。
「ほんとうにきれいだわね」

「うん」
「ねえ。あたしたち、いつになったら結婚できるのかしら」
「みんな僕がいけないんだ。今の社会では人間らしさがあっては出世できないんだ。機械になりきるか、機械の付属品になれる者かでないと、収入が多くならないんだよ」
「いいのよ。そこがあなたのいいところなんだから。だけど、あなたのような人を好きになる私も変わった女ね」
「ほら、見てごらん、あの螢。何匹かだけ仲間はずれにされているよ」
「ほんと、どうしたのかしら」
「きっと光が弱くて、元気がないので、みんなといっしょに飛べないんだね。かわいそうだな」
「なんだか、あたしたちみたい……」
二人に見つめられながら弱い光の螢のむれは、一生懸命に飛びつづけていた。

愛の鍵

ひとびとは、それぞれ、ひとつの言葉を頭の中に持っていた。絶対に忘れてはいけない、また他人に喋ってはいけない言葉を。べつに重大な意味を含んだ文句ではない。それでも大切な言葉だった。

それは鍵だった。新しい鍵。鞄でも、自動車でも、自分の室の扉でも、昔の鍵穴はなくなって、小さな耳の形をしたものがついている。それに口をつけて、ある文句をささやけば開く。ある人のは、「チューリップが咲いた」と言えば開いたし、「しっかりしなくちゃあ」と言うのもあった。なかには、「王様の耳はロバの耳」などと凝ったのもあった。

鍵をなくしてさわぐこともなくなったし、錠前破りの名人だって、手のつけようがない。ベラベラとむやみに喋ったところで、偶然に当る確率など、零に等しい。昔の鍵に比べて、はるかに安全だった。本人が自分から教える場合を除いては。

たまには急に記憶喪失症になって開けることができず、扉を警官立会いでこわすこともあ

るが、滅多にあることではない。それよりも酒の勢いでついその文句を口に出してしまうことの方はしばしばあった。だが、帰ってから酔がさめて後悔したりあわてたりする必要はない。内側から字を入れ替えて、別の文句に直せばよい。また、神経質にいつ喋るかもしれないと心配する人は、その文句を全く意味のない、例えば目をつぶってタイプを叩いたようなものにしておけばよい。そしてその文句をバックルの内側にでも書いておけば安心だ。

だから、扉を開けようと試みる者はいなかった。

彼女も、そんな鍵のついたひとへやに住んでいた。若く、美しかった。美しいといっても、それは彼女が恋をしていたから、いきいきとして美しく見えたのかも知れない。また、その恋も、順調に進んでいるようだった。いくつかとしうえの彼と毎週二、三回は映画に行ったり、踊りに行ったり、夏だったらボートに乗ったりして夜を過し、楽しく青春を味わっていた。

しかし、彼女は、今晩は憂鬱だった。彼と喧嘩をしてしまったのだ。

つまらない事からだった。喫茶店で待ち合わせるのにおくれたのだ。

「待たせて、ひどいじゃないか」

「そんなに怒らなくてもいいじゃないの」

「僕は仕事を無理に切り上げて出て来たんだぜ」

「私だって、あなたと会うのでお化粧してたのよ」

「そんなこと前から判ってることじゃないか」
今まではどちらかが機嫌の悪い時はどちらかがなだめ、うまく行って来たのだが、どうしたことか、議論になってしまった。
「私帰るわ」
と言って立ち上る彼女に、彼は手をかけようとしたが、肩にはとどかなかった。イヤリングに触れ、それは床に落ちた。
「それじゃあ、帰ればいいよ」
すべてはゆきがかりだった。
彼女は帰り道で後悔した。もう会えないのね。私が早くあやまればよかったんだわ。だけど、どうしても私はあやまれない。我儘なのかしら。今からでもあやまりに行けばいいとわかっているのに、それができない。明日からはつまらない日が続くのだわ。
若いうちはだれでもあやまるのは苦手だ。
ひきずるように足を運んで、自分の部屋の前に来た。扉の耳に口を寄せて、「今日は本当にたのしかったわ」と言わなければ開かない。その言葉は今の彼女には言いにくかった。だが、言わなくては部屋に入れない。しばらくたたずんでいたが、やっと、書かれたものを読むような調子で声を押し出した。

ゆっくり開いた扉を内側から閉めると、この文句を変えようと思った。しかし、適当な文句が浮かばない。だけど、変えなくてはならない。ぼんやり字をいじっているうちに、字は、「悪かった、ごめんなさい」と並んでいた。今さらこんなことを言っても仕方がないのに、私も馬鹿ね。だけど明日からこの言葉を言って過すわ。
次の朝。彼は、彼女の室の前に立っていた。彼もあやまるのは苦手だった。しかし、やっぱり会いたかった。うちにいても落着かない。イヤリングを届けるのだ、と自分を納得させて、訪ねて来たのだった。
ベルを押そうとしたが、手は動かない。いかにも先にあやまりに来たようでいやだった。やっぱり出来ない。イヤリングは扉の耳につけて帰ろうときめた。ポケットから出し、ネジを開き、はさんで回した。
楽しかった日々が思い出された。公園のベンチに並んで坐って、愛を囁いた時の彼女の耳が思い出された。だが、もうおそい。昨日素直に許せなかった自分の性格が残念に思えた。なぜ言えないのだろう。イヤリングをつけ終ると、無意識のうちに、耳に口をよせた。
扉はゆっくりと開いた。室の中でぼんやりしていた彼女は彼を見つけ、はじかれたように、彼にとびついて泣いた。声は出なかったが、心の中では鍵の文句を叫んでいた。
扉は開き切り、耳の形をした鍵穴につけられたイヤリングは、かすかに揺れた。

水音

——ペット・第一話——

ひけ時近い会社の事務室では、課長の外出をいいことに、雑談の花が咲いていた。
「やはり何か飼うのだったら、小鳥だね。われわれサラリーマンにとって一番つらい、朝起きる時も、小鳥たちがさえずっていてくれると少しは気がまぎれるものだぜ」
「あら、猫の方がいいわよ。かわいらしいじゃないの」
「そうかな。僕は金魚を飼っているけれど、安いし、手間もあまりかからないし、動く室内装飾としては最高だよ」
などと、それぞれペットについての意見をのべた。ひとわたり議論が出つくし
「ところで、あなたも何か飼ってますか」
と、肩を叩かれ、雑談に加わらないでソロバンをはじいていた男がふりむいた。この事務所でいちばん影の薄い存在の会計係の彼は、三十をすぎているのに、まだ一人ぐらしのアパ

ート住いだった。時どき失敗をする上に、これといったとりえもなく、そのために給料がいっこうにあがらないためでもあった。
「私ですか。まあ、たいしたものではないですがね」
彼はこう言いながら、指で眼鏡を押しあげ、はなをすすった。
「小鳥かい」
「いいえ」
「猫?」
「金魚だろう?」
「いいえ」
「いったい何なんだい」
「つまらないものですよ」
「なんだか珍しいものらしいな。どこで手に入れたんだい」
「このあいだの晩、道を歩いていると、あとについてきたんで、つれて帰ったんですよ。だが、飼ってみると、かわいく思えてくるものですね」
彼は声にならない笑いをつけ加えた。
「こんど見せてくれよ。そのうち日曜にでも君のところに出かけようか」

「だめですよ。どうも日光をいやがるんでね」
「まあ、そうかくさずに、何だか教えてくれよ」
だが、この時、課長が帰ってきたので、雑談は打ち切られ、みんなは仕事に戻った。
「ああ、君」
席についた課長は、会計係をあごで招いた。
「さっきたのんだ書類はできているかい」
「これでよろしいでしょうか」
課長は意地悪そうな目で書類を眺めた。
「これじゃあ駄目だ。地方別ではなく、支店の販売網別に統計を出すんだと言ったはずじゃないか。明日の朝の重役会に出さなけりゃあならないんだぜ」
「はあ。では今日は残ってなんとかやり直します」
「そうしてくれたまえ。君も、いつまでもこんな間違いをしていると、やめてもらわなければならなくなるからな」
課長はズケズケと言った。
まもなく退社時刻になったが、その会計係は帰るわけに行かなかった。
「では、お先に」

という声と共に、事務室のなかの人数はたちまち減り
「あいつは何を飼っているんだろうか。フクロウかな」
「蛇じゃないのか」
「キャーッ、いやねえ」
と言いかわす声が廊下を遠ざかって、うつろな静かさが満ちてきた。
日がかげり、窓の外に夕闇が押しよせ、遠くのネオンがまたたきをはじめても、会計係は伝票をめくり、ソロバンをならし、紙に数字を書き込んでいた。
「ああ、もう八時か。腹がへったな」
彼はペンを置き、そば屋に電話をし、玉子丼をとりよせた。
配達してきた店員の帰ったあと、彼は思い出したように鞄をあけ、ビンを取り出した。ビンの栓を外す音が、広々とした夜の事務室にひびき、彼の低くささやきかける声がつづいた。
「きゅうくつだったろうな。もっと早く出してやればよかったんだが、すっかり忘れていてね」
彼は食事をしながら、話しつづけた。
「全くお前はいいよ。何も食わなくていいんだからな」
彼はお茶をひと口すすった。

「それにお前にはこわいものがないんだしね。こっちは失敗ばかりして、今夜もやりなおしさ。失敗をして、おこられるために生きているようなものだ。あんまり割のいいものではないぜ」
彼はボソボソと喋り、ボソボソと食事を終えた。
「さて、仕事にとりかかるか。お前に手伝ってもらいたくても、そうはいかないしな」
再び、ソロバンの音が単調にくり返され、廊下に若い足音がしはじめるまでつづいた。
「おい、誰かきた。ひとに見つかると厄介だ」
彼がビンの栓を閉め終った時、足音は扉の前で止まり、ノックの音となった。
「そば屋ですが、入れ物を頂きにまいりました」
「ああ、入って持っていってくれ」
そば屋の店員は扉をあけ、キョロキョロあたりを見回した。
「今、誰かいたんですか、話し声が聞えましたが」
「何か聞きちがえたのじゃないのかい。ここには誰もいないじゃないか」
「なんだか薄気味が悪いな。毎度あり……」
店員は丼を手に、あたふたと帰っていった。彼は再びビンの栓をとり、仕事をつづけた。
「では、そろそろ帰るか。きゅうくつでも、ビンのなかに戻ってくれ。お前といっしょに歩

いているのを見つかるとうるさいからな」
彼は国電から私鉄にのりかえ、その終点近くの駅で下りた。駅からの夜ふけの道は、ほとんど人通りがなかったが、彼はペットをビンから出そうとはしなかった。広い川を橋で越せばそこに彼のアパートがある。
彼は橋を渡りながら、歩みをゆるめた。
「しまった」
彼は今まで残ってやった仕事に手落ちがあったのを思い出したのだ。統計の出し方をまちがえたことに気がついた。だが、今さら戻る時間もなかったし、あすの朝早く行っても、それではやり直すのに足りなかった。課長はまたおこるだろう。だが、あれだけ注意された上では、もう言いわけにはならない。こんど失敗したらやめてもらうという課長の注意が、くりかえし、耳のなかで鳴った。やめさせられたら、やとってくれる所があるだろうか。
彼は欄干にもたれ、暗い川の面を見下した。数日前の雨で水かさはいくらか増していた。
彼は、無意識のうちに鞄からビンを出し、栓を外し、そして、話しかけていた。
「お前はいいなあ。こんないやなことを感じなくてすむのだから。俺はつくづく自分がいやになったよ」
彼はペットの出たビンを両の掌でいじりながら言葉をとぎらせたが、たちまち思いついて

言った。
「そうだ、俺もお前のようになろう。なぜ、もっと早く気がつかなかったかな」
彼はビンを川に投げこんだ。水の音が乱れて、水面を流れた。
「ビンは捨てたよ。もう、お前の飼主じゃあないんだ」
つづいて、大きな水音が橋の下に反響し、しだいに弱まり、消えた。

楽しい恋の語らいに夢中になっていたアベックが、何回目かのキスを不意にやめた。
「あら。何か音がしなかった」
「音なんか聞えないよ」
「あの橋の方で、水音がしたのよ。のぞいて見ない」
二人は寄りそいながら橋に近づいたが、女はたちまち悲鳴をあげた。
「あっ。人だまよ。二つも」

早春の土

――ペット・第二話――

長いあいだ坐りこんでいた冬がやっと腰をあげ、どことなく和やかさが満ちてきた。時おり吹く風にも二割ぐらい暖かさがまざり、ところどころに緑をつけはじめた大地に向って、太陽が光の肥料をまいていた。
郊外の、塀で囲まれたこの一郭にも、春は近づいていた。白い建物の前の広い庭では、何人もの男たちが、日ざしをあびて、それぞれ勝手なことをやっていた。
「あの、指で輪を作ってじっとしているのは、どういうわけですか」
「ああ、あの男ですか。あれは精神を統一すると、指の輪がレンズの作用をすると思い込んでいるのです。日光を集めて火でもつけようとしているのでしょうね」
「ははあ。では、こっちの、さっきから手ばかり叩いているのは?」
「よく聞いてごらんなさい。モールス符号になっているでしょう。難船でもしたつもりにな

って、SOSを送っているわけでしょう」
「みなさん、なかなか、いい趣味じゃありませんか」
若い週刊誌の記者は、このような精神病院の有様を見て、うれしそうに、院長に言った。特集記事の種がつき、窮余の一策でここを思い出してやってきたのだ。
「趣味の高級なことでは、あの患者たちに及ぶものはないでしょうね」
白衣をつけた院長は、温厚な微笑を浮かべながら答えた。院長の見事な白髪は美しく光り、空の雲と同じく繭を思い出させた。
「なにしろ、あの連中はそれぞれ自分自身の夢を持っています。マスコミの命令一下、全員一致して規則正しく笑い、泣き、憤慨しながらその日を過しているそとの連中とはちがいますよ」
この言葉に、若い記者は勢いよくうなずいた。
「それそれ。そこですよ、私の狙いは。ここの生活を紹介して、現代文明への批判を試みようという企画なのです」
「それは結構なことですね。読者はそれぞれの特集を読み、全員一致して、いっせいに反省する、というわけですな」
記者は首をすくめ、頭のうしろに手を当てた。

「そう皮肉をおっしゃらないで下さいよ。ところで、一人一人から、その個性あるすばらしい世界観とやらを聞いてまわりたいと思いますが、よろしいでしょうか」
「どうぞ御自由に。だが、なかにはちょっと気むずかしいのがいますから、あまり逆らわないほうがいいですよ。へんにさえぎると口を利かなくなる患者もいますからね」
記者は庭に出ようとしたが、ふりかえって、院長に聞いた。
「それはそうと、まさか殺人狂なんていうのはいないんでしょうね」
「その点は御心配なく。ここの連中は、自分の作りあげた空想を信じはしますけれど、そのほかの点では全く善良そのものです。殺人狂などというものはあの塀の外にいるものですよ。ところで、私は書類を作る仕事がありますので、室におりますから、お帰りの時にまたお話しましょう」
院長は自分の室にもどっていった。
記者は患者たちに向けてカメラのシャッターを何回か押し、次にメモを手に、一人の患者に近よった。
「やあ。いいお天気ですね」
話しかけられた男は、古ぼけたマントをはおり、さっきから穴を掘りつづけていた。その頭の上には紙の奇妙な帽子があったが、その形から察して、どうも海賊船の船長のつもりと

思われた。
「これはこれは。新しく入られたかたですね。どうぞよろしく。これからは仲よくやろうじゃありませんか」
男は五十センチぐらいの深さの穴のなかから、愛想よく答えた。
「いや……」
とんでもない。俺はお前たちのような気ちがいではないぞ。と言いかえそうとしたのを、記者はやめた。へたに逆らって相手にされなくなっては、すべてが台無しになってしまう。
「こちらこそよろしく。ところで、何の穴ですか」
「何だと思います」
男は穴から出てきて、穴のふちに小さな山となってつまれた土のそばに立ち、手をはたいた。
「さあ、塀の外へでも逃げようというわけですか」
「なぜここから逃げるのです」
男はふしぎそうな顔をした。記者はあわてて言いなおした。
「わかりましたよ。冬眠している蛇を探しているんでしょう」
「あなた、正気なんですか。蛇なんか掘り出して、どうするんです。それに、こんな所には

蛇はいませんよ」
記者はちょっとめんくらい、それをごまかそうとして
「まあ、ひとりで穴を掘るのはくたびれるでしょう。私にもお手伝いさせてくださいよ」
とシャベルを拾って、穴へはいった。
「これはありがたい」
と男は気分を良くしたのか、話しはじめた。
「実はね、あなた。金を掘り出そうというわけです」
「それはそれは。景気のいいお話ですね。だけど、わけ前をよこせなんて言いませんから、気にしなくてもいいですよ」
記者はごきげんを取りながら、シャベルで土をほおり上げた。
「どうも世の中は合法的か非合法的か、どっちかの方法で、お互いにお金を巻き上げ合わなければやって行けませんね。いやなことじゃありませんか。そこで私は考えたんですよ。なんか別な方法はないものかとね」
「それで、考えつきましたか」
記者は少し深くなった穴のなかで聞いた。
「宝さがし。これに限ります。私は海賊船の船長となり、オウムを肩に、宝さがしをしよう

としたのですが、いつのまにかオウムもろとも、ここに連れてこられましてね」
「なるほど。それで宝のあり場所を記した地図によれば、ここに埋めてあるというわけですか」
「いいや、地図はありません。実は、きのうの夜、このオウムが教えてくれたのです」
記者はカメラのケースに手をやりながら聞いた。
「どのオウムですって」
「この私の肩にとまっているオウムですよ」
だが、男の肩には何もとまっていないので、記者は苦笑いした。
「どうです、かわいいオウムでしょう。利口だし、よくなついているし、私の大事なペットですよ」
と、男は目を細めた。
「やあ。ほんとにすばらしいオウムですね」
記者は大げさな身振りをした。
「この目を見てやって下さい」
「全く利口そうですね」
「この羽はどうです」

「こんな美しい羽を持ったオウムは見たことがありませんよ」
と、記者はさかんに相づちを打った。
「あなたには見えるんですね」
「見えますとも。誰かそうでないと言う人がいるんですか」
男は真顔になって説明した。
「この私のかわいいペットが見えない奴が多くて、困っていたところなんですよ。それで、穴でも掘っていたら、オウムを認めてくれる人が現われるんじゃないか、と思っていたわけですが、本当にあなたがあらわれてくれて、こんなうれしいことはありません」
「それはよかったですね」
記者はシャベルをほおり出し、なま返事をしながら、穴の底にうずくまって、カメラのフィルムを入れ換えはじめた。
「あなたとオウムの写真をとってあげますよ。みんな驚くだろうな。ところで、そのオウムはオスですか、メスですか」
その時、男の答えのかわりに、土の塊がとびこんできた。
「おい、気をつけてくれ」
上に向いてどなろうと大きく開けた口のなかにも土がとび込み、はき出そうとうつ向いた

背中にも土は勢いよく雪崩れこんだ。記者の目は、白い雲の浮かぶ青空をチラと見たのが最後になった。

男は、シャベルできれいに土をならし終えて、オウムに話しかけた。

「お前は、自分をみとめてくれる者を埋めておけば一年後には金に変わる、と言ったが、うそじゃないんだろうな。まさか自分で埋ってみるわけにも行かないし、困っていたところだったが、ちょうどよかった」

だが、ほかの患者たちは、そんなひとりごとに耳もかさず、陽がかげり、少しうすら寒くなった早春の庭で、自分のやりたいことを熱心にやりつづけていた。

月の光

——ペット・第三話——

広い部屋の、ガラス張りの天井からは、青みをおびた月の光が静かに流れ込み、きらめく星々が、音のない交響楽をかなでていた。室の片隅にあるいくつかの鉢植えの百合は、それぞれ十以上もの花を重そうにつけ、濃い、むせるようなかおりを絶え間なくまき散らし、その反対側の隅の小さなプールの水は、冷やかに澄んで、睡蓮の花を浮かせ、壁の噴水からふき出しつづけている水滴を受けて、かすかな音と波紋とをつぎつぎと生みだしていた。その水は、大理石のプールのふちを越えてあふれ、タイルの床をただよいながら、どこかに流れ去る。ここが彼のペットの飼われている室であった。

彼のペットは、しなやかな体を床の上に横たえて眠り、水はその足先を月光に映えながらゆっくりと洗った。

「おい、えさを持ってきてくれないか」

飼い主の五十近い品のよい男は、この室に入るまえ、いつものように六十すぎの老人の召使に言いつけた。

「かしこまりました。今日は何にいたしましょうか」

「そうだな。パイと、シュークリームと、メロンがいいだろう」

「はい」

彼がパイプに火をつけ、二、三回、ふかぶかと煙をたちのぼらせているうちに、召使は言いつけられた品々を大きな銀の盆の上に山のようにつみ上げて持ってきた。彼はパイプを机の上に置き、それを受け取り、扉を開けた。

扉の開く音で、ペットは身をおこして立ち上がり、ゴムの大きなボールを軽く足でけりながら彼に近よって、うれしそうに身をすりよせ、美しい目でじっと見上げた。

彼は身をかがめ、膝をペットのもたれるがままにさせ、右手でそのまっ白な背中をなで、左手で床に置いた盆の上からパイを取って口に入れてやった。ペットはそれを食べ、それをみつめる彼の表情には、たとえようもない楽しげな表情が満ちた。

壁の送風器から送りこまれるかすかな風は、ペットの長いつやのあるかすかな髪をサラサラとそよがせ、月の光はそれを手伝っているように見えた。ペットは時おり切れの長い目で彼を見上げ、彼もそのたびにやさしく見返してやりながら

「こんなすばらしいペットを持っているものは、ほかに誰もいないだろうな」

と、心のなかで自分自身にささやいた。ペット。それは十五歳の混血の少女だった。だが、混血の少女ならば世の中にはいくらもいるかもしれないが、彼のペットのようなのは、おそらくひとりだっていないだろう。十五年前、彼は家の門の前に捨ててあった赤ん坊を拾い、愛情をこめて丹念に育ててきたのだ。幸い、彼には親ゆずりの財産があったし、また、親ゆずりの忠実な一人の召使もあった。それに、彼がある大きな病院に勤める医者であることも、ペットの生長に役立った。

しかし、彼はペットをここまで育ててくるあいだ、言葉をひとつも使わなかった。彼はえさは必ずやったし、召使をこの室にはいらせることはほとんどなかった。やむを得ずはいる時にも絶対に声を立てないように言いつけたし、召使は忠実にそれに従った。

言葉などは人間にはいらない。言葉がどれほど愛情を薄めているだろうか。人びとは言葉なくして得た愛情を、必ず言葉によって失っている。彼はこのように考えたのだった。

このペットの美しいからだのなかには、愛情ばかりがいっぱいに詰っている。そして、それ以外のものは何もない。この静かな部屋のなかにも、世の中のみにくいことは、何ひとつしみ込んでいないのだ。

彼は肩をなで、ペットはおとなしくメロンを食べ終えた。そして、ペットは睡蓮の浮かぶ

プールに軽くかけより、噴水から散る水を手で受けて口に入れた。水は指のあいだからこぼれ、ペットの白いからだを映す水面をキラキラと乱した。水を飲んだペットは、プールのふちに腰をかけ、大きな目でしばらく彼を見つめていた。

彼はペットの食べのこしたえさを銀の盆の上に片づけ、壁の棚の上に置いた。それから、ペットを手で招きよせ、青いリボンで髪をたばねてやり、部屋のまんなかの空間を横切っている銀色の鉄棒を指さした。いつもペットのする食後の運動なのだった。

ペットはすんなりしたからだをバネのようにはずませ、それにとびついた。青白い光で満ちた海の底のような空間に、まっ白な色が何回も弧を描き、そのたびにリボンにつけられている小さな金の鈴が流れ星となってきらめき、響きを飛ばせた。百合の花のかおりはかき乱され、噴水とたわむれた。

鈴の響きはとだえ、ほんのりと赤味をおび、汗ばんだペットは、彼を見た。彼がうなずくと、ペットはプールに飛び込み、そのために水は勢いよくあふれ、タイルの上を踊りまわった。

彼は、毎日、このようにしてはじまる夜を持った。夜は言葉の無意味さをはっきり示しながら、静かな沈黙のうちにふける。

ペットは、昼のあいだはガラス越しにさし込む陽の光を浴びて眠り、彼の帰宅の頃にめざ

めるのだ。

甘い、夢のような夜。だが、彼はこれを、あらゆる遊びを断った十数年をつぎ込んで得たのだ。その忍耐と努力を思えば、決して不当なものと呼ぶことは出来ない。

彼は夜おそく眠り、あさの食事をすますとペットにえさをやり、すがすがしい気分で自動車を操って病院にでかける。ペットが眠りにはいる静まり返ったこの家の午後には、老いた召使が、時々ものうい動作で室の気温を外から調節する動きだけがあり、その召使さえもまたいつしか椅子に寄りかかってまどろみ、平和な時間が流れて行くのだ。

しかし、ある日、突然、この平和と幸福にあふれた家に、見えない嵐がもたらされ、椅子にもたれていた召使が電話のベルで驚かされた。

「もしもし、大変なことです」

「はい、何がおこったのでしょうか」

召使は聞き返した。

「おたくの御主人がたった今、自動車の事故で、大けがをなさったのです」

「本当でしょうか」

召使は受話器を手にしたまま、再び椅子に腰をおとした。

「様子はどうなのです」

「だいぶ重態です。よくわかりませんが、うわごとで、えさをやらなくては、とくり返して言っています。もし、犬でも飼っていらっしゃるのなら、よろしくお世話をお願いしますよ」

「はい」

だが、夜になるにつれ、召使の困り方は高まった。どうやってえさをやったらよいのだろうか。召使は主人がいつもやっていたように、盆の上にショートケーキ、オレンジなどをのせて、恐る恐る扉をあけた。その音でねそべっていたペットはうれしそうに身を起しかけたが、召使の姿を見てあわててプールにとび込み、睡蓮の葉の下に身をひそめた。

「御主人はけがをなさったのだ。今晩はこられないから、これを食べなさい」

召使は思わず話しかけたが、ペットには通じるはずはなかった。それどころか、はじめて聞く声にいっそうおびえた。召使はぎこちなく手まねをくり返したが、それはこの室の様子に似つかわしくなかった。

自分がいては食べないのだろうか。召使はこう考えて銀の盆をタイルの床の上に置き、扉から出た。

だが、しばらくして、再び召使がそっとのぞき込んだ時にも、盆の上のものは少しもへっていなかった。愛情という副食物がないと何も食べられないペットは、プールのふちにぼんやりと腰をかけ、待っていた。

次の朝、召使は、主人の入院している病院に電話をかけてみたが、危機は脱していなかった。

「面会してお話できないでしょうか」

「とんでもありません。顔をごらんになるだけならかまいませんが」

召使はなんとかしてペットを連れて行き、えさを与えてもらおうと思ったのだったが、それはとても無理らしかった。

召使は部屋に入り、えさを取りかえた。主人がよく与えていたシュークリームも加えて。

「食べておくれよ。お願いだ。御主人がお帰りになったらひどく怒られるから」

召使はオロオロして泣くように頼んだが、ペットには通じなかった。夜になっても、何も盆の上のえさは減っていなかった。少しやせ、色の青ざめたペットは、百合の花に顔をよせ匂いをかいでいた。

主人の危篤はつづき、ペットはさらに青白くやせた。召使は、ペットのために医者を呼ぼうかとも考えたが、それをすることは、もはや新しく勤め先を探せない身で辞表を書くことであった。老いた召使は落着かず、ペットの室をのぞくのと、入院先に電話するのとを、時時思い出したようにくり返した。

疲れはてて、うとうとした召使を、夜の電話が目覚めさせた。

「御主人がなくなられました」

召使は、受話器をもどさず、台の上に気抜けしたように投げ出し、ペットの室に足をむけた。

主人の最も愛したペット、最も親しかった家族、いや、主人そのものだったかもしれない。これにどうやってこの不幸を伝えたらいいのだろうか。無理かもしれないが、伝えないわけには行かない。

ペットは、タイルの上にうつむき、静かに寝ていた。召使はそっと近づき、肩に手をふれた。だが、それは大理石と同じつめたさになっていた。

百合の花びらが一枚落ちて、小さな音をひびかせた。

鏡

——ペット・第四話——

「今日は十三日の金曜日だな」

部屋の片隅にある置時計の示している日付と曜日とに目をやりながら、夫が言った。

「つまらないことを気にするのね。でも注意はするわ。今夜は少しおそくなるかしら。そうなったら帰るのは十四日の土曜日よ」

妻は笑いながら、「それまでに面白いものが手に入るかもしれないぜ」と言う夫の声をうしろに、夕ぐれの街に出ていった。

二人は、ある高層アパートの一室に住んでいた。夫は商事会社の課長、子供がないままに、妻は結婚前からの声優の仕事をつづけていた。それで、時には録音の都合などで、夜に出かけなければならないこともあったのだ。

「今夜こそやってみよう。今夜をのがすとまた数カ月さきだ」

夫は煙草を吸いながらテレビを眺め、夜のふけるのを待った。ミュージカル、西部劇……四角い画面の上でにぎやかに変化がつづき、時間が移った。

「そろそろ準備にとりかかるか」

彼は立ち上り、洗面所にかかっている鏡を外し、室の鏡台のそばに持っていった。そして、ポケットから横文字で書かれた手紙を出し、読みながら鏡台を少しずらした。

「まず、地球の磁力線に対して角度をつけます……か。なんだ、ほとんど動かさなくてもよかったな」

小さな磁石を鏡台のふちにのせ、手紙に書かれている角度と合わせた。

「次に、二つの鏡の面を平行にしますが、この間隔は……」

彼は物差しをあてながら二つの鏡の面を平行にしようとした。これは少し厄介なことだったが、椅子、箱、針金などを利用して、なんとかできた。彼は出来具合を確かめるようにのぞき込んでみた。鏡は互いに映しあい、深い深い奥まで長い廊下を作っていた。

「これでよし、と。そうそう、聖書がいるんだったな」

彼は学生時代に買った聖書を本棚の上から取り出し、ほこりを口で吹きながら、装置のところまで戻った。

「……この方法で悪魔をつかまえることができます。私も子供の時にやってみました。試み

られるのは結構ですが、あまり面白いものではありません」

彼は手紙の残りを全部読んだ。だが、いったい悪魔がどんなものか、どんな目にあったのかについては、何も触れてなかった。

この手紙は彼が学生の頃、スペインのペンフレンドから受取った手紙だった。若い頃は誰しも理屈で納得できないことを試みようとはしない。彼も勿論そうだったが、この頃あまりに合理的すぎる会社の仕事にやりきれなさを覚えたので、箱のなかをひっくり返して、この手紙を探し出したのだ。

「さあ、時間だ」

彼ののぞき込んだ腕時計の長針と短針は十二時のところで重なりはじめた。

「やっぱり本当だった」

彼の低いつぶやきの通り、鏡の奥に、小さく遠く、黒い影がにじむように浮かんだ。

「やってくるぞ」

その黒い影は、一秒にひと足ずつ、並んでいる鏡を越えて、近づいてきた。彼は聖書を開き、身がまえして待った。

「あと、五つ、四つ、三つ……」

小さな悪魔はなおも歩きつづけた。

「それっ、つかまえたぞ」
彼は叫んだ。鏡台の鏡から出て向いの鏡にとび込む一歩の間に、彼は聖書をパッと閉じて、悪魔の尻尾をはさんだのだ。悪魔はキュッというような声を出して、宙にぶら下げられた。彼はすばやく鏡の向きを変え、悪魔が逃げこめないようにした。
「いったい、どんな顔をしているんだ」
彼は聖書から尻尾を抜き出し、手でそれをつまんで、明るい机の上に持っていった。長い尻尾をべつにすれば、形は人間に似ていたが、鼠よりいくらか大きく、猫よりはいくらか小さかった。万年筆のようにつやのある黒さで、耳だけが特に大きかった。だが、顔つきは、悪魔という名に似つかわしくなく、なんとなく哀れな物淋しいものだった。
「助けて下さい。逃がして下さい」
かん高い、細い、その声も、またあまり景気のいいものではなかった。
「これが悪魔とはねえ。もう少し堂々としたものかと思っていたのに」
彼は期待を裏切られた思いだった。
「お願いです。帰らせて下さい」
再び哀れな声を出した。
「そうはいかないよ。折角つかまえたんだ。毎日くだらない仕事でくさっていたところだ。

ひとつ、何かやってみろ」
「だめです。何もできません。逃がして下さい」
「うそをつけ。悪魔に何もできないはずはない。何かやるまで絶対に帰さない」
悪魔は悲しそうな顔をした。彼はそれを見ているうちに、何かしらいじめてやりたくなり、頭をこづいた。悪魔の表情はさらにおびえたものになり、からだをすくめた。
「おい、何かやってみろ、と言ってるんだ」
「本当に何もできないのです。いじめないで下さい」
彼はその声を聞くと、残虐な衝動がいっそう高まり、尻尾をつかんでひと振りし、壁にぶつけた。キューッという悲鳴と共に悪魔は床の上にころがったが、弱々しく頭を下げた。彼はそれをけとばした。悪魔は頭を下げるばかりだった。
「あなた、何をしているの。鼠？」
帰ってきた妻は、箒で何かを叩いている夫に声をかけた。
「いや、悪魔だ」
「へんなものをもらってきたのね」
「もらったのじゃない。ここでつかまえたのさ」
夫は悪魔の尻尾をつまんでぶら下げながら、スペインの伝説通りやって悪魔をつかまえた

ことを簡単に話した。
「そんなものをいじめて大丈夫なの」
　妻はちょっと心配そうに聞いた。
「悪魔がこんなにだらしないものとは知らなかった。まあ、明るいところで見てごらん」
　夫は電燈の下に持っていった。
「ほんと。ずいぶん情ない顔つきね」
「そうなんだ。何もできないとさ」
　夫は悪魔の大きな耳を指でひねった。
「そんなにいじめないで下さい。帰らせて下さい」
　だが、その声は、妻の加虐性を誘った。
「ちょっと面白そうね。あたしにもやらせてよ」
　妻はもう一方の耳をひねった。それに応じて、悪魔はさらにみじめに顔をしかめた。
「何かやって見せるまで箱のなかに閉じこめておこう」
「壺のほうがいいわ」
　妻は台所から、ジャムを入れるのに使った口の広い壺を持ってきて悪魔を入れ、ふたをした。

「いきが出来なくなるかしら」
「その心配はいらないよ。悪魔は絶対に死なないそうだ」
「それじゃあ、えさもいらないのね」
「小鳥を飼うよりよっぽど簡単だ」
　二人は顔を見合わせて楽しそうに笑った。
　次の朝になっても、悪魔はちゃんと壺のなかにいた。朝食を終えた夫は、煙草をすいながらふたをあけ、言った。
「おい、何かやってみろ」
「そんな無理な……」
　悪魔の声は語尾がかすれた。夫は、その耳をつかんでひっぱり出し、煙草の火を背中に押しつけた。キューキューいう泣き声を出して悪魔は身をもだえたが、何も手向いはしなかった。
「だらしのない悪魔だ」
　そして、また壁になげつけた。だが、悪魔は死にもせず、床の上にじっとうずくまり、情なさそうに上目づかいに見上げていた。
「あなた、会社におくれるわよ。あとはあたしにやらせてよ」

妻は夫に声をかけた。
「もうそんな時間か。だが、そいつを逃がすなよ」
夫は会社にでかけた。妻はその日一日じゅう家にいたが、悪魔をいじめることで、退屈しなかった。
こうして、二人は誰も持っていない、すばらしいペットを手に入れた。だが、このペットは、悪魔という名に反して、二人に幸福をもたらした。
「おい、部長の辞令をもらったぞ。その悪魔のおかげだ」
「いったい、どうしたのよ」
「自分では気がつかないうちに、会社での僕の評判がたいへんよくなっていたのさ。どんなに上役におこられても、それを部下にやつあたりしないのは僕だけだそうだ。そう言われればそうかもしれない。鬱憤は全部こいつで晴らせるんだからな。どんなにいやなことがあっても、こいつさえいじめれば、それを次の日に持ち越すことはない。考えてみれば、部下に当り散らしたり、安酒やパチンコなんかで気晴らしをしている連中は哀れなものだな」
「そういえば、あなたはこの頃、わたしにずい分やさしくなったわね。ちっとも怒らなくなったじゃないの」
二人のうれしそうな話を、悪魔は尻尾を椅子の脚にしばりつけられ、オドオドしながら聞

いていた。
二人の鬱憤は何によらず悪魔で晴らされ、その鬱憤の程度はいじめ方のひどさで知ることができた。
「くやしい。早くそれを貸してよ」
ある日、妻は帰ってきて、ドアを閉めるなり叫んだ。
「なんだ、どうしたんだ」
だが、妻はそれに答えず、ハンドバッグから太い針を取り出し、悪魔の体に力一杯つき刺した。キューキューいう悲鳴と共に、悪魔は
「なんとひどいことを」
と苦しそうにうめいたが、妻は針をひき抜き、つき刺し、何回もくり返した。
「ああ、さっぱりした」
「いったい、何があったんだ」
「こんどはじまる連続ドラマの役がとれなかったのよ。だけど、考えてみれば仕方ないわね」
妻はもうケロリとして、いつもと変らない明るい口調で言った。
「その針はどこから持ってきたんだ」

「帰りがけに、いちばん大きい針を買ってきたのよ」
「手回しのいいことだな。そろそろ食事にしよう」
二人は壺のなかに悪魔をほうり込み、楽しく食事についた。
夫も部長に昇進してから、仕事上の苦労がふえたのか、帰ってからの鬱憤の晴らし方が大きくなった。ある日、ハンマーと金敷を買ってきたこともあった。だが、悪魔は頭を砕かれても、壺のなかで一晩すごすと、次の朝にはもと通りになってうずくまっていた。
妻が大きな鋏で尻尾を少しずつ切りとっていっても、やはり一晩たつともとの長さになっている。二人は、このペットを誰にも話さなかったし、勿論、見せもしなかった。こんなに刺激的で、楽しく、しかも役に立つペットをひとに取られたら一大事だからだった。
このようにして、何ヵ月かたったある夜。妻は寝る前に鏡台に向い、髪にブラシをかけていた。悪魔はそのそばで尻尾に結び目を作られて痛がっていた。彼女は何気なく、ブラシをかけ終った髪を見ようとして、手鏡をとって頭のうしろにかざした。
その時。悪魔はとつぜん、飛び上がって、手鏡のなかにとび込んだ。
「たいへんよ」
妻の叫びに、夫はあわててやってきた。
「どうかしたのか」

「悪魔が逃げたのよ。ちょっと手鏡を動かしたら、このなかに入っちゃったのよ」
夫は鏡を向い合わせてみたが、うまく間隔のとれた時には、もう深い奥で、小さく消えようとしている時だった。
「とんでもないことをしたな。これからどうするつもりなんだい」
「だって、こんなところから逃げるなんて知らなかったもの」
「ちゃんと前に話しておいたはずだ」
「そんなこと、聞かなかったわよ」
二人はしだいに声を高め、罵りあった。もう、その鬱憤を晴らしてくれるものはなかったが、二人の身に深くしみ込んだ習慣は消えてはいなかった。いつの間にか、夫の手には、ハンマーが、妻の手には、鋏があった。
血が鏡の破片のちらばる床の上に流れつくし、うめき声が出つくして静かになった室の片隅では、置時計が十三日の金曜日のカレンダーを音もなくまわし、もはや誰も見るものがないのに、次の日付と曜日とを、何事もなかったように出し終えた。

天使考

天国はずっと独占事業だったので、天使たちはしだいに役人臭をおびてきた。
競争相手の天国がほかにあるわけでもないから、死んだ人間の魂は、ほっておいても天国にやってくる。雑談やふざけっこをしながら、恐る恐る地上からやってくる魂たちに、威張りちらしていればよかった。そのうち、天使たちはますます図々しくなって、太陽のカケラで作った勲章が欲しい、ほかの星の天国に出張したい、などと、勝手なことを言い出した。
それまでは、天地創造の時に働いてくれた天使たちのことだからと、大目に見ていた神様も、ある日、とうとう見るに見かねた。
「なんだ、お前たちは。天使の役目を忘れたのか。地上で苦悩の人生を終えた魂たちをやさしく迎えるのが務めじゃないか。はじめのうちは昇天してくる魂をちゃんと途中まで迎えにいっていたが、だんだん怠けはじめて、今では誰ひとり声もかけない。それどころか、地上での経歴に誤りがあるとか言ってふんぞりかえって、書類をつっ返す。そのうえ今度は、怠

けても怒らない約束をしてくれ、ときた。もう許さん。わしはこれから地上に行って、世界を破滅させてくる。お前たちは、そうなったらどうなるか知っているだろうな」
天使たちはこれを聞いてあわてた。世界が破滅して新しく魂がこなくなると、失業だ。失業した天使たちは、神様の監督のもとで長いあいだ天の川の土木工事をし、新しい世界を作らなければならないのが、宇宙の規則だった。
「それだけはかんべんして下さい。これから僕たちは心を入れかえて仕事をしますから」
「いや、お前たちの怠けぐせは、簡単にはなおるまい。あれを見ろ、原水爆があんなにできている。あれは人間たちがお前らにあいそをつかし、子孫を天国にこれ以上送るまいとしているためだ。わしが行ってひとこと言えば、地上はすべておしまいだ。すべて新規まきなおしにする以外ない」
神様はもっともらしく地上におりかけた。天使たちが目をこすって見下すと、ちょうどそのとき原爆実験が行われた。天使たちはいつもの勢いはなく、泣き出したり、神様の裾にしがみついたりした。
「どんなことでもしますから、それだけは待って下さい」
神様はにやりと笑った。
「それなら、こうしよう。競争相手がなかったのが、こうなった原因だ。今後はお前たちを

二組に分ける。魂を大ぜい天国まで案内した組だけ残し、魂のこなくなったほうの組は天の川の工事に行ってもらう。この計画に従うなら、地上をこわすことをしばらく見合わせよう」

そして、いやおうなく、二組に分けられた。

「一方はガブリエルが社長だ。その門はここに作れ。もう一方のミカエルが社長の組の門はあそこだ。不正な競争はするなよ」

天使たちも、こうなると、競争意識が生まれてきた。負けたら大変だ。

ガブリエル社は、天国に咲き乱れる花を集めて門を飾り、ミカエル社は、星屑を集めてキラキラと明滅させ、魂を招こうとしはじめた。神様はこれを見て

「この調子なら大丈夫だ。天使たちに文句を言わせないためには、仕事をやらせておくに限る」

とつぶやきながら、神殿のなかに戻っていった。

「よくいらっしゃいました。お待ちしていました。さあ、どうぞ」

門の上のマイクがにこやかな声を流しはじめたが、暗く長い虚空を旅してやっと天国にたどりつく魂たちにとっては

「なんだ、入口だけ体裁よくして。どうぞわが社へもないもんだ」

という声も出ないではなかった。そのため、相手を追い抜くには、途中まで迎えに行くサ

ービスをしなければならず、大工事がはじめられた。

ガブリエル社は、虹をひきのばして七色の流れを作り、それに銀色のボートを浮かべた。ミカエル社は、ホウキ星の尾を集めてケーブルを張り、それには金のケーブルカーがつり下げられた。そして、この工事の進み方の早さが勝負だった。寒い旅で疲れ果てた魂たちは、舟だろうが、ケーブルカーだろうが、近くにあればわれがちに乗り込んでしまう。

なにしろ少しでも地上近くで魂をつかまえることが先決だった。天使たちは必死になって工事を進め、以前の怠けぐせは全く失われた。そして、ついに、地上にとどいた。

しかし、もちろん生きている人間にはこれが見えない。悲しみに包まれて人が死ぬと、その人は、たちまちかけつけてきた天使にとりかこまれて面くらう。

「どうぞ天国まではガブリエル社の舟で。花の香りで満ちております」

「金色のケーブルカーはミカエル社です。ハープの音楽を聞きながらどうぞ」

と口々に呼びかける声に驚くのだ。冷たい虚空の一人旅を思って、この世に別れを惜しんでいた者の魂は、夢かとばかり踊りあがり

「どっちでもいいよ」

と相好をくずしてしまう。だが、これでは、その場にいる天使の強引なほうが勝つ。魂の争奪戦で天使の殴り合いもはじまりかねなかった。

もどかしくなった一人の天使は、生死の境をのりこえ、弓に矢をつがえて一人の男の胸に射ち込んだ。これを見たほかの天使たちは、あわててその天使をつれ戻した。

「なんてことをするんだ。あれを見ろ」

女にすがりつかれ、どう言いくるめて縁を切ろうかと弱っていたその男は、突然、情熱をとりもどして愛の告白をはじめていた。天国の春霞のエッセンスで作られた矢を受けたのだから。

「ほっとけば女が自殺したのに。お客をひとり逃がしたぜ」

天使が人間に働きかけることのできる唯一の手段、矢を射つことは、どうも効果をあげないようだった。

両社はそれぞれ弓矢を使うことを禁止し、協定を結んだ。魂を早くつかまえた方が勝。カルタとりのルールに似ていた。

両社の天使は翼にマークをつけた。ガブリエル社は花と虹、ミカエル社のは星とハープ。天使たちは羽ばたきをして各地に散り、それぞれの性質により、それぞれの方法で、魂をつかまえようと努めはじめた。

死刑の執行される場所などは絶好のようだが、そうではない。頭の悪い、しかし、力は少

しばかり強い天使ばかりの集まる所だ。必ず死ぬにきまっているので、両社の天使はずっと狙いつづけている。囚人が十三階段を上り切り、処刑されて、魂が肉体をはなれるや否や、わっと押しよせる天使のためにもみくちゃにされる。だが、これは決して魂にとっていいことではない。

「これはミカエル社のだ」

「いや、こっちのだ」

そのあげく、魂はちぎれて空高く飛び、それから底知れぬ闇に墜落して天国に行けないことがある。人間、死刑にだけはなるものでない。

頭のいい天使は、殺し屋という。殺し屋というものはどういうわけか帽子をいつもかぶっているが、その帽子にはちゃんと天使がまたがっているのだ。

「おれは〝天使〟とあだ名のある殺し屋だ」彼のつぶやきに天使は感づかれたのかと思うが、そうではない。「なにしろ相手をいつも安らかに天国に送ってやるからな」

腕のいい殺し屋を手に入れた天使は、仲間にうらやましがられる存在だ。殺し屋の殺した相手の魂が簡単に手にはいるのだ。殺し屋が仕事にでかける時には、天使は楽しげに帽子の上で歌を口ずさむ。

ガブリエル、ガブリエル、きらめく虹の流れにゆられ、みんなで楽しくガブリエルで行こう

といったテーマソングを。

だが、時には、殺し屋どうしの決闘もおこる。しかも、その相手の上に、他社の天使が乗っかって、

ミンミンミカエル、ピンパンポン

と応援歌を叫んでいたりすると、対抗意識はいやが上にも高まってくる。そして、負けた方の天使は

「ざまあみろ」

と言われながら、殺し屋の魂をつれて

「今までよく働いてくれたなあ」

とスゴスゴと駅につれて行かなければならない。天使が魂を手に入れて浮かぬ顔をしているのは、この場合に限られるようだ。そして

「こんなすばらしいのが再び手にはいるだろうか」

と名馬を失った馬主のようにつぶやき、盛り場を飛びまわって、将来殺し屋の大物になりそうなのを探しはじめるのだ。

陽気な天使たちは、何人かが集まって、ギャング団にくっついている。人相の悪い若者たちが機関銃の手入れなどをはじめると、飛び上がって喜ぶ。

「おい、今夜は豊作らしいぜ」

「もう少し手伝いに仲間を呼んでおこうか」

銃が火を吐き、バタバタと肉体が倒れると、次々と魂が手にはいる。

「五人さんですね。どうぞこちらへ」

案内係の天使は旗を立てて先頭に立ち、魂たちを従えて意気揚々と駅に向う。最も書き入れ時は、警官隊との射ち合いの時だ。警官隊にくっついてきた天使が同じ社の時なら、のんびりと

「そこだ。もう一人ついでに殺せ」

と見物しながらでも仕事ができるが、そうでない時は、それどころではない。気をとられているすきに、自分ののっていた者の魂を相手の社にさらわれてしまうこともある。それに注意しながら、相手の側の魂をかすめとることもしなくてはならない。たくさんのボールでラグビーをやっているようなさわぎだ。

このように、自分のくっついている人物にしんみりした情愛を持たない点で、殺し屋につ

く天使と、ギャングや警官隊につく天使とは、ちがうのである。
　口のうまい天使は、主として病院に集まっている。肉体から離れようかどうしようかと迷っている魂をくどくのだ。
「ミカエル社のケーブルカーは眺めがいいし、それに舟より早いですよ。うちの社を御利用になれば、先に死んだ人を追い抜いて天国に行けます。間もなく発車ですが、今ならまだ席がありますよ」
　と早口にまくしたてられると、たいていの魂はつい口車に乗ってしまう。だが、医学の進歩は、折角はなれかかった魂をひきもどしてしまうこともある。
「残念です。まだそちらの御都合が悪いようですね。ぜひお近いうちに。ミカエル社がお待ちしていますから」
　苦手なのは、生命に執着の強い奴だ。
「どうぞ、お手をお貸ししましょうか」
　と魂をひっぱり出そうとすると
「なんだと。縁起でもない。天使なんかに用はない。まだ死にはしないんだ。ミカエルなんかとっととうせろ。たとえ死んだってお前の所なんかには頼まない」

　と戻ってしまうのだ。天使と会った記憶を魂が肉体に持ち帰ることはできないが、こんな時にはやはりハラハラする。これを受け流しながら巧みにくどき落せるようになれば、もう勧誘員として一流の天使だ。
　交通機関の好きな天使もいるが、これには二種類ある。静かに眺めるのが好きなのと、乗るのが好きな天使とだ。
　静かに眺めているのが好きな天使は、丹念に統計を取り、最も事故のおこりそうな道路のわきの電柱のうえに腰をおろし、一日中、たえまない車の流れを飽きもせずにみつめている。そして、事故が起こるのを待って魂を釣りあげるのだ。気の長い天使でないとつとまらない。時どき、通りがかりの天使が声をかけてゆく。
「どうです、釣れますか」
「いや、惜しかったですよ。もう少しというところで逃してしまいました」
　自動車を追っかけているのは、スピードの好きな天使だ。自動車の屋根の前に腰をかけ、
「急げ幌馬車……」
　と地上に来て覚えた歌を叫び、車体をムチでひっぱたく。運転手が酔っぱらいかスピード

狂だと、インディアンのような奇声をあげてはしゃぎまわる。そして、キーッ、ガチャンの音。天使にとってこの音こそ何物にも代えられないたのしみなのだ。

　だが、それにもましてすばらしいのは、バスの転落だ。めったにおこらない代りにこれで魂をいっぺんにつかまえた時の気分はなんとも言えない。そのため、行楽の季節になると、自動車好きの天使はみなバスを狙う。出発地からまたがってくるのもあるほどだ。車内の酔っぱらいのさわぎが高まるにつれて、上の天使の顔もしぜんとほころびてくる。

　これらの天使たちにとって最もくやしいのは、自分ののっている車をよけようとして、相手の社の天使ののったバスが転落した時だ。いそいそと羽ばたいて谷底に舞いおりる相手を指をくわえて見ていなくてはならないのだ。だが、これはあんまり気の毒だというので、この場合には、魂の一割をゆずって貰えることになっている。

　能率があがるようでそれほどでないのが、工場の爆発や鉱山の事故だ。一人ではとても魂を案内しきれず、そのうちにかけつけてきた他社の連中にもさらわれてしまう。だからといって、大ぜいの天使をいつ起こるかもしれない場所に集めておくわけにもいかない。ルーズな経営者や社員の多い会社に特に注意をして、パトロールの天使の連絡で、すぐにとび出せる態勢を作っておく以外にない。

　大部分のコツコツとまじめに働くのが性に合った天使は、住宅地の一区画を受けもち、毎日巡回するという地味な仕事をつづけている。

天使は人間には見えはしないが、敏感な人間は、天使の視線を感ずるらしく

「なんだかわからないが、どうもいつも誰かに見つめられているようです」

と神経科の医者に訴える人がある。この患者の多い地域は、そこの担当の天使がそれだけ熱心なことを示している。

　だが、退屈な仕事でもある。天使たちは時どき、人々の肩に腰をかけ、いっしょにテレビを眺めることもある。そして、人間には聞こえないとわかっていても

「あっ、間一髪アウト。ゲームセット」

につづけて

「みなさま、人生のゲームセットの際は、ぜひガブリエル社の舟で」

と口に出し、スリラー番組の間には

「ところで、あの被害者も、今ごろはミカエル社の車で天国に向っているでしょう。次の天国行の幸運は誰でしょうか。どうぞごゆっくりごらん下さい」

と叫びたくなるのだ。

また、人々が眠りにつくと、天使はその夢のなかにはいりこんで、少しでも役に立つようにとコマーシャルをしゃべって歩く。だが、悲しいことに天使の見せた夢は、目が覚めると共に全く消えてしまうのだ。何か夢を見たはずだけど一向に思い出せないという経験の人は増えて行くが。しかし、両社ともこの地道な努力によって、お互いに大きな差をつけられないでいるのである。

天国と地上とを往復する舟や、車を操縦する役目の天使は、それほど対抗意識を持っていない。特に、下り車の時には、のんびりと声をかけ合っている。

「おい、どうだい、このごろの景気は」

「まあまあだ」

「この分ならどっちかが失職することもなさそうじゃないか」

「ああ。しかし、こう働いてみると、働くことも案外楽しいものだな」

対抗意識が少ないと、わりあい冷静な判断も下せる。

「われわれの祈りが通じたのか、ちかごろの人間は、やっと自分たちの役目に気がついたらしいな」

「原水爆で子孫をも絶滅させまいとしていることか」

「それもあるが、人生の目的は、子孫を作ることと死ぬことだけだとわかってきたらしい」

「そういえば、小説も、映画も、セックスと殺しばかりになったそうだな」

「すべていい傾向じゃないか」

行きちがって、下り車がいっしょになれない時は、天使は話し相手もなく、ひとり言をつぶやく。

「だが、われわれは何のためにこんな仕事をしているのだろうか」

神様はときどき神殿から出て地上をのぞき、やさしく声をかけることにしていた。

「どうだね。どっちが勝ちそうだね。一生懸命にやるんだよ」

そして満足げに神殿にもどり、天使たちの目のとどかぬ所で命令を下す。

「さあさあ、怠けていないで、早く行ってきなさい。人間たちがお前たちのくるのを待っているよ」

すると、天使たちには見えないように作られたコウノトリがいっせいに羽ばたき、群をなして地上に向うのだ。

冬の蝶

きびしい寒さが空気を水晶のように変えてしまう季節。雪は夕ぐれのなかを硬い粉となって降りはじめ、その足並みを早めていったが、家のなかは初夏のすがすがしい明るさに満ちていた。

「あなた。ちょっと、いらっしゃってよ」

若々しい妻の声は家じゅうに行きわたった。大声で叫んだのではなかったが、部屋部屋にとりつけられてあるマイクによって、声はどの部屋にもやわらかく運ばれて行くのだった。

「ああ、いま行くよ」

夫は返事を送りかえし、熱中していた草花をそのままにして立ち上がった。机の上のプラスチックの箱のなかでは、強いライトを浴びて十センチぐらいの高さの小さなヒマワリが花をつけて並んでいた。彼は、これのもっと小さい変種をつくり、五センチぐらいで花を持たせるようにし、友達に自慢するのを一番の楽しみとして、夢中になっているのだった。

「やれやれ、何の用なのだろう」

彼のつぶやきに応えるように、壁の虹色の光は、彼に先立って廊下を流れた。

「なんだ、また鏡の部屋か」

壁を流れてきた光は、ひとつの室の扉の上でまたたき、止まり、彼の近づくにつれ、扉は左右に開いた。

「どう、これ」

妻は鏡に向って浮き浮きしていた。彼女の向っている鏡のまわりには、小さなスクリーンが九曜星のようにとり巻いていて、そのひとつひとつには、後姿、左右の横や斜め前からなどの姿が、それぞれ写っていた。それらは、まんなかの彼女が髪に手をあてると同時に、いっせいに動いた。部屋の所々に装置されているテレビカメラの働きなのだった。

「なかなかいいじゃないか。それが今の流行なのかい」

夫は、やさしく声をかけた。

「ほら、ごらんなさいよ、この服」

妻は、ゆっくりと部屋のなかを歩きまわった。ゆるやかなローブは、まっ青な海の色だ。だが、ゆれ動くにつれ、その模様のたくさんの蝶が光を帯び、いっせいに羽ばたきはじめるのだ。彼女は、鏡と夫とに交互に目をやりながら小声で歌い、軽くとびはねた。すると蝶々

たちも、群をなして忙しそうに飛びまわった。
「きれいでしょ。うれしいわ」
彼女は夫にかけより、とびついた。蝶々たちは、しばらく羽をやすめ、キッスの終るのをおとなしく待った。
「まだ出かけるには早いよ」
彼は、壁にとりつけられている宝石を星座の形にちりばめた時計を見ながら、今夜のパーティーについて触れた。
「ええ。だけど早く着て見たかったのよ」
妻はちょっと考えて言い足した。
「そうだわ。モンに見せてやりましょう」
モンとは彼等のペット、一匹の猿だった。
「モン！」
「モン」「モン」
声は部屋部屋に伝わっていった。しばらくして扉が開き、足と手を七三に使いながら、猿のモンが入ってきて、隅の椅子にとび乗った。
「モン。どう」

妻はモンのそばでくるくる回り、服の蝶を飛ばせて見せた。モンはくぼんだ目の底に悲しそうな色を浮かべ、無表情に蝶を見つめた。蝶たちは得意げに服の青い海を飛びまわり、モンをあざけった。
夫は、ちょっと手持ちぶさたになり、無意識にタバコを出していた。タバコを口にくわえ、ケースを閉じると、その音に応じて部屋の四隅にある決して狙いを誤ることのない熱線放射器が、サッと熱線を出し、火をつけた。煙はゆれ、ひろがり、部屋に香気を満たしはじめた。だが、モンには好ましい香りではないのか、煙が近づくと顔をしかめ、弱々しく咳をした。
「それじゃあ、もう少し花の世話をしてくるよ」
彼はタバコを投げ捨てて部屋を出ていった。床の絨氈はさざ波をたてて、灰と吸殻とを隅に運んで始末し、静かにもとに戻った。その静かさを破るように、妻は再び鏡に向い、ボタンを押した。春霞のような音楽が四方の壁から流れはじめ、彼女はそれに包まれて化粧をつづけた。忘れられたモンは椅子の上で、膝にあごを乗せ、目をつぶっていた。音楽に聞きほれているのだろうか、聞くまいとして眠ろうとしているのだろうか。
時間がおだやかに流れ、彼女は化粧を終えた。
「さあ」

彼女は螢光のマニキュアをした指で、真珠色のボタンを押した。これを押すと、足もとからゆるやかに香水の霧がわきあがり、化粧の最後の仕上げが行われるのだ。

「あら、どうしたのかしら」

霧は出なかったし、鏡のまわりのスクリーンはぼやけはじめた。あたりは急に暗くなり、部屋のなかは窓から入る、夕闇の持つほんの僅かの光だけになってしまった。

「あなた」

だが、声はどの部屋にもとどかなくなっていた。

「あなた」

気がついた彼女は声を少し高め、小走りに部屋を出ようとした。電気の来なくなった扉は開きっぱなしになっており、廊下には全く光がなかった。彼女が手さぐりで花の部屋に向うとき、服の蝶たちは、光を帯びて楽しそうに舞いはしたが、それは廊下を照らす役には立ちはしなかった。

「あなた」

「ああ、ここだ。だが、どうしたんだろう。こんなことが起るはずはないじゃないか」

「だけど、みんな止まっちゃったのよ。どうしましょう」

「どうしましょう、って言ったって、僕にもわからないよ。困ったな、折角のヒマワリが駄

目になってしまう。テレビもラジオも、それに電話まで全部動かない」

「じゃあ、誰かに聞くわけにもゆかないわね」

「うちだけだろうか」

二人は寒さのしのび込みはじめた窓に近より、外に目をやった。いつもなら夕ぐれと共に輝きを増す少しはなれた家々も、今は冷たく雪に彩られて、濃い夕闇のなかで死んだように横たわっていた。遠くの繁華街のあたりの空にも明るさは何もなく、嘘のような寂しさが占めていた。

「うちだけじゃないわ。町じゅうね」

「ああ、こんな時には、ロケットなんか着陸できないから、大きな事故がおこるだろうな」

「いやねえ」

僅かに残っていた明るさもしだいに窓から去り、代りに寒さがガラスを通ってきた。

「寒いわ」

妻は蝶の模様のローブをかき合わせ、鳥肌をたてた。

「ほかに着る物はないのかい」

「前の服はけさ溶かしちゃったでしょう。下着もこれだけなの」

「少しとっとけばよかったな」

「そんなこと言っても無理よ。配達パイプですぐに手に入るのに、余分に置いとく家なんてないわ。それに、誰もこんなことになるなんて考えもしないもの」
妻はこう言いながら、手さぐりで、机の横のボタンに触れた。いつもならコップがあらわれ、それに熱い濃いコーヒーが注がれるのだが、今は音もたてなかった。
「すぐに直るだろう」
夫はあてもなく言い、タバコを口にし、ケースをパチパチ鳴らしたが、どこからも熱線は来なかった。暗さのなかで、服の蝶たちと、爪のマニキュアだけが、時々ぼんやりと光って動いた。すべてが止まり、静かさだけがあった。二人は長椅子に並んですわり、窓のあたりを見つめていた。
「雪って、降る時に音をたてるのね。怖い」
生まれてから経験したことのない静寂のなかで、二人は雪の積もる音を聞いたように思えた。それは、どこからともなく迫ってくる運命の足音のようでもあった。
「そうだ。地下のガレージの自動車のなかに携帯ラジオがあったな。取ってくるよ」
「早くもどってきてね」
夫は壁を伝いながら、室を出ていった。残された妻は、寒さと心細さを忘れようと、立ち上がって小さく踊りの足取りを踏んだ。蝶々たちは、闇のなかを、めまぐるしくさわいだ。

「あったぞ」
声がし、桃色の小さな灯のともったラジオを手にした夫が、足で床を摺りながら戻ってきた。
「何か聞える？」
二人の見つめる桃色の盤の上を針がゆっくりと回ったが、何の物音もしなかった。
「故障かしら」
「そんな筈はないよ。おとといのドライブの時はよく聞えたじゃないか」
「それじゃあ、どこの局の電気も……」
夫はあわててダイヤルから手を離した。完全な機能を持ちながら何の役にも立たないで桃色に光っているこの機械が、今は気味悪く思えたのだ。
「ねえ。お隣りまで行ってみましょうよ」
妻は泣きそうな声で言った。
「だけど、何で行くのだい。道路の電気だって止まってるのだから自動車は動かないよ。歩いて行くっていったって、戸を開けたら、たちまち凍えてしまう。それに、そんなことして行ってみたって家と同じことだよ」
「だって、どうしたらいいの。寒い」

妻は低い声で泣いた。
「もうすぐ、みんなもとの通りになるよ。さあ、目をつぶって」
夫はやさしく抱きしめたが、彼女の冷えたからだを、窓ガラスを越し、床を這い、限りなく迫ってくる寒さから防ぐことはできなかった。それに、彼のからだも這い寄る寒さのため、つめたくなる一方だった。
「おなかがすいたわ」
妻は弱々しい声で言った。
「さっき、どのコックもひねったけど、何も出ない。こうして待っている以外どうしようもないのだよ」
どちらからともなく唇をよせ合った。
壁の時計は止まっていたが、時間はつめたく流れた。
「眠いわ」
「ああ、僕も」
「静かで、こんな気持ちのいい眠りははじめてね」
二人は肩にくびをもたせ合って囁いた。
「悪い夢だよ。目がさめたら、なにもかもすっかりもと通りになっているよ」

「パーティーも、香水の霧もね」
「ああ。だけど、モンはどうしたろう。どこかの部屋で寒がっているのじゃないかな」
「モンには毛皮があるからいいわね」
二人は、とぎれとぎれに話し、いつしか眠りにはいっていった。再びさめることのない眠りとは知らずに。ラジオの桃色のかすかな灯りを受けて、蝶々たちはしずかに羽を休め、時時、思い出したようにかすかな動きをし、そして全く動かなくなった。光の届かない机の上では、ヒマワリたちが、ゆっくりと頭をたれ、音もなくしおれていった。
死のとばりが、この家を包んだ。おそらく、どこの家をも。
だが、柔かな音が、この家のなかを動きまわりはじめた。モンがこの家の主人となった喜びを示しているのだ。電気のチラチラした光にからかわれることのなくなったモンは、どこにかくしてあったのか、食料をはこびだして、来客用の部屋のまんなかにつみあげた。
そして、もぎりとった椅子の脚を持って、貴重な骨董品だった木製の机の上に飛び上がり、両手の間にはさんで、錐のようにもみはじめた。
窓の外の漆黒の闇のなかを舞う雪をよそに、誰も見る者もない暗さのなかで、モンは楽しげに仕事をつづけた。

最後の地球人

世界の人口は限りない増加を続けた。

「いったいどこまでふえるんだ」

「これ以上ふえたらどうなるんだろう」

「なんとかしなくては」

時々、思い出したように、議論がくり返された。しかし、子供を作るな、とも言えず、生まれてきた者を始末するわけにもいかなかった。人間にはそれぞれ生きる権利があった。

だれもがこの現象を憂えていた。だが、実行についていては

「自分だけは別さ」

といった調子で考えた。みなが同じ気分だったので、人口は決して減る気配を示さなかった。

世界の至るところが都会となって行った。サハラやゴビの砂漠の緑化計画がやっと完了し

た頃には、もうその森を切り倒し、そこに都会を建設しなければならなかった。

もはや戦争をするどころではなかった。戦争は余裕のあった時代の遊びのひとつとして思い出された。だが、戦争をしなくなっても、科学は進歩した。ふえつづける人間を整理するには、科学に頼らなければならないのだ。

人口がふえると、その生活を保障するために、科学を進めなければならない。しかし、科学が進むと、生活が高まり、さらに人口がふえた。このいたちごっこをくり返し、人間たちは全能力をあげて人口増加との悲壮な戦いをつづけていた。一刻も休むわけに行かず、また、勝利の見とおしのない戦いだった。

食料は人工的に合成されるようになり、植物はいらなくなった。炭酸ガスを酸素にもどすことも機械的に行われるので、植物の有難味は少なくなる一方だった。べつに植物が嫌いになったのではない。植物を生育させる場所がなくなっていったのだった。

動物や、昆虫も、とうの昔に一掃された。食料が惜しいからではない。そんなものを生かして置く場所がないのだった。人間の生存のためには身を引いてもらわなければならなかった。地球は人類のものなのだから。

科学の進歩は、副産物として、寿命をも伸ばした。これがまた、人口増加に拍車をかけた。地球が一回転するたびに、その表面の人口は雪だるまのようにふえていった。

「百億を越えた」
そして間もなく
「二百億を越えた」
とどまるところを知らなかった。世界はひとつの都会となった。人類は完全に地上に満ちあふれた。
政治家も、科学者も、ついに匙を投げた。どんな社会政策も、宇宙移民も、この洪水を防ぎ切れなかった。
「もうたくさんだ、助けてくれ」
だれもかれも心の底でこう叫んだ。口に出して叫ぼうにも誰に向って叫んでみようもなかった。
全人類が、はじめて、同じ反省と祈りを持つことの出来た一瞬だった。
増加は止まった。そして、減りはじめた。調べてみると、一組の夫婦から、一人しか子供が生まれなくなっていたのだ。
学者たちは例によっていろいろの理屈をつけた。
「各地の原子炉から出た放射能が空中にたまったせいだろう」

「いや、人口がふえすぎると緊張がつづき、ストレスが起って、からだに影響を与えるものだ」
「いやいや、人類という種族の寿命がつきたんだ」
「とんでもない。動植物を一掃したので自然界とのバランスが崩れたんだ」
「ちょっと待ってくれ。人工食料ばかり食べていると体質が変わってしまうといった考え方もあるぞ」
それぞれ、自己の主張を通そうと躍気となり、どうすればいいかについてはなかなか一致しなかった。もっとも、少しぐらい減るのは結構じゃないか、といった気分が漲っていたので、なにも熱心に対策をたてる必要もなかった。
「猿でも進化させるんだな」
といった冗談をとばす者もいた。だが、猿ばかりでなく、人間以外の動物はすでに絶滅していた。
戦いは終った。余裕がでてきた。世の中は少しずつ落ちついていった。両親は子供を何よりも可愛がった。その一人っ子たちは、成長すると両親から財産をうけつぎ、何代かたつとだれもが裕福になるのだった。みんなそれぞれ資本家や地主になった。それに、かつてのようにわけもわからず働きつづけることもいらなかった。働く時間は少なくなった。厖大な生

産設備は、ちょっと動かすだけでもあり余る商品を作りだし、宇宙進出のためのロケット工場なども不要となった。

宇宙にでかけて行った移民たちは、次々と引きあげてきた。

「ばかばかしい。地球で暮らせるのに、宇宙であくせく働くことはないじゃないか」

「そうさ。人間には地球が一番だよ」

遺産成金たちの乗ったロケットは地球めざして降りそそいだ。よほど運の悪くない限り、遺産成金になれた。だが、その運の悪い連中にも、子供に死なれた夫婦からの養子の口が待っていた。

依然として、一組の夫婦から、一人しか子供が生まれなかった。原因については前より熱心に研究されたが、結論はどうしても得られなかった。

人類の滅亡。たしかに人類は滅亡への途を進んでいた。だが、滅亡といっても、かつて人類がその発展期に自分勝手に想像し自分勝手に恐怖したような、陰鬱な雰囲気は少しもなかった。青年の頃思い悩んだ死と、天寿を全うする前の老人の考える死との間には、違いがある。むしろ明るい楽しげな時代となった。

すべての生産は停止した。しかし、食料や電力は滅亡までには充分ある。だれも働かなかった。働くことの意味がない。消費するだけの生活でも、道徳的にまちがいではなかった。

人類の未来には限度がある。このことを悟ると、考え方は一変した。

長い間、人類は無限の発展を信じていた。そして、意識するしないに拘らず、未来の子孫たちのために、より良い社会を遺そうとして、すべての人があらゆる時代に働きつづけて来たのだった。その合計したら数え切れない過去の人々は、今となってみると、この滅亡期の人間たちの奴隷だったのだ。

今はみなが貴族であった。過去の厖大な人類にかしずかれ、その血みどろの努力の成果を味わうだけの生活をすればよかった。貴族だから、なんでも気の向くまま、したいことができた。

真の貴族は、金銭など問題にしない。ダイヤを山と積み、火をつけ、そのまわりで古い酒を浴びるように飲んで夜を過す者もあった。

あまり面白いことではないが、世界中を旅行して回る者もいた。昔から大切に遺されてきた遺跡をぶちこわし、住む者のなくなった地方をみつけると、原水爆を飛行機からポンポン投げつけるといった、高価な遊びをつづけた。

古代の書物も、高度な科学の論文も、なにもかもいっしょに消えていった。だれも止める者はない。学問など要らないのだ。いい子孫を残そうという欲求からの恋愛、立身出世、未来をも支配しようとする権力争い、戦争。こんなことを扱った物語や教訓は過去の奴隷たち

の読むもので、貴族たちには無意味だった。また、どんな科学も、人間のいなくなる世界には無関係のものだった。

人々は何物にも執着しない一生を送れた。冬が迫った秋晴れの日の空のような、かげの全くない、透明な気分の人たちの暮らしていた時代だった。

地球上でいちばんいい地方に、たった一軒残った家のすばらしい部屋に、若い夫婦が住んでいた。このほかには、どこを探しても、人間はいなかった。彼等は世界の王と王妃だった。昔から多くの人間たちが望み、一人として得られなかった地位。全世界と全人類の作り上げた財産の所有者と呼べた。もっとも、財産の方は、貴族たちによって大部分なくなっていた。しかし、王と王妃は、そんなことをいっこうに気にしなかった。威張ることもなく、残念がることもなかった。

王と王妃には、それぞれ名前はあったが、使われることがなかった。名前は「あなた」でも、「おい」でも、「ねえ」でも、なんでもよかった。

「ねえ。いいことに気がついたわ」

「何だい」

「あたしたち、何も着物をつけている必要はないんじゃない」

そう言えばそうだった。べつに羞恥心は起らなかった。世界はどこでも彼等の家だったし、他人はいないのだ。それに、彼等は生まれた時から、いや、生まれる前からの婚約者だった。

二人は服も下着もぬぎすて、裸のまま毎日を過した。すべてに面倒くさくないだけがとりえだった。

裸になった二人の皮膚の色は、なんとも言いようのない色だった。白でもあり、黒でもあり、褐色や黄色味も帯びていた。彼等はどの人種にも属していたのだ。人口が減りはじめてから、混血が行われるようになったからだった。瞳も、髪も、同じことだった。

比較するものがないので、美しいと言えるかどうかはわからなかったが、お互いに美しいと認めあっていた。

口に出して確かめなくても、完全に信じ合い、愛し合っていた。嫉妬を抱いたこともなかった。人類はじまって以来、だれもが理想としてきた絶対的な愛の姿と言えた。

そして、彼女は、子供を宿した。

「最後の子供ね」

「男の子だろうか、女の子だろうか」

「名前を考えておきましょうよ」

だが、あれこれ迷っているうちに、二人は顔を見合わせて笑った。名前の必要はなかった。

出産の日が近づいた。彼女は部屋に入った。その室には、分娩にも使える、自動式の万能医療装置の一台が、人類最後の一人の誕生のために遺されていたのだ。

難産で、出産は長びいた。彼は落着かぬ気分で待った。機械に任せて見守る以外ないのだった。

ランプが美しく点滅し、出産は完了した。赤ん坊は直ちにプラスチック製の保育器のなかに自動的に運ばれていった。

だが、妻のほうは、すっかり弱っていた。機械は危険を示す赤いランプを明滅させながら万全の手当を忙しく続けた。しかし、彼女はますます衰えて行くばかりだった。

そして、彼女は保育器の上で光る青ランプを見て、子供の事情を知り

「子供のことをお願いするわ」

と言った。彼のうなずくのを見て、安らかに息を引きとった。夫に先立つ妻の死際として、こんな安らかなものはなかった。夫は誰とも再婚せず、妻の思い出だけを抱いて、子供を育てていってくれるのだ。

しかし、彼にとっては、全く反対だった。文字通りのかけがえのない妻だったから。

長い間、彼は妻のなきがらにすがりついて泣きつづけた。そして、泣きつかれて眠った。

彼の眠っている間にも、機械は自動的に動きつづけた。死後一定時間たつと自動的に処理

してしまう装置がついていた。彼はそれを止めて置くのを忘れていたので、機械は妻の死体を完全に分解し終った。

彼が目を覚した時には、そこには小さな杭のように一方がとがった骨が一本残されているだけだった。このとがった方を墓地ドームの床にさせば墓となる。一時あまり人口のふえすぎた時代、墓地に地面をとりすぎるので、こんな方法がとられていた。そんな頃に作られた機械だったので、彼が目を覚した時にはすべてが手おくれとなっていた。

彼はその骨を抱きしめ、前より激しく泣きつづけた。防腐したまま、彼の死ぬ時まで残して置きたかった。だが、もうどうにもならない。だれも味わったことのない大きな別離の悲しみだった。

彼は骨を抱き、外にフラフラと歩み出た。打ち明ける相手もなく、なぐさめてくれる相手もなかった。ラジオもテレビもなく、心を安らかにする音楽も流れていず、静寂な世界だった。子供が成長し、保育器から出せるようになって、話し相手になってくれるまでは。

彼は、聞く者のあるはずがないのに大声でわめき、目に涙をあふれさせ、力をこめて骨を胸にだきしめ、夢中でかけ回った。

あっ。彼はつまずき、足が乱れ、前に倒れた。骨のとがった方が裸の胸につきささり、血が噴いた。

彼は起きあがれなかった。骨はなかなか抜けなかった。子供を残しては死ねない。彼は這いながら治療装置にたどりつこうともがいた。しかし、血は流れつづけ、遂に動けなくなった。

　雨が降り、日が照り、風が吹き、彼の死体はいつの間にか風化し、とび散った。

　地球は、その表面の出来事にはおかまいなく回りつづけた。

　薄暗い保育器のなかの赤ん坊は、静かに成長をつづけていった。世界には、ほかに、成長をつづけるものはなかった。外部から指示を与える者はなくても、保育器は赤ん坊のため、温度を調節し、空気を流通させ、栄養と適当な運動を与えるのだった。

　赤ん坊は男でも女でもなかった。一人しかない人間にとって、一つしかない生物にとって、性の区別は意味がなかった。

　赤ん坊は、しだいに育った。手足を動かしても、触れる物は、弾力のある、柔かいプラスチックの覆いだけだった。そして、薄暗さだけがそのなかにみちていた。

　なんとなく薄暗いな。明るさについては全く知らなかったが、もっと明るくていいはずだと思った。しかし、外から、保育器を開けてくれる者はないのだ。

　彼が抱いた最初の意識は、ここは薄暗い、ということだった。そして、その感じは、しだ

いに高まり、その絶頂で衝動は思わず声となって出た。

「光あれ」

　保育器は、こわれた。彼はそこから這い出し、ひろい空間のあることを知った。

　彼は、この空間にむかって、何かをしなくてはいけないのだな、と思った。誰に教えられたわけでもなかったが、そのやるべきことを、全部知っているような気がした。また、それが必ず出来るという自信もあった。

食事前の授業

「さあ、よく覚えておくんですよ。カビというものはね、水分にめぐまれ温度が適当なところに生えてくるものなのですよ」
と先生は言い、生徒たちも、はじめのうちはみな神妙な顔つきで聞きいっていた。そのうちの一人は、よく覚えこもうとしてか、先生の言ったことをくりかえした。
「水分がないとだめなんですね」
「ええ、そうです。このいくつもあるオダンゴのなかで、いちばん火の近くに置かれているのを見てごらんなさい。これは、温度にはめぐまれていますが、その温度が高すぎると、ほら、このように水分が蒸発してなくなってしまっているでしょう。だから、これにはカビが生えてこないのですよ」
生徒たちはそれをたしかめ、うなずきあった。先生はそれを見て説明をつづけた。
「では、カビには水分が必要であることがわかりましたね。しかし、水分があっても、温度

が低すぎた時にはカビは育ちません。こんどは、こっちの、火からはなして置いてあるオダンゴのほうをごらんなさい。水分は含んでいますが、温度が低いので、カビは生えていないでしょう」
「ほんとにそうですね」
「この自然の法則を知れば、食べ物をとっておくにはどうすればいいかわかりますね。そうです。乾燥させるか、冷凍させるかしておけばいいのです」
生徒たちは、少し飽きてきた。先生の面白くもない話が早くすんで、あのオダンゴを食べさせてくれるといいな、と、そればかりを考えはじめ、つばを飲みこんでいた。生徒の一人は気をきかせて、オダンゴのひとつを指して、質問の形で先生に謎をかけた。
「ねえ、先生。そのカビの生えたのは食べられるんですか」
だが、謎が遠まわしすぎて、先生には通じないようだった。
「だいじょうぶ食べられます。これは水と温度が適当だったので、このようにカビが生えはじめてしまいました。しかし、ほっておくと、カビがなかのほうまでひろがってしまい、食べられなくなってしまいますが、これはカビが生えはじめたばかりですから、よく表面を拭けばだいじょうぶです。それからまた、カビには時がたつと、胞子を遠くにまきちらす性質があります。それが水と温度にめぐまれたものにつくと、ふえはじめて……」

先生の話はまだまだ続きそうなので、二、三の生徒は、思わず口走った。
「ねえ、先生、まだ食べてはいけないんですか。いいでしょう」
だが、先生は、それをとどめた。
「まあ、お待ちなさい。食べるのはもう少しカビを調べてからですよ。ひとつカビをとって拡大して見てみましょう。カビにはいろいろな種類があります。このオダンゴにはどんなカビが生えているでしょうか。クロカビでしょうか。黄色いカビでしょうか。それとも白いカビでしょうか」
お行儀の悪い生徒のひとりは待ちきれなくなって、とうとうヨダレをたらしてしまった。
「すごい集中豪雨だな」
「いやだね。また洪水か」
だが、洪水などより、もっといやなことがすぐにつづいた。とつぜん空中からあらわれた巨大なピンセットが一人の男をつまみあげていったのだ。

セキストラ

――セキストラに関する資料の切抜きを順を追って蒐集した――

ある雑誌の「世界秘境特集」の記事の一部

南米奥地に、昔、インカ帝国という高度の文明を持った国があったが、西欧の植民地獲得競争の前に、悲惨な滅亡をとげた。
この話については、西部劇映画ではインディアンをやっつけるとホッとする人でも、白人をにくむ。しかし、ただひとつ救いとなることは、莫大な財宝が白人の手に帰さなかったことである。この財宝をめぐって数多くの話題もある。
今は遺跡のみ残り、旅行者も多いが、インカの子孫たちの、東洋人に似た警戒的無表情の底は窺い知るべくもなく、文字を持たなかったこの国の歴史も闇に消え、かつて支配した太陽神の末裔の行方もまた誰も知らない。

ある興信所の調査報告

佐山昭二。三十五歳。渋谷区朝日町所在の高級アパートの八階の一室に居住。

職業、電気機器を主たる取扱品目とする貿易会社を経営。本社は千代田区丸ノ内にある。

経営状態は非常に良好。

容姿は端正で上品である。

学歴、係累、一切不明。某知人を通じて聞かしめたところ、「いや、私は戦災孤児ですよ」と笑って答えた由。

金持ちであれば尊敬する風潮に加え、本人は世界の情勢に通じ、自然科学、語学にも詳しく、話題は豊富にして、人物温厚。彼を知るものでほめぬものはない。アパートの室内は、書棚には洋書が並び、精巧なオール・ウェーブのラジオ、豪華な家具等、一流のものばかりである。

最近米国のバイヤーがしばしば訪問する。

取引銀行の支店長に面接して調査するところによれば、最近大きな輸出契約の見通しがたったとのことである。

「日本は資源の少ない代り、技術があるのですから、電気機具の輸出で国を富ませる以外あ

りません。そのうち詳しく判るでしょう」と内容については言葉を濁したとのことであるが、その他支店長の意見を綜合するに、預金も相当にあると推察される。

以上の如くであって、取引きに関しては殆んど心配ないと認められる。

ある新聞の外電

（ワシントン発）米国政府は戦後増加の一途をたどる青少年の不良化を看過できず、さきに下院で提案された青少年対策委員会設置法案を本日大統領は承認した。

（ワシントン発）青少年対策委員会は数次にわたって開催され討論されたに拘らず、依然として適切な対策が立たず、民間に広く意見を求めるため公聴会を常設することに決定した。

佐山氏のアパートに配達されたアメリカからの航空便の一部

先般の御依頼により、帰国後、上下院に猛運動を開始し、更に委員会にくい込み、見通しは充分です。今日迄の運動費明細を同封しました。

ある週刊誌の記事

米国の無軌道の一途をたどる青少年の不良化に悩む政府は、委員会を設けて、検討し続けて来たが、結論の出ないまま今日に及んだ。

最近ある業者が持ち込んだ一種の機械の使用を公認するかどうかの問題が起って来た。この機械は、ある種の弱い電流を発生する装置で、人体の一部にとりつけ、スイッチを入れると非常な性的興奮を起し、性行為と同じまたはそれ以上の満足を与える。

業者の説明によると、青少年は性的にはけ口がないから暴力化するので、これにより平穏に処理すれば良いとのことである。この機械はセキストラ（SEXTRA）と称されている。

すでに病院にて不感症の婦人に使用し、ヒステリーを全治せしめた例を多数記録した報告書が添付されている。また医学者の人体に無害であるとの、心理学者の許可すべきであるとの、意見書も提出されている。宗教関係者その他に反対意見もあるが、委員会では暫定的に、少年院収容の人員に限り、試験的に使用を認めることに決した。

日本でも近いうちに話題になるに違いない。

セキストラを少年院にて使用したところ、非常に良い結果を得た。少年少女とも柔順になり、一般の青少年以上に温和になった。その上揃って程度の高い本を求め出した。自然科学、政治経済、宗教、芸術等、但し文学のうち恋愛を扱ったものはあまり関心を示さない。

各人が読書にふける姿は、大学の図書館以上の落着いた雰囲気で、誰が見てもかつての少年

院とは思わない。

退院せしめても、何等問題はないと思われたが、何れもその機械を返却したがらず、無理に求めると退院を肯じない。

しかしながら、好影響ははっきりとみとめられ、一般発売は時期の問題と見られる。

佐山氏宛のアメリカからの電報

万事うまく行く

ある経済紙の記事

米国にてすでに発売されたセキストラは相当な売行きを示し、使用した人々はセキストラでなくセキスパートだと言っているそうである。青少年の間ではレッチィの愛称にて呼ばれ、かつてのテレビの普及以上の速さである。

日本からの部品の真空管その他の輸出は徐々に増加し、電気産業は近来の不況を脱しつつある。某社の貿易担当重役は「これこそセキスポートです」との冗談も出るようになった。

これに伴って電気関係の各社の株価は増配を期待され、すでに相当の高値を示しているが、更に国内販売近しの材料を織込み、一層の続伸が予想される。

佐山氏の会社の社員が友人に出したハガキ

先日は失礼。わが社は空前のセキストラ・ブームで、小生このごろ非常に忙しい。うちの社長が前から今日あるを予期していたとしか思えないほどの景気だ。だが、社長は別に有頂天になることもなく、政界進出を策しているらしく、社長の活動は大変なものだ。

小生もおかげによりボーナスが予想外に出たから、次の日曜に温泉にでも行くつもりだ。よかったら一緒に行こう。

敬具

ある新聞の記事

（ニューヨーク・村山特派員発）セキストラは欧州各国にて逐次採用され、保守的な英国政府も近い将来許可するものとみられる。短期間にこの様な流行をみたものは、かつてのスペイン風邪、その後のロックンロール位のものである。

米国にては当初のテレビ大の大きさから、その後の研究によりトランジスターを使用してハンドバッグ位のポータブルが出現し、青少年のドライブの必携品となった。

先月末アンテナ付きのセキストラが売り出され、放送局から人間を使って特長あるアクセ

ントをつけた電波を送り始め、セキストラ・スターというべき職業が発生する気配が現われた。

これにより、青少年層から成人にも愛用者が増加している。

（ニューヨーク・村山特派員発）先般来セキストラ・スターが現われたが、その後音楽でいえば電子音楽に当る人工的波長発生器が発明され、スター以上の各種のアクセントが自由に送信される様になって快感は更に高められ、セキストラ・スターは影をひそめた。

この機械は通称セキソフォーンと言われている。

このため、セキストラは漸次中年の夫婦間にも使用された。当初懸念された家庭破壊は全く起らず、むしろ性的欲求不満による不和の解消に役立っている。しかし、婚期にある青少年はあまり結婚に関心を示さない。識者の意見によれば、性的好奇心による軽率な結婚が減少して、今後理性と精神的愛情による結婚の形で徐々にあらわれるものとみられるから、歓迎すべき現象であるとされている。

米紙に掲載された記事

（在東京特派員記）日本においてはセキストラ一般発売の政府の許可がまだ下りずにいる。

戦後の変革は相当あるとしても、性に関する考え方が依然として閉鎖的である大衆が多い。更に関係官庁、政党の支配的地位にある者が他国に比し平均年齢が著しく高く、保守的な観念を持っている。その上文化人と称する一団があって青少年に大きな影響力を持っている。この文化人はアメリカの風潮に対しては何事によらず反対する傾向を持っているので、今般のセキストラ販売について、かつてのフランスのコカコラ排斥運動に似た反対論を述べている。

政府、文化人の意見が一致したことは、これまで滅多になく、新聞の漫画欄の種になっている。

以上の如く普及は困難とみられるが、米国の驚異的成果を知り、まじめに検討している人も多くなった。

また密輸密造も次第に多くなり、警察関係者で取締りについて研究しているが、使用者が凶悪化するのでなく逆に善良になる傾向があるので、取締りは困難で、すでに多数使用されている見込みである。

ある新聞の記事

(香港・岸本特派員発)中共政府は人口増加の速度が国家建設速度を上回り、これではいつまでたっても目標に達しないとの理由で、さきに男子三十歳女子二十五歳まで結婚を許可し

ない法律を施行した。

その後性的不満が各地で険悪な形で発生している。地方により上司反抗、器物破壊等の反革命の形をとり、台湾国府系のこれに乗ずる扇動も見られた。

中共政府は対策を練っているが未だ結論を得ず、ある筋よりの報道によれば、セキストラの使用について研究を始め、使用を認めることになると言われている。

(香港・岸本特派員発)さきごろ中共政府はセキストラの使用を一般に認可し、「建設号」と名づけて販売してきたのであるが、その後報ずる所によれば、各地の不穏な形勢は逐次治まりつつある。更に建設の能率が上がり、勉学の向上もみられ、この状態が続けば人口増加も一応ゆるむものとみられる。

ある新聞の社説欄

いよいよ難航を続けていた文化装置公社法案が成立し、セキストラの市販が近日中に行われる。

諸外国の例より見て、良好な結果をもたらすものと思われる。しかし、ここに至る間に多くの反省すべき点があった。

中共の採用以来の進歩的文化人の豹変の有様は批判されるべきである。それに、利権をめ

ぐっての汚職。国家的発言をすべきに拘らず、当選第一のため青少年にこびる発言をした議員。われわれ国民は指導的立場の者の猛省を促したい。

また、文化装置なる名称もおよそ面白味のない名称で、官僚がよってたかって出した知恵の見本である。

今後の公社の運営についての万全を要望しておく。

普及に伴い、受感料金の引下げも将来起るべき問題であり、旧赤線業者のセキストラ・ハウス開業については、健全な普及のため速かに処理を講ずべきである。

しかしながら、一般発売は歓迎されるべき事であり、濠州・東南アジアに根強く残る日本の人口増加に対する恐怖を消し去るものとして好感を持たれつつあるので、広く一般への普及を望むものである。

ある総合雑誌に載った評論家の論文

近世欧州に発生した婦人解放運動は、世界にひろがると共に、これに伴って性の解放についてもいろいろ試みられてきた。しかしながら、常に経済的及び宗教的道徳的制約に直面し、戦後は無軌道にそれる弊害のある方向に走る等多くの問題が山積して現在に至った。

今日、セキストラ発売の時代となって、予想もしなかった形で解決されたのである。古

来、性の享楽は封建制君主及び貴族階級の特権であり、資本主義勃興以来は一部ブルジョア階級により独占されてきた。この経過により、性と経済との関係は切り離せないものとの観念を植えつけるに至ったのである。

この盲点をついてセキストラの発明をなしとげた人物が不明であるのは遺憾であるが、われわれは、新しい時代を開拓した偉人として賞讃するものである。

経済学に於て、マルクス、レーニンは偉大ではあるが、単に進むべき方向を示したに止まり、直接金銭を各人に配ったわけではない。

性の領域に於けるセキストラの誕生は、直接大衆に結びつき、一部階級の独占物を更に優れた物として大衆に与えたもので、原子力の解放と共に今世紀の特記すべき事件である。

ある新聞のレコード評の欄

△……今月の新譜として、アメリカで大流行の「レッチィと山に」がカーティンの吹込みで発売された。かつてのプレスリーに勝る売上げ記録を米国で示したものであるが、柔かい雲に包まれた感じの曲にふさわしく、この女流歌手はなごやかに歌っている。今後の流行の進み方を知る上に一聴に値する。(G)

ある新聞の社会面より

警察庁長官は本日の記者会見で次の如き談話を発表した。
一、セキストラは次第に普及して来たが、これに伴い性犯罪は全くなくなった。
一、凶悪犯罪は激減して、現在発生するのは大部分精神異常者によるものである。
一、婦人の性的不満に基く万引、青少年の自殺、街頭の娼婦は何れも減少しつつある。性病の増加も一応止まるものとみられる。
一、一方サギと窃盗は増加している。これは生活に困った売春関係者によるものと、セキストラ入手のためのものである。
　前者に対して速かな更生援助を、後者には購入のための金融機関の開設を関係当局に要望する。

ある新聞の身上相談欄

質問　二十五歳の一児ある人妻。現在三十五歳の夫は三年前恋愛結婚したのですが、その後次々と女出入が多く一週間も帰らぬことがしばしばあり、子供のために我慢してきました。最近セキストラを手に入れてから一切外泊はしなくなりましたが、喜びもつかの間、私との

夜の営みは一切せず困っています。どうしたらよろしいでしょうか。（青森、悩める妻）

解答　あなたのような世間知らずの方がまだいらっしゃるとは驚きました。早速御主人にお願いしてもう一台手にお入れなさい。セキストラ使用後、御主人が自宅へ帰られるようになったのは、あなたに愛情があるからで、他の女と手を切ったのは愛情を持たなかった証拠です。

　購入費用がなければ、最寄りの銀行のセキストラ資金の借用をおすすめします。手軽に用立ててくれます。御使用後まだ不満がおありでしたらもう一度投書して下さい。たぶん投書される気になる筈はないと思います。

ある雑誌の今月の映画評欄

　セキストラ時代に入ってから、映画は最大の変化をとげた。恋愛映画は全く不況である。以前の恋愛を喜劇的に扱ったものだけが受けている。

　今月は、記録映画の「火山の活動」「エスキモーの歴史」の二本立て、日本物では「黒頭巾の山賊征伐」の子供向け、「火星の洞穴人」の空想科学物のみが六分の入りで、他は三分以下である。

　米国では宗教物が盛んらしいが、日本では今後如何に進むか、絶対観客数の減少をどうす

るか、大きな課題として各社の研究を期待する。

ある新聞の小ばなし欄

ワイセツ取締法規撤廃

—警察が今まで押収したワイセツ文書を返すそうだ。

—よし、すぐ行こう。

—今どきあんな物に興味を持つ奴がいるのかね。

—あいつはくず屋さ。

（品川区・トリコ星）

ある新聞の投書欄

△今月の本欄によせられた投書は二千五通、数ヵ月間依然としてセキストラが八割以上を占めている。異性間の性行為に興味を失って結婚数が激減し人口増加が停止した点をついて、新しい麻薬であると禁止を叫ぶもの（茨城・一農民）。これに反して、精神的愛情が初めて判った（神奈川・元軍人）。人工受精で優良な子孫のみを計画出産出来るから良い傾向である（遺伝学研究所）等の賛成論。

△また先月まで散見された宗教的反対論は消えたが、これは予想に反して宗教が盛んになったからであると、金もうけ第一の一部宗教家に不満をのべるもの（千葉・一主婦）等が目立った。

△大体の傾向としては、社会の平穏化、生産の上昇による好況を歓迎している。どんな変革でも馴れれば安住するものであるが、ましてよい結果が多く、賛成は七対一と圧倒的に多い。

バーの女の子から佐山氏の会社の秘書課員への手紙

このごろちっともいらっしゃいませんのね。セキストラも一応行き渡ったので、おひまになったのではございませんか。

あなたのところの社長さん随分御活躍ですのね。新聞によれば、いまごろはイタリーとか。お帰りになったらぜひお連れになっていらっしゃってよ。

昔とちがって、セキストラ以来、お色気がひっこんだ代り、知的な会話と純粋なお酒の味が売りものになって、様子が一変しましたの。

ではお近いうちにおいで下さいませ。お待ちして居ります。

ある新聞の社会面

△昨夕、街の発明家が検挙された。城東区の山田某（四二）は、約一ヵ月前のある日あくびをし、翌日クシャミをしたのを、これはセキストラを通じて脳を刺激した電波を誰かが放射したからであるとし、世界のどこかにある秘密結社が電波により中枢神経を経て人類の意志を支配せんとしているとの説を、街頭で演説したからである。

係官の訊問には、電波の出所については上空の電離層の反射を巧妙に利用しているらしいから不明であると述べ、空とぶ円盤からかも知れないといっている。

また、あくび、クシャミは、世界征服の第一歩として試験的に行ったものであると説明しているが、その頃の記憶は誰もなく、取調べは証拠反証共になく困難である。

△昨日報道の発明狂の山田某について医師の鑑定によれば、セキストラくらい自分で発明できたというくやしさからの一種のノイローゼであるとのことである。

セキストラ以来、ノイローゼは減少しつつあったが、こんな新型は珍しいとして、釈放されたが、直ちに病院に入れられた。

ある新聞の社説欄

本日を以て、セキストラ日本発売一周年を迎える。賛否両論のうちに発足した文化装置公社も無事に運営されて来た。しかし、これはセキストラ自体の力による方が大であるから、

関係者の一層の努力を要望する。

新しい時代に入って、すべてが一変した。先ず目につくことは各国の首脳の一変である。すべて一新した社会状態であるから、旧時代の指導者では無理で、順次新人に交代するのも当然である。しかも、全く無名の新人の多いことに注目すべきである。わが国の佐山昭二の新鮮なる台頭も目覚しいものである。新時代突入以来の混乱をすべて処理し得たのは、彼に負う所大であると言わねばならぬ。

次に目につくのは、世界の平和の完成である。セキストラ以来小ぜりあいさえなく、完全な平和であった。有史以来のことである。抑圧した性的はけ口を外国に向け戦意昂揚とした昔のあやまちは、二度と犯す時は来ないであろう。

第三に問題となるのは、世界連邦の成立が近く行われることである。一年前までは理想に止まっていたことが現実になるのである。これもわが佐山の努力の結果ともいえる。その手腕をみとめられ各国に招聘され、経済的政治的の困難処理の指導をし、その後各首脳を説いて世界連邦の促進に努めそれを軌道に乗せた功績には、賛辞を惜しまない。

湯川博士以来わが国としては二人目のノーベル賞の平和賞との噂もあるが、むしろそれ以上のものである事は万人が認めている。

世界最初の戦争抛棄の憲法を持ったわが国として欣快にたえない。

その後の新聞記事

（ニューヨーク特電）本月末を以て国連を解散する旨、決議された。日本代表佐山氏を委員長として検討されて来た世界連邦に直ちに各機構は引き継がれる。

（ニューヨーク特電）世連はいよいよ発足した。初代元首には佐山日本代表が選出された。

（ニューヨーク特電）佐山元首の意向による世連首府を、南米の奥地に建設する案が世連議会に諮られた。交通不便の点から僅かな反対論もあったが、軍備不用の時代となったので、その余裕により技術的経済的の問題は近い将来解決されるとの説明をうけ、満場一致議決された。

南米観光案内書より

南米の奥地に、名も知れぬ山があり、晴れた日には定期航空路の機上より望見される。その頂きに、石で築かれた、パリの凱旋門に似た門が立っている。門だけがあって、何の意味か誰も知らない。インカの信仰の名残りであると思われている。インカの子孫たちは、いつの日か太陽神の子孫サヤ・マーショがこの門を通って帰って来て、輝かしい時代をもたらすものと信じている。

かつて誰も知らなかった記事

南米の奥地に、ある山がある。その頂きに、大きな門がある。インカの子孫のうち選ばれたごく一部の人たちは、この門の石の中に、金に糸目をつけず、世界中から集めた部品で作られた、ある種の精巧な電波送信機がそなえてあることを知っている。

空への門

彼は子供の時に、ロケット乗員になろうと思った。

だれもかれも、宇宙へ行ってみたがっていた。月や火星や小惑星。そんなに遠くまで行けなくても、地球をこの目で見るだけでよかった。だが、簡単には行けなかった。ロケット乗員になるには、すぐれた頭脳と運動神経の発達した体が必要だった。どちらか一つだけを持っている者はたくさんいたが、両方となると、少なかった。それでも数は少なかったがいることはいた。その者だけが訓練を受けて、ロケットに乗れるのだった。特権階級だった。しかし、財産だとか、情実の入り込む余地のない、本当の実力だけで築かれる地位なので、受ける嫉妬より尊敬の方が多かった。

小学生の頃は、どの子供も、いずれはロケットに乗れるものと思い込んでいる。男の子は全部、女の子も大部分。だが、世間を知るにつれ、この率は次第に減るものだ。

彼は中学一年の運動会で一等になった。そのとき自分はロケットに乗れると自信を持った。

それから放課後の校庭で、おそくまで鉄棒につかまっている姿はよく見かけられた。運動ばかりうまい級友にも負けまいと努力したのだった。家に帰ってからも勉強を懸命にやった。勉強ばかりやっている者よりよい成績をとろうとしたのだ。そのため、他のすべては犠牲にした。

なにしろロケットに乗らなくちゃあならないんだからな。なぜ乗らなくちゃあいけないのかは考えなかった。ただ、人より優れていることを実証したいだけのことかも知れない。だが、彼はそこまでは考えない。ロケット。ロケット。ロケット。宇宙の入口をめざした。

高校にはいってもそれは続いた。級友のなかには、ガールフレンドと遊びまわる者もいた。煙草を吸う者も、酒を飲む友人も多かった。だが、彼はそんなことには目もくれない。

ロケット乗員には害だからな。奴等はロケットに乗れそうにないんだからあんなことで紛らしているのさ。かわいそうに。

彼は同情した。彼のうちは中流家庭で、親はその息子のことを心配し始めた。小学生の頃はかえって喜んでいたのに、この頃は映画ひとつ見ようともしないことをいくらか気にした。だが、注意しても、「僕はひととは違うんですから」と答えていた。両親は頼もしがっていていいのかしらとも考え、見守る以外なかった。

大学には、ロケット乗員用の学科があった。他の学科の競争率の三倍位の受験者があっ

た。しかも、より抜きの志願者。それをけ落して入学するには、相当の成績をとらねばならない。勉強しすぎて体力が落ちてもならない。彼はついにこの至難のことをやりとげた。

もう目的の大半は達せられた。勿論勉強も運動もつづけていたが、まわりを見回す余裕も出来た。貴族になったような気分だった。他の学科の連中を見るとかわいそうに思え、あらためて自分の位置をみつめなおした。

ある時、街で、高校時代の友人に会った。その頃のガールフレンドと結婚して子供が生まれたとの事だった。

「君にもう子供があるとは思わなかったな」

「まあ、ちょっと早すぎた気もするがね」

「今、大学かい」

「いや、僕なんて大学にはいっても仕方ないさ。高校の終り頃に工夫して作った、はなしても三メートル以上の高さに上がらない風船があるんだけどね。伯父に見せたら、いっしょに物にしようといわれて、その会社で作っているんだ。今この部門の部長だよ。よく子供が原っぱでつかまって跳ねているのがそれさ」

話し合って別れてからも、彼は得意だった。むろん気の利いた発明とも思ったし、金まわりの良い事も悪くはないと考えた。だが、間もなく、宇宙に飛び出せる自分に比べたら、彼

と自分とは、三メートル以上あがらない風船とロケットくらいの違いに思えた。地上の楽しさは、やっぱり、程度が知れているんだ。

卒業式が近づいた。学内で優秀な卒業論文の発表会が催された。

各学部から選ばれたものの発表だった。会場の片隅で彼は聞いていた。すべての学科は自分たちロケット乗員のためにある。また自分たちが宇宙から持って帰る資料によってこそ、他の学科が進歩するんだ。彼は幸福の絶頂だった。

壇上では、最後の一人が喋り始めた。機械学科の学生だった。ふと、見覚えのある顔だと感じ、プログラムに目をやると、中学校の時の友人だった。なんだ、あいつか。あいつは体操が苦手だったな。そうそう、一年の運動会で僕が一等になった時、あいつはビリだったじゃないか。僕は今、宇宙に飛び出して行ける。あいつはそのロケットを作る方だ。思えばあの運動会がこれだけの距離を開いたんだ。運命だな。僕はその幸運の方でよかった。それにあれだけの努力をして来たんだから。

彼はうっとりとして、何が発表されているのか判らなかった。壇上の学生は

「結論を申し上げて終りとします」

と言った。よし、結論だけ聞いといてやろう。彼は壇上をみつめた。学生は淡々と話しつづけた。

「以上のような考案に基いて製作されるロケットは、もう今までのように特殊な能力を持った乗員でなくても、ごく一般の者にでも何等の危険も不便もなく、操作運転できるのであります」

ツキ計画

「さあ、おはいりになって下さい」

と所長にうながされた私は、期待にみちてドアを開いたとたん、目をみはった。暖かい部屋のなかの厚い絨氈の上に、金色の首輪をつけたすばらしい美人がうずくまっていたのだ。その美人は、ものうげに顔をあげて私をみつめ、私は彼女を抱きしめたいような気分になった。

広い宇宙ではどのような状態が人間を待ちかまえているか分らない。だから、人類が宇宙に進出してゆくためには、あらゆる方法を試みて人間の能力を高める研究がされなければならないのである。新聞記者の私は、その研究の一環をなすツキ計画の取材を許されて、この研究所を訪れたのだ。

「近よって観察してもいいでしょうか」

私はうずくまっている美人を指さし、つとめて記者らしい口調で聞いた。

「どうぞ、御自由に」
所長はしかつめらしい口調でうなずいた。
私は美人のそばにしゃがみこんだ。すると彼女は、柔かく悩ましげにからだをすりよせてきた。これは夢ではないのだろうか。そのくねくねした感触にたまらなくなった私は、所長の存在を忘れて、力をこめて美人を抱きしめた。だが、その時
「ニャア」
という彼女の声と共に、私は爪で顔をひっかかれた。
「気をつけて下さい」所長は落着いた声で私に注意し、「さあ、おとなしくするんだよ」とその美人の頭をなでた。彼女は再びおとなしく床にうずくまった。
「いま私がひっかかれたのは、いったいどういうわけなんです」
「この女性には、ネコツキになってもらっているのです」
「ネコツキですって」
「ええ、まだくわしく説明しませんでしたが、この研究所では、キツネツキからヒントを得た理論の実験をしているのです。いろいろな動物を人間につけ、それによって人間の能力を高めようというわけです。最近では人間につけられる動物の種類がしだいにふえてきましたよ」

「ははあ、それであの女性がニャアと叫んでひっかいたのですね。だが、ネコツキには何か利用面があるのですか」
「もちろんです。高い所から飛び下りる時にはネコツキにしておくに限ります。ロケットの着陸の時の衝撃には、ネコツキでないものにくらべて数倍も耐える力が強いわけです」
「なるほど」
だが、私はまだ、さっき美人がすりよってきた時の感触を忘れかねた。
「宇宙旅行ばかりでなく、家庭生活にも応用ができそうですね」
「いずれはそうなるでしょう。しかし、その時には、爪にかぶせる物がずいぶん売れるでしょうな」
私たちは次の部屋にうつった。一人の男が四つんばいになって近よってきたので、私は所長に聞いた。
「これはおとなしい動物がついているようですね」
「ええ、だが何がついていると思います」
「さあ」
私はメモを手に近よった。その時、男は私のメモを口にくわえ、噛みはじめた。
「ははあ、わかりました。ヒツジツキですな」

「そうです。ブタツキを作りたいのですが、これはどういうわけかまだ成功しません。そこで、その前の段階としてヒツジツキの実験をしているわけです」
「そのブタツキが成功すればどんな利点があるのですか」
「ほかの星に行って食料が欠乏した時、ブタツキにすれば、どんな物でもかまわず食べてくれます」
全く宇宙に進出するには苦労が多い。私は、宇宙基地でブタツキにされ野菜の屑や残飯を食わされる自分を想像して、胸が悪くなった。
「ほかにどんなのがあるのです」
とさいそくする私を、所長は次の部屋に案内した。そこではドアに何本かの太い鉄棒がはめられてあった。
「あまり近よらないで下さい」
格子の間からのぞこうとする私に所長は注意したが、なかにいる太った男は割合にやさしい目つきをしていた。
「おとなしそうではありませんか」
「ええ、いつもはおとなしいんですが、この間ひとりが踏みつぶされて大けがをしたので、それ以来注意しているのです」

「何がついているのです」
「基地建設のためには力仕事をしなければなりません。その時には、この男のように、ゾウツキにするのです」
その次に訪れた天井の高い部屋のなかでは、子供がさかんに飛びはねていた。
「ずいぶん高く飛べますね」
「これはウサギツキです」
「高く飛ばせるにはカエルツキにした方がいいのではありませんか」
「今の段階では、カエルのような爬虫類はまだ駄目です」
「ではヘビツキも無理なわけですね」
私は人間がまだヘビツキにされないと知って、少しホッとした。
「しかし、だいたい宇宙では、哺乳類だけで十分でしょう。それに、むりに爬虫類ツキにする研究より、崖をのぼる時にはリスツキとサルツキとどっちがいいかなど、その前に検討しなければならない問題がたくさん残っているのです」
「最も新しい研究にはどんなものがありますか。それを拝見したいものです」
「では、どうぞこちらへ」
私は次の部屋に案内された。

「これはナマケモノという動物をつけたのです。なかなかむずかしかったのですが、やっと成功しました」
　そのナマケモノツキは、部屋の隅でじっとしていた。
「ああじっとしていては役に立たないでしょうに」
「とんでもありません。長い宇宙旅行でイライラして喧嘩したりするのを防ぐにはこれに限ります。薬を使ってイライラを押えるのはどうも副作用があとに残って問題ですが、これなら大丈夫です。このナマケモノツキのおかげで、はじめて人間の長距離宇宙旅行の可能性が確立されたのです」
　所内を一巡し、所長室に戻った。
「いろいろと面白い研究を見せて頂いてありがとうございました。ところで、どうでしょう。ひとつ実際につけるところを見せてくれませんか」
「よろしい。では、何をつけましょう」
「では、いちばんシンプルな、キツネツキになるところが見たいものですな」
　所長はこれを聞いて、謹厳な顔をちょっと苦笑させながら答えた。
「ごもっともです。キツネツキは宇宙旅行のためには何の役にも立ちませんが、これらの理論の基礎になったものですからね。だが、最初のうちは、キツネツキの実験の時にはいろい

ろな失敗もありましたよ」
「危険なことでも」
「いや、ちっとも危険ではありません。では、適当な人があいにくおりませんので、私がキツネツキになってごらんにいれましょう」
「それはありがたいです。だが、もとにもどらなくなることはありませんか」
「大丈夫です。タイムスイッチで五分間たてばもとにもどるようにしておきますから」
　所長はこう言いながら、金属の首輪を、自分の首に巻いた。そして
「その机の上の装置のボタンを押して下さい。そうすると電波が首輪に送られ、私はすぐにキツネツキになります」
　と言った。私は机の上にある装置のボタンを押してみた。すると、かすかなうなりがおこり、同時に所長はたちまちキツネツキになって
「コンコン」
　と叫びはじめた。今まではむずかしい顔つきをして、もっともらしい説明をしてきた所長が、急に口をとがらせて高いなき声を出し、妙な手つきをはじめたところは、全く腹がよじれるようなおかしさだった。私は大声をあげて笑いころげ、せき込まんばかりだった。そのため、喉が渇いてきた。だが、部屋を見まわしてみたが、水道の蛇口はきていなかった。

しかし、その時、テーブルの下からでも出したのだろうか、所長がいつのまに用意したのか、何かを持っていた。よく見ると、ジョッキにつがれたビールだった。

なかなかサービスがいいな。私は所長が妙な手つきですすめるままに、ジョッキを手にし、なんだかおかしな臭いがしたようだが、その黄色く泡立つ液体を思い切り飲んだ。

開拓者たち

「さあ、これを食べなくちゃだめよ」

若い母親は、幼い子供の顔をのぞきこみ、やさしく言った。

「いやだい、こんなまずいもの」

子供はスプーンで口に入れてはみたものの、すぐに吐き出し、首を振って、顔を窓のほうにそらした。厚いプラスチックの窓の外には尖った山がそびえ、その上に二つの月が並んで輝いていた。麓のほうには茶碗を伏せた形の、ここと同じドームが、窓から光をもらしながら、いくつもちらばっていた。

「地球ならばなんでも手に入るのにねえ」

母親は悲しそうな声で夫に話しかけた。彼等は遠い遠いこの惑星の開拓民だった。彼等や仲間の、何代か前の祖父母たちは、小さなドームと、宇宙服と、食料製造機とをロケットにつみ、長い空間の旅を重ねて、この星にたどりついたのだ。食料製造機は小さな音をたてな

がら岩石を砕き、地下水をくみ、ここの大気とくみ合わせて、食料を作り出してくれる。

彼女は立ち上がり、片隅の製造機に近よったが、夫はそれをとめた。

「だめだよ、そう甘やかしては」そして、子供にむかい、威厳を示して言った。「いいかい、まずくても我慢して食べるんだよ。お前のからだのためなんだから」

子供はさからうことができず、いやいやながら、スプーンを口に運んだ。ずっと製造機で作られる食べ物の味になれてきた子供にとって、時々おしつけられる、この食べつけない物は苦手だった。

「さあ、よく嚙むんだ」

だが、子供は、この言葉には従わなかった。口に入れて二、三回嚙むと、そばのコップの水といっしょに飲みこんでしまう。父親はそれ以上強くは言えなかったが、二人は一応、ほっとして顔を見合わせた。子供はすばやく食事を終え

「ごちそうさま」

と叫ぶと、三面テレビのある子供部屋にもどっていった。このテレビでほかのドームの子供たちと話し、遊ぶのだ。子供のいなくなったテーブルで、夫婦は二人だけの話をはじめた。

「なにかいい方法はないのかしら」

「ああ、ないんだよ。困ったことだな」

夫は腕を組んだ。二人の悩みは、この惑星の上のどの開拓者にも共通の悩みだった。それは、この星に特有の病気、急激な痙攣と共にたちまち死んでしまう病気だった。もちろん調査はなされた。放射能は問題にするほどはなかったし、ドームの大気も、地球と全く同じにされていた。また患者からは何の病原菌も発見されなかった。

「もういやよ。地球へ行きたいわ」

「そんな無理を言ってもだめだよ。地球に行くには長い長い時間がかかる。それに僕たち、いや、この星にいるだれでも、ここをドームなしで暮らせる住み良い世界にするつもりでいるんだ。ここまでやりかけて地球へは戻れはしないよ」

夫は腕を組んだまま、目をもう一方の窓にやった。月の光が、できかけの大きな貯水池を照らしていた。まもなく厚い岩盤をうがって、地下の大きな水脈から水がくみ上げられるだろう。そして、満たされた水は、その上でいくつもの月影をにぎやかに踊らせるだろう。

だが、それはほんの手はじめで、やることは限りなくある。大気の成分を変え、呼吸できる空気にし、暑すぎる昼の日光を和らげるのは、気の遠くなるような仕事だし、工作機械を作り、それで土木機械を作り、それを操作しつづける毎日も、決して楽なことではない。しかし、新しい世界が少しずつでも作られて行くのを眺める楽しみは大きかった。

「私だけなら覚悟はできてるわ。だけど、子供のことを考えると……」

「うん。それを考えるとね」
それはどの開拓民にとっても同じだった。作りあげた世界で自分たちの子孫がふえ、楽しく暮らしてくれることを考えてこそ働き甲斐があるのに、その子供たちが、例の病気にいつ襲われるかわからないのは悲しかった。
「やっぱり、原因は」
「それはもう確定的だね」
開拓民たちは、この病気の原因をいろいろと探した。結論として、原因は食物以外に考えられなかった。機械によって合成される食物、それは成分の上では天然の物と同じはずではあったが、おそらくそのなかには、天然の食物にある何かが欠けているのだろう。それが何であるかは、まだわからなかったが、その欠乏が痙攣と死とをもたらすにちがいなかった。
「地球から何か送ってくれればいいのにね」
「ひと握りの種だっていいんだ。みんな、どんなにていねいに育てることだろう」
二人は、あきらめたような声で言った。祖先が地球から運んできた種子は、当時の種まきの失敗ですべて駄目にしてしまったのだ。そしてその後数百年、地球からは一台のロケットも来なかった。地球が何かの原因でロケットを出すどころではなくなったのだろうか。もっといい星をみつけてみなそっちに熱中しているのだろうか。それとも、ロケットは出ている

が空間の状態が変わって方向がそれているのだろうか。
地球向けの通信用ロケットも数多く送り出された。だが、それも地球へは届いていないのかも知れなかった。だいぶ前に、地球へ抗議に行ってくる、と出かけた者もあった。長い炎を残して虚空にとけ込んでいったそのロケットをみなは期待のうちに見送ったが、あれから百年もたつのに、二度ともどってこなかった。
地球なんかあてにするな。我々にとってはここが地球なんだ。移住者たちの子孫はこう言いあい、ここを住み良くすることに夢中になった。例の病気が問題になるまでは。
「この肉をしまっておけよ」
「あなたは召し上がらないの」
「僕はいい。それよりおまえ食べろよ」
「私もいいわ。坊やのために取っておきましょう」
二人は話しあった。地球におけるダイヤモンドよりはるかに貴重な天然の肉だった。もちろん、この星の唯一の生物、人間のそれ。寿命で、あるいは事故で、または例の病気で倒れた者の肉は、どの家庭にも公平に分けられていた。そして、これが行われてから、例の病気の死亡率はずっと減った。当然、はじめは反対もあったが、あとに残る者のために死者が役立つのだし、習慣となればそれを別に気にする者はなくなっていた。なれていない味のもの

を時々おしつけられる子供たちを除いて。
「じゃあ、しまっておくわよ」
妻は肉をプラスチックの箱に入れた。バクテリアのないこの星では腐る心配はなかった。
「とっておく値打ちがあるかどうかわからないけれどね」
「八十二号のドームのお子さんもきのうなくなったのよ。本当にいやねえ」
一時はおさまった例の病気が再びふえはじめたのだ。合成食料ばかり食べている人体では、何代もたつと、その生命の素ともいえる物質がしだいに稀薄になって行き、もう、その肉を食べても効果がなくなったのにちがいなかった。
しかし、効果がなさそうだから、といっても、配給になった肉を捨ててしまう気にはなれない。食べないよりはいいだろう。どの開拓民もこう信じることを救いとし、親たちは自分は我慢してもその子供たちに食べさせるのだった。
「研究はどのていど進んでいるのかしら」
「ああ、研究所では一応その物質の見当はついたらしいんだ。だが、それが作り出されて使えるようになるまでは、あとしばらくかかるらしいね」
不屈の開拓者たちは、長い間かかって、この解決のため不休の努力をつづけていた。
「そのしばらくが問題なのよ。間にあってくれればいいわねえ。それまでに、あなたや、私

や、坊やが、あの病気にかかったら……。考えただけでも恐ろしいわ。私の片足を切ってすむのならそうするんだけど」
夫はそう言う妻を抱きしめながら言った。
「それですむのなら僕だってするさ。だが、この星の誰が犠牲になっても、今では役に立たないだろうね。その完成まで無事を祈りながら待つ以外にないんだよ」
「私はいつも祈っているのよ。あしたこそ生物をいっぱいつんだロケットがこの星に降りてくるようにって。どんな生物でもいいから……」
「きっと、どの家でも、そう祈ってるよ。薬の完成をまぢかにして家族に死なれたら、どんなに悲しんでも悲しみきれないものね」
二人はいら立たしい気持ちを抱いて、よりそいながら、ぼんやりと窓の外に目をやった。
二つの月はさっきより離れ、山の影を交錯させていた。
「あっ、流れ星だ」
「あれが地球からのロケットだったらねえ」
二人はそれを目で追った。暗い空に小さく光る物体は、空のまんなかでカーブを切った。
「ロケットだわ。早くみんなに知らせてよ」
「よし、そうしよう」

夫は本部のドームに通じる電話機に向って叫んだ。
「ロケットです。いま上を飛んでいます」
「よし、わかった。すぐに呼びかけてみます。応答の模様はラジオで聞いて下さい」
たちまちのうちにこのことは、どのドームにも知れわたった。
ロケットだ。
なかには、いてもたってもいられなくて、気密車を動かして本部のドームにかけつける者もあった。
そのさわぎはラジオにもはいった。
二人は息をつめてラジオに聞きいった。ロケットとの応答がはじまった。
「ロケット、聞えますか」
「こちらはロケット。この星には人類がいるんですね。助かった」
乗員の声もうわずっていた。
「何百年も前の移住者の子孫です。知らなかったんですか」
「事故で方角が測れなくなり、どこに流れつくかわからなかったんです。ああ、よかった」
「ロケットに何か食料はありますか」
「合成食なら、まだいくらもありますよ」

聞いている人々のがっかりしたため息のなかを、乗員の声はつづいた。
「地球からつんできた天然食料は、我々七人が今までに食べてしまったんです」
「地球から天然食料を食べてきた七人だって」
みなの喜びのどよめきのため、地上からの通信は、ロケットの中の人々には聞きとれなかった。
「我々が地球から来たので喜んでいるぜ」
「よほどなつかしいんだな」
「女性が多すぎるんじゃないだろうか」
「そうかもしれない」
ロケット内も感激と期待でわき立った。
二人は、ラジオに聞き入りながら、輝く顔をみつめあった。
「七人だって」
「もう大丈夫ね。薬の完成までは。私たちも坊やも助かるわね」
妻はあふれる涙をそっと拭いながら言葉をついだ。
「どこの家でも、お母さんたちが、どんなに喜んでいることかしら」
「父親だって同じことさ。もう大丈夫。この新しい世界に我々の子孫が限りなく栄えて行く

んだ」
　ラジオは興奮した声を伝えていた。
「すぐ着陸する。降りてから、我々にできることなら、何でもしますよ」と乗員たちの声。
「注意して！　ロケットが爆発したりしないように」と地上からの声。
　ロケットは火炎を地面に叩きつけながら、二つのどよめきの距離を少しずつちぢめた。

宇宙通信

——宇宙の霊長たち・第一話——

　高い山の上に建設された直径一キロに及ぶ巨大なパラボラアンテナは、宇宙の彼方に向けて、絶えまなく電波を送りつづけた。
「もう五十年も電波を出しっぱなしだが、いっこうに手ごたえがないな」
「まあ、そう早まるな。五十年なんて宇宙の長さにくらべればほんの一瞬だ。女の子に一回だけウインクをして相手が反応を示さないからといって、やけをおこすようなことをしてはいかん。気ながに続けよう」
　また、五十年つづけられた。
「きたぞ。これを見ろ」
　ついに、反応はあった。宇宙のどこかにいるにちがいない知的生物との交信を求めて、電波を送りつづけてきた人類のねがいは果された。文明を結びつける電波の糸が、二つの星を

結びつけたのだ。
「だが、こちらの電波を同じように打ちかえしてくるだけでは、どの程度の文明があるのかわからない。疑えば、電離層のようなものがどこかにあって、反射しているだけかもしれない」
「では、ひとつ電文を送ろう」
そこで
《文明のある星の存在を知ってこんなうれしいことはない》
という文句が送られた。もちろん、相手に判読してもらえるとは期待しないが、心をこめた電波は、宇宙のかなたに祈りを運び去った。
長い年月ののち、その返事がきた。
「なんともわけのわからない電文だな」
「しかし、これはむこうの言葉にちがいない。おそらく、同じように文明の存在を喜んでいる意味だろう。いずれにしろこれは独得の文明であることにまちがいない」
これに勢いづいた科学者たちは、まず手はじめに、数字を打ちはじめた。
一、二、三、……九、十。
これがくり返し送られた。地球では十進法が行われていることを知らせたつもりだった。

すると、また長い年月ののち返事がきた。
一、二。一、一、二。
「なるほど、相手の連中は二進法を使っているらしい。指が二本なのかもしれないぞ」
「だが、こんなに時間をかけて、やっと十進法と二進法のちがいが判ったぐらいでは全くやりきれない」
「そうだ。ひとつ思い切ってロケットを送ろうではないか。人間の乗れるロケットは厖大な設備がかかるが、小さな印刷物を送るロケットなら出来るだろう。それでモールス符号の意味を伝えれば、あとは簡単だ」
「よし、そうしよう」
写真と絵とモールス符号がギッシリ書きこまれた小冊子は、エジプト文字の解読の手がかりとなったロゼッタ石の役目をになって、銀色に輝きながら出発した。相手からの電波に先を向けて自動的に方角を修正しながら進むからまちがいなく届く。
「きっと、われわれの善意が通じるにちがいない」
「そして、お互いに文明を高めあおう」
地球からの電波はそれにともなって
《おくりものを送った。いずれ訪問できる時をたのしみに》

と、電文を打ちつづけた。
　小冊子をつんだ小さなロケットは、無事に広漠たる空間をわたり、相手の星にとどいた。その住民たちはそれを拾った。
「何かを送ってきたようだ」
「むこうの文明を示すものが入っているにちがいない」
「早くあけてみろ」
　住民たちは期待にみちてロケットをあけた。だが、見まもる連中の顔いろは、さっと恐怖に変わった。
「あっ」
「みろ、これを」
「うん、全く残酷きわまる連中だ」
「こんな奴等がのさばりはじめたら、宇宙の隅々までひどい目にあう。早いところ手を打とう」
「そうだ。これは我々への挑戦にちがいない」
　たちどころに、地球へ向けての電波が出された。

《おくりものは拝見した。お礼はまもなく送る》
　そして、星じゅうの放射性物質が集められ、超大型の爆弾がつみ込まれた。
「これが当ればこっぱみじんだ」
「うまく行けばいいが」
　この宇宙ミサイルは、地球から出つづけている
《おくりものの意味おわかりか》
という電波に向ってまっしぐらに進んだ。
　住民たちは長いあいだ緊張しながら待った。そして、遂に地球からの電波は途絶えた。
「バンザイ。うまく命中だ」
「これで安心して生活ができる」
「全くだ。だが、からだを粉々に砕いて薄くひきのばすなんて、ひどい風習のある星だな」
　と、ホッとして話し合い、地球から送られてきたパルプで作られた紙をこわごわ見つめながら、松の木から進化した植物人間たちは、緑色の顔をみつめあって溜息をついた。

探検隊

——宇宙の霊長たち・第二話——

どこからともなく突然あらわれたその宇宙船は、とてつもなく大きかった。うららかな春の日、長さは三キロもあると思われる宇宙船は山岳地帯の谷間に巧みに着陸し、そのなかから宇宙人が何人か現われてきた。そして、その宇宙人たちもまた大きかった。背の高さは五十メートルにもなるだろうか。彼等はのそのそと歩きまわりはじめ、時々、森林の木をひき抜いて、目の高さまでもちあげたりした。

もちろん、はじめのうちは、人びとは大さわぎをした。

「とんでもない奴等がやってきたものだ」

「どんなことが起るのだろうか」

だが、人びとの心配はそれ以上に高まりはしなかった。その大男たちはべつに人間に害を与えようとする様子を示さなかったのだ。時には人間を抱きあげて、木をひき抜いた時と同

じように顔近くまでもちあげることはあっても、それ以上はどうすることもなく、再び地上におろすだけだ。

もっとも、はじめの頃は、恐怖にかられて、銃を射ったものもあった。だが、弾丸ははねかえり、大男たちは何も感じないようだった。おそらく大砲を使っても同じことだろう。また、原爆を使えば退治することはできるだろうが、そんなことをしたら、土地と大気が汚染して後始末がたいへんだ。結局、たいした被害はないのだから、そんなことまでする必要はなさそうだった。

一方、大型スピーカーで話しかけようとした者もあった。だが、それも無駄だった。全く言葉が通じないのだ。最初のうちは音で振りむいた大男たちも、しばらくすると、ふりむきもしなくなった。

さわぎが一段落し、なれるに従って、お互いに犯しあわない生活がはじまった。

大きな宇宙人たちは、宇宙船でつれてきた大きな動物にまたがり、時々遠くまででかけていった。

「さすがは宇宙人だ。あのゴジラをうまく乗りこなすじゃないか」

「どうもうな顔つきをしているが、よく馴らされている」

村人たちがゴジラとあだ名をつけたその巨獣は、象の十倍もあった。だが、それもあまり

暴れることもなく、大男の与える餌を食べ、その命令に従って動いているようだった。

人びとは、時々、思い出したように宇宙人のことを噂しあった。

「奴等はいったい何をしに来たんだろう」

「この様子では地球を征服にきたとも思えない。おそらく単なる探検か調査のためにやってきたのだろう」

「そういえば、あの大男たちの動き方も、なんとなく紳士的だな」

そして、その探検が一応すんだのか、秋になると、彼等はその大きな宇宙船にのりこみ、空のかなたに去っていった。

「とうとう帰っていったな」

「また戻ってくるだろうか」

「おそらくそうだろう。あれをみろ」

宇宙船の去ったあとには、鋼鉄の太い杭が地中深く打ちこまれ、それにゴジラたちがつながれていたのだ。

「どうもあのゴジラは気にくわん」

「しかし、ああつながれていれば、なんということもないだろう」

たしかに巨獣たちはしっかりとつながれてあった。

冬になり、山々に雪がつもりはじめる頃、巨獣たちのうなり声は大きくなった。

「何かいやなことの起りそうな予感がする」

ついにその予感は事実となった。もがいたあげく、太い鎖をかみ切った二頭のゴジラが、村にあばれ込んだのだ。何人かの人びとが、巨獣の、世にもおそろしい牙で餌食にされた。

「逃げろ、逃げろ」

逃げる以外に方法はなかった。普通の武器では歯がたたず、さればといって原水爆では巨獣の被害どころのさわぎではない。

冬の寒さのなかで、村人たちは祈りながら、オロオロと逃げまわった。しかし、不運な何人かは次々と餌食となっていった。

「もういかん、この土地を離れよう」

「残念ながらほかに手の打ちようがない」

春になり、人々が荷物をまとめてこの計画を実行にうつそうとした時、白い雲のかなたから、再びあの大型の宇宙船がやってきた。そして、そこからゾロゾロとでてきた大男たちは、彼等にしては早い足どりで巨獣に近づいた。

「大男たちが帰ってきてこの暴れたあとをみれば、きっとあのムチャクチャなゴジラどもをこらしめてくれるにちがいない」

だが、村人たちの期待はみごとに裏切られた。宇宙人たちは二頭のゴジラをかわるがわる抱きあげ、ゴジラのほうも、あの恐ろしい牙をひっこめ、頬をすりよせたのだ。

だれかが、ポツリとつぶやいた。

「あのゴジラどもは、タローとジローという名にちがいない」

最高の作戦

——宇宙の霊長たち・第三話——

一団となって目をつけた星に侵入し、占領し、すべてを搾取して去り、再び別の新しい星をめざすという、放浪性と、好戦的性質と、しかし優秀さをも兼ねそなえた宇宙生物があった。もちろん、戦闘では戦死者もでたが、彼等は分裂によって繁殖できるので、まもなくもとの人数にもどることができた。

「もう、この星から巻きあげるものはなくなった。別の星に行こう」

「よし。でかけるか。だが、今まで渡りあるいた星の連中は、どれもこれも他愛のない相手ばかりだったな」

「われわれにかなうものは宇宙にはないだろう。だが、こう手ごたえのないのもつまらないな。一回ぐらい負けてみたいものだ」

「ぜいたくなことを言うな。さあ出発だ」

宇宙船の一団は群をなして飛び立った。
次の目的地にされた星の住民は大恐慌だった。
「みろ。あの宇宙船の大群を。伝説に残る悪名高き連中だ」
「とても抵抗しても無駄だ。前には抵抗して全滅に近い打撃をうけた。それから分裂増殖をくり返しながら、やっとこれだけの人口に戻れたのだ。何年かかったと思う」
その長い年月はとても数え切れるものではなかった。
「どうしたものだろう」
「戦っても無駄だ。だが、奴等にも弱点はあるだろう。まず、うまい言葉で、ごきげんをとるのだ。そして、できるだけあばれないようにするのだ。そのうちに何かいい知恵もでるだろう」
「そうだ。よほど慎重にやらぬとだめだ。こっちの一人がむこうの一人にそれぞれつきっきりにならなくては」
「そら、着陸をはじめたぞ。用意はいいか。くれぐれも言葉づかいに気をつけろ。決して荒い言葉を使うなよ」
渡り鳥の大群のように舞いおりた宇宙船のなかからは、殺気だった連中がなだれ出てきた。

「どうだ。手向うか。われわれの腕前を見せてやるぞ」
だが、それへの応答は意外だった。
「あら、手向うなんて、とんでもありませんわ。よくいらっしゃいました」
「われわれがどんな種族か知ってるか」
「星々を渡り歩いていらっしゃるのでしょう。よく存じておりますわ。お疲れでしょう。まあ、この星ではごゆっくり休んでいらっしゃい」
侵略者たちは少し拍子抜けがした。だが、長い旅で疲れていることはたしかだったし、こうおとなしく出られるのも悪い気持ちでもなかった。
「では、休むとするか」
「そうなさいよ。私たちが一人一人つきっきりでおもてなしをしますから」
抵抗者たちによって、侵略者は全くバラバラにされた。抵抗者たちはひそかに連絡をとりあった。
「どう、そちらの奴の様子は」
「今のところおとなしくしているわ」
「もう少し様子を見てみましょうよ」
侵略者たちはそれぞれ威張りちらし、抵抗者たちはそれぞれ冷静に観察した。

「そろそろ油断したようよ。殺してしまいましょうか」
「だけど、よく調べてみると、案外気のいいところもあるようよ。私のところで少しおだててみたら熱心に働きだしたわ」
「あら、そう。こっちでも試してみるわ」
情報はすべての抵抗者たちに行きわたった。
「ほんとよ。うまいことを言うと、なかなかよく働くわね」
「これなら殺すのはもったいないわ。こき使ったほうがこの星のためよ」
「そうしましょう。逃げないようにあの宇宙船をこわせないかしら」
「ずいぶん思わざる結果になったものね」
抵抗者たちは必死になって努力をつづけた。その甲斐があって、ほったらかしの宇宙船は、いつしか錆び、朽ち果てた。
「もう大丈夫よ。逃げられないわ」
「だけど、時々、なにか不公平らしいと気がつくらしいのよ。そこでいい方法を考えたの」
「どんなこと」
「子供を作ることをひきうけてあげたのよ。それでごきげんが直ったわ」
「それぐらいでごまかせるんなら甘いじゃないの。みんなに知らせなくては」

情報は伝えられ、不満そうな気分による不穏な動きはおさまっていった。

そして、長い長い年月がたった。
侵略者たちは思い出したようにつぶやく。
「俺が支配者なんだ。奴等は俺の命令ならなんでも従うべきだ」
だが、抵抗者たちは、依然としてひそかに連絡を保ち、泉のほとり、井戸のそば、そのほか至るところで、長々と情報を交換しあう。
「言いたいように言わせておくのよ。威張らせておけば、いい気になって働くから。だけど、あの放浪性だけはなかなか抜けないわね」

桃源郷

——宇宙の霊長たち・第四話——

「みなさま。いよいよ人類の待ちに待った番組です。宇宙の彼方にむかって飛び立っていったテレビロケットが、いよいよパル遊星に近づきはじめました。では、これから広い宇宙空間を越えてきたその電波によって、パル遊星への接近から着陸までの模様をごらんいただくことにいたしましょう」

アナウンサーの声がカラーテレビのネットワークに乗って、あらゆる家庭に流れた。

「まもなく映像の調整が終りますが、それまでのあいだ、スタジオにおいでいただきました天体研究所の野田教授に、お話をお願いいたしましょう」

それに応じて、銀色に輝くテレビロケットの模型を手にした教授があらわれ、アナウンサーは教授に話しかけた。

「まもなく私たちはパル遊星の様子を見ることができるわけですが、テレビロケットの性能

は、実にすばらしいものですね」

「テレビロケットについては、だいぶ前の発射の際にもお話ししたと思いますが、それはこのように精巧なカラーテレビのカメラをつみ込んだ小型の無人ロケットなのです。人間の乗れるロケットですと、装備が厖大なものになりますが、テレビロケットなら、これだけですみ、このカメラによってその星の有様を私たちはくまなく見ることができます。そして、人間が訪れるに値する星と見きわめがついてから、次に、人間の乗ったロケットが出発することになるのです。テレビロケットは、宇宙へ進出した私たちの眼ということができましょう」

教授は、模型のところどころを指さしながら簡単に説明を終え、アナウンサーは軽く頭をさげた。

「やっと映像の調整がすみました。では、早速ごらんいただきましょう」

画面は直ちに切りかえられた。

静寂にみちてひろがる宇宙空間。その中央にうす青く輝くパル遊星が浮かび、それが少しずつ大きくなっている。

「ずいぶん近づきましたね」

アナウンサーは感嘆した声で言った。

「どんな光景が見られるか楽しみです」

教授の声も興奮気味だった。アナウンサーは聴視者に代って教授に問いかけた。
「ところで、テレビロケットが多くの星のうちで、なぜパル遊星をめざして発射されたか、またなぜ多くの人々に期待されているかについて、ちょっとお話し願えませんか」
「このパル遊星は、その位置からいって、地球とほぼ同じ状態にあるのではないかとされています。つまり、温度、酸素、水などが地球とあまり変わらず、人類が行ってもそう不自由なしに生活できるのではないかと考えられているのです」
「それでは、将来の地球の植民地として、非常に有望なわけですね」
「ええ。あるいは地球よりさらにすばらしいかもしれません。植民地という言葉は、食いつめた者が行って労働をするという感じを与えますが、そのように期待以上ならば、むしろ選ばれた人々が出かける保養地とでも呼んだほうがいいかもしれません」
「宇宙の桃源郷というわけですね」
「ええ。そうわかれば、人間の乗ったロケットがただちに出発することになりましょう」
「そうなることを期待しましょう」
テレビロケットはさらに接近し、パル遊星は画面一杯にひろがってきた。
「あの白いのは雲でしょうか」
「そうです。ごらんなさい、雲の下には青い海が見えています。水も豊富なのです」

テレビロケットは雲をつきぬけて大地をめざし、画面でも、海に立つ白い波がしらがかすかにみとめられるようになった。
「海岸に着陸しそうですね」
「ええ。だが、ロケットには移動装置がついていて、自動的に動いてくれますから、陸のほうの光景もいずれ見ることができましょう」
パル遊星の大地は、ぐんぐん画面に迫ってきた。そして、画面は消えた。
「あっ。消えましたが」
「いや、心配はいりません。着陸の際に緩衝装置が働くので、一時的に電源が切れるようになっているのです。まもなくもとにもどり、いよいよ地上の模様を見ることができます」
教授の説明のように、しばらくすると途切れていた電波がはいってきた。しかし、画面はなにかに覆われてでもいるように、まっ白だった。
「どうしたのでしょう」
「こんなはずはないのですが」
と教授も少しうろたえた声になった。
「着陸の衝撃でなにか故障でも……」
「いや、その点は念入りに作られていますから、故障ということは考えられません」

「では、こちらの受信状態が悪いのかもしれませんね。ちょっと問いあわせてみましょう」
アナウンサーに言われるまでもなく、受信回路のすべては至急に調べられていた。そして、その報告はスタジオにもたらされた。
「こちらの受信はきわめて良好だそうです」
「こんなことがおこるとは考えられませんでした」
「ほかの計器は働いているようですね」
「ええ。いま白い画面の右肩にでている数字をごらん下さい。酸素は地球より少し多いめにあり、気温は約二十度。ちょうどよい温度です」
「人間が行っても十分に暮らせますね」
「それは大丈夫でしょう。だが、地上のようすが見えないのは残念です」
画面の空白なまま、アナウンサーと教授の対話がつづいた。
「そうですね。せっかくパル星までテレビロケットがとどいたのに……」
「次のを送るといっても、また長い年月がかかるので、まことに残念です」
だが、どうにも仕方がなかった。
「仕方がありません。この放送は一応ここで……」
と、番組が中断されようとした時。

一瞬、画面の白いものが拭われたように消え、パル遊星の光景がうつし出された。
「あっ、私たちの祈りが通じたのでしょうか。故障がなおったようです」
「よかったですね。だが、パル遊星の地上がこんな光景とは、思いもよりませんでした」
教授の説明をまつまでもなく、画面にあらわれたのは、想像を絶した眺めだった。限りなくつづく荒廃しきった土地。そのところどころには、枯れた植物らしいものが、もの淋しげに立っている。
「あの音は？」
突然、狂ったようにガーガーいう音がはいってきた。
「ガイガー管の音がこんなにはげしいとも思いませんでした。放射能がよほどはげしいようです」
「では、とても人間は住めませんね」
「人間どころか、地球のどんな生物も、これではとても……」
この時、画面になにか動くものが入ってきた。
「あっ、生物がいるようですが」
それは瓦礫ばかりの画面の左からあらわれてきた。
「人間に似ているではありませんか」

「どうもそんな格好ですね。こんなひどい放射能のなかでよく生きていると思います。しかし、何か苦しそうな様子です」
その人間に似た生物は、歩くというよりむしろよろめくといった形で動き、時々倒れながら画面に近づいてきた。
「なんというひどい顔でしょう。ケロイドではありませんか」
「そう思えますね。これでみるとパル星では、少し前に原水爆戦があったと考えるのがあたっているのではないでしょうか」
その生物は、皮膚からウミを流し、苦しそうに血を吐いた。
「これはひどい。あるいは治療法のない細菌兵器や毒ガスも使われたかもしれません。とても人間が訪れる星ではありません」
「桃源郷どころではなかったですね」
「われわれは近よらないほうがいいでしょう」
「あっ、あれは熔岩でしょうか」
崩れるように画面から消えた生物のあとを追って、熔岩に似た真赤なものが流れてきた。温度を示す数字は画面の右肩で、跳ねるように高まった。
「そうです。強力な水爆によって地殻に変動がおこったのかもしれません」

「テレビロケットもやられてしまいますね」
「ええ。しかし、パル遊星が人類には向かない星であると、はっきりわかったのですから、テレビロケットの使命は立派に果されたわけです。私たちはこのことに落胆することなく、ほかの星に次々とテレビロケットを送り、希望を捨てずに努力いたしましょう」
熔岩は画面におそいかかり、ガイガー管はひときわ激しく鳴り、そして、ついにテレビロケットからの受信はすべてとだえた。

「おつかれさま」
パル遊星の住民たちは彼等の言葉で、このような意味のことを言いあった。
「君のあのよろめき方はすごい熱演だったぜ」
「ありがとう。だが、途中で笑いを押えるのが苦しくてね」
彼はこう答えながら、ケロイドのようなマスクを外した。
「熔岩はうまく写ったかな」
「実に真に迫って、こっちまでセットのなかのことと思えないくらいだった」
「いったい、こんどのは、どこの星からきたのだろう」
「そんなこと知るものか。だが、これを送り出した星の連中も、もうこれでわれわれの星に

近よろうとは考えないだろうよ」
一人はこう言いながら、今ぶっこわしたばかりのテレビロケットをけとばし、それから、ガイガー管に音を出させたウラニュームを容器に注意深くしまった。
そして、カメラを包むのに使った白い布からコマゴマしたセットまで、すべてを片づけ終ったパル遊星の美しい住民たちは、花の匂いに満ち、そよ風のやさしく吹く野原に散っていった。今まで長い時間をひっそりと平和のうちにすごし、これからもずっと平和の続いてゆくパル遊星の野に。

親善キッス

「やれやれ、やっとついた。全く長い旅だったな」
地球からの親善使節団の一行の乗りくんだロケットは、広大な空間の旅を終えて、銀色にきらめきながら、チル遊星の首都ちかくの空港に降りたった。
「いいか、ジェットが冷えしだい扉をあける。翻訳機の点検をもう一度やっておけ。おくりものの箱はこわれなかったろうな。おい、髭はそったか。服にブラシをかけ、身だしなみをキチンとしておけ。われわれは地球の代表なんだ。恥をかかないように気をつけるんだぞ」
団長はソワソワしながら注意をあたえた。言われるまでもなく団員たちは鏡に向って櫛やブラシを動かしていた。身づくろいを素早く終えた要領のいい一人の団員は、双眼鏡を手にして舷窓から外を眺めていたが、双眼鏡を目から離して、団長に話しかけた。
「なるほど、町も人びとも、地球とほとんど同じですね。もっとも、男も女もショートスカートというところが珍しいが、これだってスコットランドにはそんな習慣もある。しかし、

団長、やはり文明は地球のほうが少しだけ進んでいるようですね」

「それはそうさ。だからわれわれのほうから出かけてきたのだ。このチル星ではまだ地球までこられるロケットが作れない。まあ地球のほうが少しだけ先進国と言えるだろう」

「ところで、団長。いま思いついたことがあるのですが」

「なんだ、言ってみろ」

「今まで地球とチル星とでとりかわした通信のなかで、キッスのことに触れてあったでしょうか」

「さあ、どうかな。そんなことまでは通信しあわなかったと思うが。それが、どうしたんだ」

「そこでですよ。地球ではこのようなあいさつのやり方が行われているんだ、ということを、団長が適当な機会に示して下さい。そうすれば、たくさんの女の子と、われわれは自由にキッスができるというわけです。これだけの旅をしてきたんだから、それぐらいはいいでしょう」

「まあ考えておく。だが、これだけ似た文明だから、チル星にだって、案外地球以上にキッスが行われているかも知れないぞ」

やっとジェットが冷え、軽いモーターの音をたてながら扉が開きはじめ、住民たちの歓声がロケットの内部に流れこんできた。団長は重々しい身ぶりで、群衆の上に姿をあらわし

た。そして、せきばらいをひとつし、翻訳機を通じて第一声をはなった。

「みなさん、私たちは、地球からはるばるやってまいりました。すでにみなさまとは空間を越えて、電波による通信を前々から行ってきました。そして、お互いの文化が多くの共通点を持つこと、お互いに平和を愛する者であることを知りました。この上はその理解と友好とをさらに深め、そして高めあおうという地球人の願いを負って、私たち使節団が苦しい旅をつづけてやってきたのであります。私たちは、みなさんにお目にかかれてまことにうれしい。また、みなさんも、私たちの訪問を喜んで下さることと信じます」

団長のあいさつが終ると、空港をうめつくしたチル星の住民たちは、いっせいに手を振り、足をふみならし、口々に叫び声をあげた。もちろん翻訳機には、そのいっぺんに押しよせてくる、嵐のようなブーブーという音を訳しきる能力はなかったが、その叫びの底にある暖かい歓迎の気持ちは、どの団員の胸にもしみわたった。

団員たちは、お互いに肩をたたきあった。

「おい、きてよかったな。みろ、あの喜びようを」

「ああ、今までの長かった宇宙旅行の疲れがいっぺんに消えてゆくようだ」

「なんだ、涙なんか流しやがって」

感激の空気はロケットの内外に立ちこめた。歓声が少し静まると、こんどは空港に作られ

た台の上に立ったチル星の元首が、拡声機で、ロケットに向って歓迎のことばをのべた。団長のそばの翻訳機はそれを訳して機内に流した。

「地球のかたがた、よくおいで下さった。今後はお互いに兄弟の星として交際を深めましょう。だが、形式的なあいさつはこれぐらいにしましょう。まず、これをお受けとり下さい。それから、歓迎会場へのパレードにうつりましょう」

再び湧きあがる歓声のなかで、ロケットから地上へおろされた階段を、美しい女性があがってきた。

「チル星にもすごい美人がいるじゃないか」

「おそらくミス・チル星といったところだろう」

階段をあがりきったその女性は、団長のそばに立ち、抱えてきたものを差し出した。それはダイヤをちりばめた大きな鍵だった。

「文明が同じところでは、同じような習慣ができるとみえる」

「ああ、これなら親善もうまくゆくだろう」

団員たちはささやきあい、団長は嵐の海岸に立っているような烈しい拍手のうちに、チル星の友情を示す美しい鍵を受け取った。

「ありがとう」

興奮にふるえた団長は、ミス・チル星を抱きしめた。甘いかおりが鼻に迫り、彼は思わず自分の唇を相手のそれに近づけた。

だが、彼女は、とまどったようにそれを拒み、群衆のブーブーいう歓声は、一瞬ひき潮のように静まった。

先進国の誇りを持った団長は、今さらやめるわけにいかなかった。長い旅のあげく久しぶりに会った女性でもあったし、さっきの団員の意見を思い出しもした。彼は落着いたそぶりを崩さず、翻訳機を通じて、呼びかけた。

「これは、地球での親しみをあらわすあいさつです。私たちに、地球でのやり方で親愛の情を示させて下さい」

この言葉が群衆の上に流れ去るにつれ、歓声は前にもまして高まった。事情がわかったせいか、ミス・チル星ももう拒みはせず、その意外に小さな口を団長の顔によせた。

口づけの間じゅう、叫びは、熱狂的にひびきつづけた。彼女は、団員たちとも次々と口づけをかわし、再び団長のそばにもどって彼の手をとった。

荘重な音楽が奏でられ、そのなかを、ミス・チル星に手をとられた団長を先頭にして、一行は階段をおりた。

急ぎ足で歩みよってきたチル星の太った元首は、団長の肩を抱き、キッスをした。団長は

いささか辟易したが、いま言った言葉の手前、あれは女性に限るのだと、すぐ訂正もできなかった。そこで翻訳機をさし出し、なにか言うようにうながした。元首は言った。

「お互いに思想や習慣など、こまかい点ではちがいもあるでしょうが、友好という大きな点では、しっかりと手をにぎりあうことにいたしましょう」

「そうですとも」

と団長はおうようにうなずき、元首の手を固くにぎった。

団長のうしろでは、大さわぎがおこっていた。ほかの団員たちは押しよせる群衆によってもみくちゃにされ、さんざんにキッスをされているのだ。男も老人もいたが、もちろん若い女性もいたので辟易ばかりでもなかったが――。

「みんなは、あなた方のもたらした地球式のあいさつを面白がっているようです。このチル星でも新しい流行となるでしょう」

元首はこう言いながら合図をした。明るい行進曲が奏せられ、一同は用意された自動車に乗せられた。

「では、歓迎会場へ向いましょう」

一大パレードが開始された。団長は元首と並んで先頭の車に乗り、団員たちは、美しい女性たちと何台もの車に分乗してそれにつづいた。

パレードは空港から街の大通りにはいった。人の波、旗、テープ、紙吹雪、歓声、拍手。団員たちは感激し、時々その感激を要領よく中断して、そばの美人たちとキッスをかわした。

「すごい歓迎だ。地球と全く同じやり方じゃないか」

「おい、見ろ。あんなところまで似ているぜ」

一人の団員が目ざとく見つけて、仲間たちに知らせた。その指さす先、人ごみのむこうの露地で、一人の男が吐いているのだ。

「星をあげてのこのお祭りさわぎだ。おおかた飲みすぎたんだろう。だが、ますます親しみがもてるじゃないか」

「われわれも間もなく思い切り飲めるぞ」

熱狂の渦巻くなかをパレードは進み、この星で最高と思われるホテルについた。一同は、そこのたんねんに磨かれた大理石づくりの広間に導かれた。香り高い花で飾られたテーブルの上には、すばらしい細工の杯に酒がつがれて、並べられてあった。

みなはその杯を手にとった。

「では二つの星の友好のために乾杯」

感激は最高潮に達した。チル星人たちは、いっせいにその短いスカートを優雅な身ぶりでもちあげ、お尻のあたりからでている尻尾に似た口の先に、杯の酒を流しこんだ。

信用ある製品

宇宙への進出をはじめようとした地球に、どこからともなく、大きな円盤が訪れてきた。そして、なかからでてきた宇宙人は、こぼれんばかりの笑いをうかべて喋りはじめた。

「ごめん下さいませ。地球のみなさま。私はセールスマンでございます」

その流れるような話しぶりには人々は誰もがあっけにとられ、どこで言葉を覚えたのかといった初歩的な疑問を抱く余地もなく、ただちに全地球の責任者のところに案内した。

「いったい、何しに来たのです」

責任者は、まず、当然な質問をした。

「私はセールスマンでございます。あ、申しおくれましたが、いよいよ地球のみなさまも宇宙への進出をはじめられるそうで、心からお喜びを申しあげます」

と宇宙人は一気に喋った。

「お喜びもいいが、どうして地球のことを知ったのだ」

「私どもの調査網はすばらしく行きとどいておりまして、妙な電波や試験ロケットなどを宇宙にお出しになりますと、それをきっかけに、たちどころにセールスマンがお伺い致すことになっております。おそらく、地球へ参りましたのは、私の社がまっ先と存じますが」

「いや、これは驚いた。だが、セールスマンというからには、何を売るつもりなのだ」

「武器でございます」

「なんだ、死の商人だな、そんなものはいらぬ」

「さようでございましょうか。しかし、宇宙進出をなさるからには、いずれ他の星との戦いもおこることでございましょう。その時になって、ああ、買っておけばよかったとお考えになっても、もう遅うございますよ」

「我々の無知につけこもうというのだろう。全く商売のうまい奴だ」

「お疑いになるのもごもっともですが、私どもの社はそんなインチキは致しません。長い信用の上に立っております。そうでなければ、あとで文句をつけられ、宇宙で仕事が続けられなくなります。地球のみなさまも宇宙へ進出なされば我が社がどんなに信用があるかおわかりになるのですが……。まあ、お買いになるならないは別として、ひとつごらんになるだけでも」

「見るのはいいが、いったいどんな武器があるのだ」

「私どもの社では、防禦用と攻撃用の二種を製作致しており、いずれも宇宙最高の品でございます。では、先ず防禦用のほうをごらんにいれましょう。私がそれを用いますから、攻撃してみて下さいませ。どんな武器をお使いになってもよろしゅうございます」
広大な砂漠でその実験が開始された。全人類はテレビを通じてそれを見まもった。
「さあ、どうぞ」
装置をそばにして立った宇宙人のセールスマンに向けて小銃や砲が発射された。だが、すべての弾丸は、まわりに張りめぐらされている見えぬ幕ではねかえった。
「どなたかこちらにいらっしゃいませんか」
ビクビクしながら何人かがセールスマンのそばに立ってみた。だが、その効力は、彼等をも守った。
「どんな強力な武器でも大丈夫です。ごえんりょなくお試し下さい」
ダイナマイト、そしてついに原水爆まで使ってみたが、その防禦装置によって守られた空間は無事だった。セールスマンはここぞと声をはりあげた。
「いかがでしょう。これをお買いになっておいて、イザという時にこの防禦幕を地球のまわりに張りめぐらせば、どんな攻撃を受けても安心して生活ができます。この品は宇宙最高。これを突破できる武器は宇宙ひろしといえども、ほかにはございません」

この言葉を待つまでもなく、すばらしい効果をまのあたりにして誰もが感嘆した。
「万一の用意に、買っておいた方がいいかもしれぬ。へんな星に攻められたら今までの努力も水の泡だ。ところで、いくらだ」
「金塊一千万トンでございます。少々お高いようにお考えかもしれませんが、これさえお持ちになっていれば絶対に安心でございます」
商談がまとまり、取引がすむと、セールスマンは再び身を乗り出した。
「ところで、攻撃用の武器はご入用ではありませんか」
「いや、ほかを侵略するつもりはない」
「でも、宇宙へ進出なさってみると、また気が変わってくるものでございます。無理におすすめするわけではありませんが、まあ、ごらんになるだけでも」
再び実験がはじめられた。セールスマンの持ち出した細長い筒の先からほとばしる電光を、さえぎることのできるものはなかった。
「いかがでしょう。宇宙進出の際にこれさえご用意になれば、どんな星でも征服できましょう。わずか金塊一千万トンで、宇宙でどこも防ぎようのない武器が手に入るのでございますが」
たしかに、この攻撃用の武器もすばらしかったが、ここで文句がでた。

「ウソをつくな」
「私どもの社は製品について責任を持っております。今まで製品をお買上げ下さったお客様から苦情の出たことはありません。このことは創立以来誇りといたしていることでございます。私はセールスマンでございますが、宇宙の神に誓ってもよろしゅうございます」
「おい、われわれ地球人を甘く見ないでくれ。もし、その効能がでたらめだったら、どうしてくれる」
「もし、お使いになってご不審な点を申し出て頂ければ、すぐに代金はお返し致しましょう」
「なるほど。では、その攻撃用とやらも、買おうじゃないか。だが、しばらくここで待っていてくれ。全く宇宙には油断もスキもできない奴がウヨウヨしているとみえる」
　セールスマンは合計二千万トンの金塊を受け取って待った。
　たちまち実験がはじめられた。
　人々がテレビによって成り行き如何と見まもるなかで、その宇宙最高の防禦装置に向け、宇宙最高の攻撃用武器が向けられた。
　発射！
「いかがでしょう。何か文句がございましょうか」

　セールスマンの声に対して、もちろん誰ひとり文句を言う者はなかった。
「苦情がございませんようですから、これで失礼させて頂きます。お買上げ頂きありがとうございました」
　セールスマンは円盤を操り、全宇宙に信用を誇る本社の所在地、益々大きくなっていく金無垢の星をめざして飛び立った。
　二つの武器の激突によって生じた衝撃波によって、一瞬のうちに生命を失った全人類をあとにして。

処刑

この男はパラシュートをはずす気力もなく、砂の上に横たわったまま目で空を探した。うす青く澄み切った高い空に浮かぶ小さな羽毛のような雲のそばに、みるみる小さくなって行くロケット推進の飛行機をみつけた。少し前、パラシュートをつけた彼をつき落していった飛行機だった。飛行機はさらに小さくなり、空にとけ込んで消えた。

彼と、地球とのつながりは、これで全くたち切られた。もう心をごまかしようがなかった。これからはいつ現われるか知れない死を待つ時間だけがつづく。いまや処刑の地、火星上にいるのだった。

酷熱というほどではないが暑かった。彼は喉の渇きに気がついて、そばにころがっている銀色の玉を見た。銀の玉は日光を受けて静かに光っていた。

文明が進み、犯罪がふえていた。文明が進むと犯罪がふえるんじゃないかな。このむかし

だれもが持った不安はすでに現実となっていた。軽金属でキラキラするビル。複雑にはりめぐらされた自動装置のための配線。大小さまざまの真空管。このような無味乾燥なものがいっぱいにつまった都会のどこから、またどうして生々しい犯罪が生まれてくるのかは、ちょっと不思議でもあった。しかし、犯罪は起っていた。殺人、強盗、器物破壊、暴行。それに数え切れない傷害、窃盗。

もちろん、この対策は万全だった。電子頭脳を使った、スピード裁判。以前の何年もかかる裁判は改善され、検事、弁護士、裁判長の役をひとつの裁判機械がおこなっていた。逮捕されて次の日には刑が確定する。その刑は重かった。悲惨な被害者の印象がうすれないうちに確定する刑は重くなければならなかった。

あんな刑では被害者がかわいそうだ。この素朴な大衆の要求は刑をますます重くしていった。そのたびに、裁判機械の配線は変えられ、刑はより重くなるのだった。しかも、宗教をほとんど一掃してしまってからは、犯罪を押えるには重い刑しかなかった。また犯行よりも刑の方が重くなくてはその役には立たなかった。

処刑方法として最後に考え出されたのが、火星の利用だった。火星。探険ロケットがはじめて行きついてからしばらくの間の火星さわぎは大変なものだった。学術上の新しい発見、産業上の新しい資源、観光旅行。だが、調査がしつくされ、採算可能の資源がとりつくされ

たあとの火星はもう意味がなかった。地球のひとびとは限度のない宇宙進出をつづけるより、地球を天国として完成した方が利口なことに気がついた。
火星は処刑地にされ、犯罪者たちはロケットで運ばれ、パラシュートでおろされるのだった。銀の玉をひとつ与えられて。
その男は銀色の玉をこわごわみつめた。ますます激しくなる渇きは、彼にパラシュートをはずさせ、玉に近よらせた。彼はそっと手にとった。しかし、それについているボタンを押すことはためらった。
最初の一回なんだから大丈夫だろう。だが、この気休めを追いかけて、
「第一回目でやられた奴もあるそうだ」
という地球での噂が、まざまざと頭に浮かんだ。彼はまわりを見まわし、このボタンを遠くから押す工夫はないものかと思った。しかし、それを嘲笑うように
「ボタンは手で押さない限り絶対だめですよ」
という、ロケット乗務員が彼に玉を渡す時に言った言葉が思い出された。おそらくその通りだろう。そんなことが出来るのならこの銀の玉の価値はないのだから。
渇きはつよまった。唾液はさっきから全く出なかった。もう我慢はできない。彼は高所か

らとび降りる寸前のような、恐怖とヤケとのまざり合った気持ちで、ボタンにあてた指に力を入れた。
ジーッ。玉はなかで音をたてた。彼はあわてて指をはなした。音はやんだ。助かったな。彼がボタンと反対側の底をちょっと押すと、その部分がはずれて、銀色のコップがでてきた。コップの底には水が少しばかりたまっていた。彼はそれをみつけ、勢いよく口のなかにぶちまけた。もちろん、ぶちまけるといったほどの量はなかったが、カラカラになっていた喉の渇きを一応はとめた。
彼は舌をコップのなかにのばし、その底をなめようとしたが、それはできなかった。もっとも、とどいたとしても、一滴あるかないかの程度だった。彼は、カチリと音をさせてコップをもとにおさめた。
そうそう、そんな調子でいいのよ。もっと飲みたいんじゃないの。
銀の玉は笑いかけるように、ふるえる彼の手の上でキラキラ光った。
遠く地平線のかなたから爆発の音が伝わってきた。
銀の玉は直径約三十センチ。表面にはたくさんの細かい穴があいている。押しボタンがひとつ、その反対側には、コップのさし込み口。ボタンを押せば水がそのコップにたまる。空

気中の水蒸気分子を強力に凝結させる装置なのだ。人工サボテンとも呼ばれていた。火星を旅行する者には、なくてはならない装置だった。だが、文明の利器には、必ず二通りの使い方がある。彼の持っている、またいま火星上にいるすべての者が持っているこの銀の玉は処刑の機械なのだ。もちろん水は出る。しかし、ある時間以上ボタンが押されると、内部の超小型原爆が爆発し、三十メートルの周囲のものを一瞬のうちに吹きとばす。
その爆発までの時間はだれも決して知らされないのだった。

だれかやったな。彼は、反射的に手の銀の玉を砂の上におろし、二、三歩かけた。しかし、ボタンを押さない時に爆発することはないのだった。彼はこれに気がつき、それ以上走るのをやめた。だが、玉をまともに見る気もしなかった。渇きはいくらかおさまっていた。
これからいったい何をすればいいんだ。彼は、立ったまま見回してみた。地平線の近い火星はそう遠くまでは見渡せない。より遠くを眺めるにはそばにある砂丘にのぼる以外にはなかった。
砂丘の上に立つと、遠くに小さな街が見えた。街といっても三十軒あるかないかの、むかしの西部劇にでてくるようなやすっぽいものだった。火星の開拓時代のなごりで、住んでいる者のあるはずはなかった。彼のような死刑囚にめぐり会える可能性もこんな街では少な

い。しかし、ここにぼんやりしているのも、いたたまれない気持ちだった。死をみつめながらじっとしているより、少しでも気をそらせるにはあの無人の街に一応目標をたてて歩いてみるのも一つの方法だった。道路は砂丘のすそを通ってその街にのびていた。
あの街まで行ってみよう。彼は銀の玉をとりにもどった。
わたしを置いて行くつもりじゃないでしょうね。
玉は砂の上で待っていた。穴のたくさんあいた玉の表面はキラキラと光り、それの持主の気分を反映して表情を作るように見えるのだった。彼は玉を抱え、砂丘を越え、道路に下りた。舗装された道路はところどころ砂でうずまりかけ、歩きにくい所もあったが、彼はそれをつたって街をめざした。

畜生。なんでこんなことになったんだ。だが、この文句は、それ以上続かなかった。喚いてみたって何の役にも立ちはしない。彼は確かに人を殺したのだし、殺人者が火星で処刑されることは地球上のメカニズムのひとつなのだ。その動機や理由などは問題ではなかった。殺すつもりでなくても、殺すつもりであっても、殺された側にとっては同じ事なのだから。地球の重さに匹敵するとまでたとえられた個人の生命――それを奪った者が許されるはずはない。

それに、たとえ弁解する機会が与えられても、多くの者には、何とも説明のしようがなかった。彼もまた同じだった。しかし、説明はできなくても、原因はあった。それは衝動とでも呼ぶべきものだった。
　朝から晩まで単調なキーの音を聞き、明滅するランプをみつめているような仕事。それの集まった一週間。それの集まった一ヵ月。その一ヵ月が十二集まった一年。その一年で成り立つ一生。
　だが、これに対して不満を抱きはじめたら、もう最後なのだ。逃げようとしても行き場はない。機械はそのうち、そのような反抗心を持った人間を見ぬき、片づけてしまうのだった。片づけるといっても機械が直接に手を下すわけではない。その人間に犯罪を犯させるのだ。
　イライラしたものは少しずつそんな人間のなかにたまる。酒やセックスで紛らせるうちはまだいい。麻薬に走るものもでる。麻薬を手にいれることのできないものは、全く処理しようのないイライラを押え切れなくなって、ちょっとしたことで爆発させる。傷害だ。そして、彼の場合は、殺人となってしまった。だから殺人は計画的でもなく、恨みとか、金銭とか、嫉妬といった洒落た動機があるわけでもなかった。だから、火星の囚人には、被害者の顔を覚えていない者さえ多いのだった。彼もそうだった。

しかし、いずれにしろ、殺人は殺人だ。
　このように、機械に向って対等、或はそれ以上につき合おうなどとの考えを持った人間は、まんまと機械の手にのり、裁判所に送られる。裁判所の機械は冷静に動き、決して誤審のない正確きわまる判決を下す。脳波測定機、自白の薬の霧、最新式の嘘発見機は、くみ合わされた一連の動きをおこなって、たちまちのうちに事実を再現してしまうのだから。
「おれには人間性がないのか」
　こんなありふれた反問に対しては、機械はテープ録音の声でゆっくり答える。
「被害者のことを考えてみよ」
　そして、全くの過失の場合を除いて、殺人犯はすべて火星に送られ、銀の玉に処刑を任されるのだった。
　だが、この古今未曾有の検挙率のなかでも、犯罪は絶えなかった。巧妙な粛清。機械と共存のできない者、動物的衝動を持つ者の整理かも知れなかった。従って皮肉にも火星に送られてくる者は生命に執着する心が強かった。
　畜生め。彼は不満を何かに集中して憎悪したかった。しかし、機械を憎悪することはできるものではない。ひとりでも人間が裁判官の席に坐っていたのなら、それを心に描いて憎悪し、いくらか救いになったかもしれない。だが、そう都合よく行くようにはなっていなかっ

た。彼のやり場のない不満は、からだから発散しなかった。これも処刑を、より重くし、より苦しめるために考えられた手段のひとつかも知れないのだった。
喉が再び渇いてきた。地球より酸素の少ない空気では、より多くの呼吸をしなくてはならなかったし、湿度の少なさは、その度に水分を奪い去っていた。水が飲みたい。鼻の奥や喉に熱した塩をつめ込まれているようだった。彼は、横目で抱えている玉を見た。
早くボタンを押したら。
冷たい媚を含んで笑ったように見えた。昔のマタハリとかいう女のウインクはこんな感じだったのかな。彼は、つまらんことを連想したものだと苦笑した。
街は近くなっていた。あの街までは水を飲むまい。彼はそうきめて、水を節約するてだてとした。それに、あそこには何かあるかも知れないのだ。今爆死するより、街を見てから死んだ方が後悔も少ないように思えた。
彼は、細い細い管で息をつくようにあえぎながら、街に入った。
家々は道の両側に十軒ぐらいずつ並んでいた。だが、まっさきに彼の目をとらえたのは、そのまんなかあたりの右側の一軒が飛び散り壊滅した跡だった。彼の足は止まった。
だれか前にここでやられた奴がいる。おそらくその男も砂漠を通ってこの街にたどりつい

たのだろう。なにかここに絶え間ない死の恐怖から救ってくれるものがないかと思って。一軒一軒見回ったあげく、それとも、ついた途端だったかも知れないが、この家のベッドの上か、椅子の上か、或は家の前のふみ石の上かで、最後の水を飲もうとしたのだ。一軒の家は粉々になり、両どなりの家もあらかたこわれ、道をへだてた向いの家のガラス窓は目茶目茶になっていた。
彼は、その跡をみつめながら立ちつくした。考えまいとしても自分をそこに置いた想像をしないではいられなかった。考えをそらそうとしてもそれは出来なかった。夕ぐれが迫って、彼の影が家の破片のとび散った空虚な街の道路の上に長く長く伸びるまで。
赤味をおびた砂漠の上を走って、沈みかかった太陽の光は、その家並みの欠け目から彼の顔にまともにあたり、赤く彩った。彼は渇きを再びはげしくよびさまされ、玉を見た。銀の玉も真紅にもえていた。
どう。
玉は彼に誘いをかけた。この時はいつもの冷たさが感じられなかった。
よし。彼は前に進み、粉々になったスレートや不燃建材などの瓦礫の上に立った。砂漠を横切る真赤な夕陽、だれもいない街。今なら死ねそうな気もした。地球の文明に調和できなかった彼にとっては、むしろすばらしい死に場所だった。彼は太陽に向い、立ったまま、ボ

タンにふれた。前にここで死んだ誰ともわからぬ男に親しみのようなものをも抱いた。今だ。思い切って、ボタンを押した。

ジーッ。玉は小さなうなりをあげたが、彼は、夕陽をみつめ、もう少しの辛抱だと指の力を抜かなかった。音は止まった。コップに水が一杯になったのだった。

彼は我にかえって、思わずコップを外した。冷たい水がふちまでたたえられたコップが、重く手の上にあった。もう考える余裕もなく口にぶつけた。コップは歯にあたり、水が少しこぼれ、口のなかにはいった水もはれ上がった喉が不器用にうけつけたので、逆流して唇からあふれた。彼はそのあふれた水をふるえる手でコップにうけとめ、落着きをとりもどしながら、改めて少しずつ分けて口に含み飲み下した。水が喉を通り、食道を下り、胃にはいり、体じゅうにしみ渡って行くのがはっきりわかった。

彼はコップをさかさにして、しずくを口のなかに落し終ると、寒気を覚えた。太陽が沈み切り、夜がしのび寄ったらしく、冷たい風があたりにうごめいた。彼の、ほんの少し前までの死を受け入れてもいいような気構えは、全く消え去っていた。生への執着、死の恐怖、今の瞬間を生きて通り越せたという安心感が、どっと押しよせた。立っている家のくずれ跡から、えたいのしれぬものがそっと起き上がりはじめたような戦慄で、とりはだが立った。

彼は、道路にとびのき、はいってきたのと反対の方に早足で歩きかけた。道は再び砂漠に

のびていた。防寒にも充分な服だから、寒さを心配することはなかった。だが、人間味のかけらさえない砂漠にさまよい出る気もしなかった。

しばらく佇んでから、彼は街のいちばん外れの、とび散った家と反対側の家のドアを引いた。鍵はかかっていなかった。ドアが開くと発電装置が動いて、その家の灯がいっせいについた。黄色味をおびたやわらかい光が、かつてこの家の住人たちを照らしたと同じ光で部屋じゅうを明るくし、久しぶりの客を迎えいれた。机、椅子、そして床の上にうっすらとほこりがたまっていた。

彼は本能的に台所の方角を察し、ドアを開けた。ステンレスの流線型の流しの上には、蛇口が。

彼は蛇口に手をかけた。しかし、それは回らなかった。力をこめた。だが同じだった。彼は蛇口を改めて見直し、苦笑した。それはすでに口がいっぱいにあけられていたのだった。当然のことだった。火星が処刑地に定められて住民たちが地球に引きあげる際、造水装置は完全にとり除かれているはずだった。だから蛇口からパイプを伝って、家じゅう、そして街じゅうを調べてみたって、その端には何もないのだ。

彼は部屋にもどり、椅子にかけた。さっき机の上に投げ出しておいた銀の玉は、

あたしがあるのにつまらないことを考えないでよ。

と、黄色い灯の下で光っていた。
彼は、疲労するほど動きまわったわけでもないのに、からだのなかには重い疲労がつまっているのを感じた。また、一時渇きのおさまった今は、たまらない空腹を覚えた。
彼は、腰につけていた袋をあけ、赤い粒をひとつとり出した。これをコップ一杯の水にとかせば充分一食分になるのだった。彼は机の上で袋を全部あけ、粒を数えようとしたが、またしてもこれを渡す時のロケット乗員の無情な声がよみがえった。
「数えてみたって参考にはなりませんよ。一人百粒ずつときまっているんですから」
彼はその時聞き返してみた。
「百食分が限度なんだな」
「そうとも限りませんね。火星の街にはどこにでもたくさん残してありますよ。足りなくなったらそれを使うんですね。もっとも、それまでもつかどうかは、なんとも言えませんが」
事実、ロケットの乗員にも、爆発までの長さの予想がつけられるものでもなかった。この家の棚を探せば、これと同じ赤い粒はあるだろう。探し出してみても今は同じことなのだ。
おなかはすかないの。
銀の玉は今度は食欲で誘惑した。空腹感はつのったが、唾液は少しも出なかった。水、そして食物。彼は期日の知れぬ処刑の日までこの二つで苦しみつづける以外にないのだった。

彼は、玉に近より、ボタンにふれた。空腹の方が我慢しやすいのだぜ、いいのか。この考えが頭にひらめき、ボタンは押せなかった。しかし、この時、ひとつの事を思いついた。あそこで押そう。さっきのこわれた家のあと。さっきは幸運にもパスしたところ。一回爆発した跡では二度と爆発は起らない、といったジンクスがあるような気がしたからだ。
彼は、自分で勝手に作り出したこのジンクスにすがりつく気持ちで道に出た。もちろん、ほかの家は灯ひとつついてなく、黒い家々が並んでいた。風はあまりなかった。彼はこのジンクス以外考えないように努め、さっき逃げ出した家のくずれ跡に立ち、すぐにボタンを押した。
ジーッ。過去の人生の一切が恐怖のうちに一回転し、音のなり止むまでその回転をつづけた。
ほっ。深いため息がでた。コップの口までたたえられた水は、火星の小さな月をひとつ浮かべていた。こぼすといけない。彼は一口すすり、ゆっくり灯のついた家まで運んだ。月は浮かんだまま家の近くまでついて来た。
銀の玉を椅子の上に置き、赤い粒をそれに入れた。粒はとけ、かすかな音と共にあわを出し、水を黄色に染めた。そして表面に緑の膜が浮かぶと出来上がりとなるのだった。
彼は、それを口に流し込んだ。クリーム状になった液はゆっくりと口のなかを、頬の内側、歯のあいだ、舌の上などすみずみまでさわやかな味を行きわたらせ、喉から胃にはいっ

て、活気を体じゅうによびさましはじめた。からい味の種類ではなかった。そこまでは残酷ではないのだな。彼はそんなことを考えながら、残りを飲み干した。
生きているという実感と、生きていたいという欲望が、つぎつぎと湧き出し、彼はこれを持てあました。眠れるかどうかはわからなくても眠ろうと試みる以上にその処理はできそうもなかった。
室の隅には横になれそうな長椅子もあったが、彼は階段を二階に上がってみた。ドアの少し開いている部屋をのぞくとベッドがあった。ほこりは、下の部屋ほどはたまっていなかった。ここで寝よう。彼は万一、本当に万一、玉の盗まれる場合を想像して、玉を運んでベッドのそばの椅子に置いた。その部屋にラジオをみつけ、スイッチを入れた。こわれていそうではなかったが、ダイヤルをどんなに回してみても雑音ひとつ出なかった。彼はベッドに横たわって、玉をちらっと見た。
もうねるの。顔でも洗わない。
とんでもない。地球では飽き、惰性のようになっていた習慣。寝る前のシャワーや口のすすぎがどんなに貴重だったか、痛切に思い知らされた。彼はベッドについているスイッチで、部屋の灯を全部消した。
弱い月の光がさし込んでいたが、彼にまでは当らなかった。彼は、窓から空を見た。星がま

たたき、そのなかには青い星があった。地球では見なれない大きな星。それは地球だった。
青い星。海の色だった。地球は水の星だった。彼は海にとび込みたかった。雨。長い雨も不意の夕立も、またひどい暴風雨もこの火星には全くない。そして、雪、氷。北極と南極。どっちが北極だろう。だが、青い星の上に見当はつけられなかった。
火星の水はすでになくなっていた。極にあった氷はすべて分解され酸素となって空中に散っていたし、水素はエネルギー源として使いつくされていた。開拓時代にはなにしろ酸素が最優先で作られていたのだ。火星の水は空気中に僅かに残り、高い空で時たま雲にはなっても、決して雨となって降ってくることはないのだった。銀の玉を使わない限り、火星の上では、液体の水を得る方法は外にない。その銀の玉も火星では、もう作りようがなかった。内部に含まれる触媒には、地球でしか採れない元素を使うのだから。
畜生。地球め。彼は地球を、彼をこんな破目に追いやった文明を思い切り憎悪し、何の役には立たなくても、あの青い星めがけて憎悪の念を集中してやろうと思った。しかし、青は、すぐ水を連想させ、雨、雪、霧、しぶき、流れ、とあらゆる種類の豊富な水に連想が飛び、それは出来ないのだった。これも計算された処刑の一環なのだろうか。地球は悠々と平和に輝いていた。彼のような動物的衝動を起す者をつぎつぎと粛清しつづける地球はますます平和になるだろう。彼がどんなに強く念じ、どんなに長く見つめていても、あの星に水爆

戦がおこり、急に輝きを増す可能性はないのだった。

彼は、疲れていた。玉を置いた椅子に背をむけているうちに、いつとはなしに眠りにおちた。それを待っていたように悪夢がおそった。だが、疲れは目を覚させず、悪夢は朝まで彼を苦しめつづけた。

朝。目を覚した彼は二階のバルコニーに椅子を運び、通りを眺めた。家じゅうを探せば櫛や電気剃刀があるかもしれないがそんな必要はなかった。すがすがしい朝。乾燥した空気はひんやりとしていた。だがそれはほんのひととき。間もなく耐えがたい日中の暑さになるのだった。

街ではコトリという音も、虫の飛ぶ羽音もしなかった。動くものは彼のほかには何もなく、音をたてる可能性のあるものは彼の銀の玉以外ないのだ。だれか話し相手はないだろうか。その時、玉はキラリと光った。

あたしじゃ不満足なの。

彼はバルコニーの床の上の玉を思わず軽く蹴った。玉はころがり、音をたてて舗装された道に落ち、さらにころがって向いの家に当って止まった。

しまった。こわれたか。残忍さをいっぱいに秘めた玉でもこわれると困るのだった。彼は

階段をかけおり、道にとび出して玉を拾いあげた。べつに見たところ変化はなかった。こわごわ揺すってみた。なにも音はしなかった。ボタン。だが指をあてるとなまなましく恐怖がよみがえった。これは試みなんだ。故障の試験なんだ。いいだろう。高まる動悸のなかで祈りながらちょっと押した。音がない。こわれたのかな。少し力を入れてもう一回押した。

ジーッ。音だ。あのいやな音だ。彼は耳を押えたくなり指をはなした。玉はこわれていなかった。玉は容易にこわれるものではないのだ。ロケット機から落しても内部の緩衝装置は耐えるのだった。それにこの火星上に残っているどんな器具を使ってこじ開けようとしても殆んど不可能に近いほど丈夫な金属で包まれていた。

かつて技術者上がりの冷静な犯罪者がこの火星でこじ開けようと全智能を傾けて試みた話は噂として地球にも伝えられていた。ありあわせの器具を使って慎重に進められたその計画は一応成功した。だが、その途端に玉は爆発したのだった。もっとも、その男は遠くはなれて巧妙に作業を行ったので死ぬことは免れた。しかし、その成功は何の意味もなかった。それまでは死の恐怖を代償とすれば水が得られたのに、もはや何をなげだそうと水は得られない。ひとの玉を盗もうとしても他の連中は、この時だけは必死に協力して拒んだのだった。次の日に彼は胸をかきむしり、自分の腕をかみ切り、血をすすりながら死んだのだった。この話を地球の善良な人間は楽しげに聞いた。しかし、火星から戻った者はないのだから誰か

が作り出した話かも知れなかった。だが、玉の丈夫なことだけは確かだった。
彼はコップの底に少したまった水をすぐさま飲み干した。
彼はその日は夕ぐれまで街にいた。
渇きが耐え切れなくなるとこわれた家の跡に行って戦慄しながらボタンを押し、水を飲むと再び生への執着をとりもどす。あとはバルコニーの椅子に坐り、焦躁と不安のなかでどこまで近づいてきたかもわからぬ死の影のことについて思いをめぐらすのだ。太陽が道を真上から照らし、そして少し傾き、彼が蔭から追い出されるまで四回くり返した。

爆発までの時間は何が基準となっているのだろう。犯罪の程度だろうか。それなら重い犯行の方が短い時間で爆発するのだろうか、それとも長く苦しめるため長い時間なのだろうか。落着いて考えられない頭ではすぐここで行き詰り、同じところで堂々めぐりをはじめるのだ。しかし、たとえ落着いて考えてみてもわかる筈はないのだった。

午後、彼は気分を変えようと街じゅうの三十軒近い家々を丹念に調べた。だが、何もめぼしい物はなかった。家々に残っていた物の様子から察して、この近くにかつてウラニウム鉱があってその採取員たちによって住まれていたことがわかった。しかし、それも又今の彼にとって何の意味もなかった。ウラニウムがあったってどうということもないし、地下水のない火星では穴が残っていても水のある筈もなかった。

家々の台所も詳しく調べた。安心して飲める一杯の水でもあるかと思って。しかし、戸棚には乾燥食料がつまっているだけだった。そして、最後の一軒の台所の戸棚をあけた。
彼の目の前の二本の壜。一本は黄色で一本は褐色。彼は黄色の壜に手を伸ばしたがふるえる手ではうまくつかめず、壜は床に落ちて割れた。ベンジンの匂いがたちまちのうちに部屋じゅうに満ちた。彼はもう一本をしっかりにぎった。有名な食料品会社のマークがあった。だがその下のレッテルの文字。濃厚ソース。彼は床にたたきつけた。どろりとした液が床を這いはじめた。

彼は力なくその家を引きあげようとして壁の地図を見つけた。家の標識を調べ、手紙の屑を探し出したりして今いる場所を地図の上に求めた。だが、それを知ったところで一刻の休息をも与えないこの責苦を逃れる何のたしにもならないのだった。

彼は玉の待っているもとの家にもどった。
これからどうなさるの。
次の街に行ってみるさ。もうこれ以上この街にいるのもたまらなかった。彼は玉をかかえ、その街を出た。ふりかえると街は沈みかけた夕陽を受けて小さく赤く燃えていた。街は又いつかやってくる人間のあるまで無人のまま待っているのだ。
陽は沈み、星々は数と輝きを増した。曇る日のない火星では星々の光と小さいながら二つ

ある月の光で充分道を見失うことはなかった。遠い砂丘の起伏に目をやり、また星座をみあげ歩きつづけた。地球だけはなるべく見ないようにした。しかし、銀河はミルクの流れとなり、他の星々もジョッキの形、噴水の形、酒壜の形に星座を作り、月は小さなブランデーグラスとなって彼を悩ました。

一杯いかが。

彼の腕にかかえた玉からは誘惑の感触が彼に伝った。彼は道ばたに腰を下し、ひざの上に玉を置いた。彼は空を見上げ宇宙の壮大さをつとめて考え、指をボタンに当てた。指はなかなか動かなかった。

早く押したら。

玉は冷たく星の光できらめいた。彼は再び宇宙の壮大さを考え、やっと決心をつけてボタンを押せた。

むかしの死刑なら一回だけ死の覚悟をすればよかったが、この玉は何回も何回も死の覚悟を求めるのだった。それにむかしのは無理矢理ひとが殺してくれたが、この方法では、必ず来るいつとも知れない期日を自分で早めて行くのだった。

彼は精神を疲れ果てさせて一杯の水を得、また夜の道を歩きつづけた。あけ方近くに地平線に小さな閃光を見た。しばらくして爆発音がかすかに聞えた。

太陽は火星の反対側をまわり、再び地平線に昇ってきた。夜の闇を掃きはらい、空の星を消し去り、朝が来た。

彼は道のかなたに一軒の家をみつけた。ガソリンスタンドだった。そのガラスは砕け散っていた。道をへだてた反対側の一軒が飛び散っていたのだった。彼はその跡に歩み寄った。だが、不思議なことに気がついた。

崩れた家跡のまん中にある、一カ所のくぼみ。何だろう。そのうち彼の顔色は変わった。二重の爆発。だれでも爆発の跡は安全といったジンクスを作りあげてしまうのだった。その一人が飛び散ったことを示す跡。

彼は空腹だった。ガソリンスタンドのなかに入ってうずくまった。夜じゅう何も食べていなかった。又、何回もためらってボタンを押した。彼はもう玉の出す音だけは聞きたくなかったので、靴をぬぎ、両手で耳を押え、目をつぶって足の指で押してみた。人体を識別する能力を具えたボタンは足の指でもかまわずに動いてくれた。しかし、音はかすかにはなったが、いっそう無気味にからだに響いた。彼は赤い粒をなげこみ、腹をみたし、倒れて眠った。夢はなかった。

午後おそく目が覚めた。喉は依然として渇いていた。建物を探すとスクーターがみつかった。この向うでとび散ったどっちかの男がどこからか乗ってきたものだろうか。いてもたっ

てもいられない気分にかられ、事故で死ねることを祈りながらすっとばした男。そして、ここで。彼は想像を打ち切り、その修理をはじめた。夜になるとランプをつけてつづけた。朝になって地下室を調べるとガソリンの罐があった。これに火をつけようか。だが完全に確実な死にふみ切れるものではなかった。彼はガソリンをスクーターに注いだ。

あたしに任せておいた方が安全よ。

玉はささやいていた。

彼はスクーターの前の籠に玉をのせ、そこを後にした。速力をしだいにあげた。このスクーターの前の持主がやったのと同じに。早く、早く。だが、いそぐ目的があるためではなく、それ以外にすることがないのだった。彼は、死のことを忘れることはできなかったが、暑さを少し紛らした。砂漠にはさまれた道路には事故を起す原因となるものはない。時々、ほんの時々、道のへこみで車がはねた。玉はその度に少しとび上がり、楽しそうにゆれていた。

彼は不意にブレーキをかけた。道ばたに光るもの。銀の玉だった。そのそばの人骨。病気にでもなったのか、寿命のつきるまで爆発がこなかったのかは全く判らなかった。彼はかけより玉を拾った。しめた。もうかった。だが、ボタンを押そうとすると考えないわけにはいかなかった。これだって自分のだって可能性は同じなのだ。この男が爆発を予感して渇きを耐えぬいて死んだのかも知れない。彼が今これを拾い、二つ持ったところで決して二倍の役

に立つわけでなく、むしろそのために彼の持っている玉の価値を何分の一にしてしまうかもしれないのだった。

彼は玉を置いた。砂に浅い穴を掘り骨を入れた。幸運な奴か、不幸な奴か。彼はちょっと頭を下げ、そばに玉を入れ砂をかけた。将来、長い年月ののち、火星が処刑地でなくなってから再びこの玉が掘り出されることがあるだろうか。この玉の性質を全く知らない者によって。

だが、彼はそれ以上このくだらない空想を伸ばすことはしなかった。彼の生命は喉が渇き切るまでであり、音が無事になり終ったら又新しく生まれ変わり次の僅かな生命を持つのだった。この短い生命の間にはその次の生命のことを考える余裕はなかった。だから、途方もない将来の空想などをひろげる能力は全くなくなっていた。彼はスクーターにもどり始動した。そのゆれで、玉はうれしそうに跳ね、踊りまわった。

へんな玉をつれ込まないでくれたのね。

彼はしばらくゆっくり走らせていたが、又しだいに全速にあげた。それでもハンドルを持つ手は決して過ちをせず、幸運な事故はおこりそうもなかった。彼は人体のこのしくみを嫌悪した。

又、夜が来た。彼は道ばたに横になった。服の襟をたてるとそう寒くはなかった。星を見

上げ、銀河を眺めた。水。それからさっき埋めてきた玉のことを考えた。地球への反抗としてあの玉を使った方がよかったかな。だが、彼の感情はそうではなかった。あんまり後悔は湧かなかった。なぜだろう。やっぱり自分の玉の方がいいのだった。すでに何回も生死を共にした玉。最初の憎悪も一種の愛着のようなものを帯びはじめたのだろうか。彼は玉をスクーターから取ってきた。

そばに置いてくれるの。

玉は空の星の光を集め、彼にウインクしてみせた。彼は玉を抱いて横になった。

ふと、女性のことが頭に浮かんだ。火星におろされてからはじめてだった。この絶え間ない神経への責苦ではそんなことを考える余裕はなかったのだ。火星には女性はいないのだった。女性は機械とも平然と調和できるので我々のようにはならないのだな。彼はそんな風に考えているうちに、火星上で許された唯一の救い、眠りに入った。

悪夢ではなかった。バラ色の夢だった。女性がいた。彼は朝までその女性とたわむれていた。ふざけ合い、乳首をつついて、キャアキャア叫ばせ、筋もなくさわいだ。だが、どうしてもキッスだけはさせてくれなかった。

再び朝。彼は暑さで目を覚すと玉を抱いたまま火星の道ばたにもどっていた。しかし、玉

の様子は変だった。底を調べるとコップには水が一杯にたまっていた。寝ている間にボタンを押していたのだった。彼は玉を軽くなで、汚れを拭いてやり、コップの中に赤い粒を入れ恐怖なくしてはじめて得た一杯を飲んだ。だがこんなことはもう終りだろう。見ようとして夢を見ることはできないのだから。

楽しいめざめではじまった一日もたちまちもとにもどった。彼は暑さの道を走り、時々車を止め、玉を憎悪し、恐怖し、戦慄してその絶頂を越えて水を得ることをくり返した。

その日、彼は道を歩いてくる一人の男に会った。少しはなれて車をとめ、声をかけた。

「おーい」

危害を加えてくるかもしれないと彼は目をその男から離さなかった。悪人であるとは言えなくても、彼と同じく人を殺した犯罪者であることは間違いないのだから。

しかし、その男は彼が見えるはずなのに気がつかない様子だった。そのまますれ違ってしまいそうになった。彼は肩に手をかけた。男は止まった。年齢の見当のつかないほどひげののびた顔の目はあらぬ方角をみつめていた。

狂っているな。彼はあわてて手を放した。自分の近い将来を見たような気がした。間もなくこうなるのだろうか。その方が幸福なのだろうか。それでもやはり死の恐怖は残るのだろうか。彼は呆然とその男の歩みつづけるのを見送っているうちに、何かなすべきことがある

ような気がし、それを思いついた。
　そうだ。奴をおどかして水を出させよう。狂人なら案外やるかもしれない。彼はあわててあとを追い、前に回って言った。
「そのボタンを押せ」
　男はゆっくりボタンに指を当てた。彼は驚いて四十メートルばかり駆け、耳をふさいで伏せた。もういいだろうな。彼は目をあげて見た。
　男は手招きしていた。何の意味だ。彼はためらいつつ近よった。男はめんどくさそうに言った。
「おい新入りだな」
　気違いではなさそうだった。そして、表情を変えずに言葉をついだ。
「つまらんことを考えるなよ。もっとも最初は仕方がないかな。おれもそうだったんだから」
　男は喋りながら道ばたに坐った。
「お前さんも今にこうなるさ。なにすぐだぜ。ひとに水を出させる。こいつはうまい考えだ。だが出来っこはない話さ。三十メートルは離れて待っていて、その出た水が三十メートルかけもどる間残っていると思うかね。どんなおどし方をしたって駄目さ。渇き以外の苦痛なんて火星にはありゃしない。それにひとに殺してもらえればと誰だって考えているんだか

らね。地球じゃあ自殺寸前に行っていたやつだって、ここじゃあ自分じゃあ死ねないんだ。殺してくれる奴もいないんだ。地球ではひとを殺してきた奴等がね。苦しむ仲間が一人でも多いほど気が楽なものさ。
　催眠術をかけようったって無理だ。こればかりはといった警戒の壁を破ってまで術はかからんし、又かかったところであのジーッという音には術を中断させる作用があるらしいぜ。全く、うまく出来ていやがる。どんな方法を使ってもひとに押させるわけには行かないんだ。まあ、それだから今もってこの玉が使われているんだろうがね。
　だれも来た当座はさっきのようなことをやってみる。それからヤケを起してみる奴もある。だがヤケなんて起してみたってたかが知れている。それにそう続くものではないんだ。事故で死にたいと思ってみる。しかし火星には殺人もなければ事故もない。地震もなければ火事もない。台風や洪水ならお願いしたいくらいだ。交通事故はごらんの通りさ。おあいにく様だね。あるものはただ一つ。眠っている間にとなりの部屋で、やってくれることだけだ。だが、これもうまくは行かない。やはりお互いに調べてしまうんだ。
　それから。ああ。もうめんどくさい。結局頭のなかに残った一点をみつめ、その一点に縛られて生きているのさ。それが何だかは知るものか。銀の粒かも知れないぜ。ああ。むだなことをしゃべったな。だが黙っていればお前さん、どこまでつきまとってくるかわからなか

ったからな。あばよ。喉が渇いた。水を一杯くれるかね」
彼はそれに答えようがなかった。男は歩きはじめた。彼はその後姿に声をかけた。
「火星におろされてどれ位になるんだ」
だが男はふりむきもしないで言った。
「知るもんか。わかるもんか」
その通りだった。火星に来てからの時間は時間ではないのだ。非常に長く、非常に短い、時間とは全く別のものなのだ。
彼はスクーターをのろのろと進めた。
元気がなくなったのね。
玉は籠のなかで皮肉にゆれていた。

彼は、いくつかの街を過ぎ大きな街に入った。開拓時代には十万人も住んでいたろうか。その頃は活気に満ち、開発だ、研究だ、木星の衛星だ、小惑星だ、と動きまわっていたのだろう。だが、地球天国化のため全部引揚げてしまった今は哀れなものだった。街にはやはりふっとんだ跡があり中央の高いビルも上の方がなくなっていた。
彼は街路をひと通り回った。そして十人ぐらいの人をみかけた。バルコニーの長椅子に横

になっている者、街をぼんやり歩いている者。家の入口の石に腰かけている者。しかし彼が通っても何の反応も示さなかった。彼はちょっと恥しさを感じ、スクーターを止めた。
一軒の家へ入った。その入る前に両側二軒ずつ調べだれもいないことをたしかめ、いつか会った男の言葉を思い出し苦笑した。
彼は相変わらず精神の大ゆれをくり返し、水を飲み、その家のベットに入った。何十人かはこの街にいるのだろうが全く人気は感じなかった。彼は寝て間もなく絶叫を聞いたようだったが、それは悪夢のうちかもしれなかった。あけがた近く大きな爆発の音を聞いた。これは悪夢ではなかった。
彼はずっとその街にいた。どこに行っても同じことだった。時間の観念はとっくになくなっていたから火星についてどれくらいになったかは全くわからなくなった。玉をみつめ最大の恐怖をくり返した。彼は頭が朦朧としてきた。だが、渇きと玉のボタンを押す時の恐怖は最初と少しも変わらなかった。音のなり終るまでにくり返す過去一切の回転はますます早くなった。体も衰弱したがそれも恐怖を弱める何の役にも立たなかった。
銀の玉はもう表情を作らなかった。彼の内部の表情が一定したからかも知れなかった。玉の光が増したら終りが近いんだ、と考えれば光を増し、失いはじめたら、と思えば光沢がへり、彼を苦しめるだけだった。彼も街の他の住民と全く同じになった。爆発の音にも無感動

になった。しかし、ボタンを押す時の恐怖は変わらなかった。
今まで爆発しなかったのなら、最初のころもっとのんきにしていればよかった。だが、明日まで爆発しないだろうから、今安心して、とはいかないのだった。
彼はむかし地球にあったという神のことを考えたかった。だが、その知識は何もなかった。知っていることは地獄のことだけだった。だが、それ以上悪くなりっこないと保証されている地獄の話は、今の彼にはうらやましく思えた。
彼はある時ちょっと街を出てロケット空港まで行ってみた。金属板を敷きつめたひろい空港はロケットが発着しなくなってから長い年月をへていた。その高い塔の上に誰かいるのを見た。空港事務所から双眼鏡を探してそれをのぞいた。その男も双眼鏡で空を見ていた。万一の釈放を待っているのか、不時着するロケットを待っているのか。おそらくその両方だろう。
新入りだな。彼は双眼鏡を置いて街にもどった。
そして、又長い時間。決して飽きることのない、真剣な、無限の、全く同じくり返し。彼が不満を持った機械文明の完全きわまる懲罰だった。
又、長い時間。彼は狂いそうになり、それを待った。だが、それも許されなかった。もう、どうにもこうにもならなかった。

又、長い時間。彼は絶叫した。
絶叫。自分のなかのものを全部、地球での不満、火星での苦悩を全部いっぺんにはき出してしまうような絶叫をし終えた。周囲の様子が少し変わっていることに気がついた。なんとなくすべてが洗い流されていることに気がついた。玉を見た。玉は表情をとりもどし、見たこともないようなおだやかさを湛えていた。
目が覚めたの。同じことじゃないの。
何が同じなのだろう。ああ、そうか。彼はすぐわかった。地球の生活と全く同じなのだった。いつ現われるかしれない死。自分で毎日死の原因を作り出しながら、その瞬間をたぐり寄せている。火星の銀の玉は小さく、そして気になる。地球のは大がかりで、だれも気にしない。それだけの違いだった。何で今までこのことに気がつかなかったのだろう。
やっと気がついたのね。
玉はやさしく笑った。彼は玉を抱いてボタンを押した。はじめて落着いて押せたのだ。水は出た。彼はそれを飲み、又水を出し、赤い粒を入れて口に流し込んだ。部屋を見回し、ベッドのたえられない汚れに気がついた。
「よーし」

彼は家の風呂場に行った。ひどい汚れの服をぬぎ、風呂のなかに玉を抱えて坐った。コップを外し、ボタンを押しつづけた。音も気にはならなかった。むしろ楽しく響いた。彼は音を継続させ、リズムをつけ、歌を歌った。戸を開け、窓を開き、空気を流れさせ、水を集めた。水は少しずつ風呂のなかにたまった。

彼は地球の文明に復讐できたような気がした。水はさらにたまり、波立ち、あふれた。彼は玉を抱きしめた。今までの長い灰色の時間から解放されたのだった。地球から追い出された神とはこんなものじゃあなかったのだろうか。

彼は目の前が急に輝きでみちたように思った。

《執筆年月》

作品	年月
ボッコちゃん	1958. 1
おーい でてこーい	1958. 7
生活維持省	1960. 9
廃墟	1959. 6
たのしみ	1959. 6
年賀の客	1959. 10
包囲	1960. 4
患者	1959. 6
雨	1960. 5
蛍	1958. 6
愛の鍵	1958. 5
水音／早春の土／月の光／鏡	1959. 10
天使考	1960. 3
冬の蝶	1959. 12
最後の地球人	1959. 1
食事前の授業	1960. 8
セキストラ	1957. 5
空への門	1958. 2
ツキ計画	1960. 7
開拓者たち	1960. 2
宇宙通信／探検隊／最高の作戦	1960. 6
桃源郷	1960. 7
親善キッス	1960. 8
信用ある製品	1960. 7
処刑	1958. 12

人造美人

¥ 300

昭和36年 2月28日発行
昭和45年 7月10日 7刷

著　者　星　新　一
発行者　佐藤　亮　一
東京都新宿区矢来町71
発行所　株式会社　新潮社
電話東京(260)1111(大代)
振替東京　808番
郵便番号　162
印刷所　金　羊　社
製本所　植木製本所

人造美人

ショート・ミステリィ

星新一

新潮社版